

長谷川利春

遺歌集Ⅱ

遺作展

長谷川利路

目次

はじめに

長谷川 利路

遺作展

短歌や俳句を作ること……………

1 頁

大却運

……………

2 頁

色 紙

……………

5 頁

短 冊

……………

31 頁

短歌随筆

……………

45 頁

短歌作品

……………

99 頁

短歌評釈

……………

355 頁

作歌に即しての芸術表現の考察……………

364 頁

巨 石

……………

377 頁

はじめに

平成十九年五月に父利春が逝去し、それまでに発表していた十五冊の短歌小冊子、六千首余りをまとめ、「長谷川利春遺歌集」として出版しました。その後、父の遺品を整理していると、自筆の色紙、短冊、および十数冊のノートや原稿用紙に、書きかけた短歌が見つかりました。これらを出来る限り多くの皆様に見てもらおうと、平成二十年九月に小野市民ホールのコミュニティーセンターをお借りして、「長谷川利春 遺作品展」を開催いたしました。色紙、短冊以外にも、写真集や愛用していた硯なども展示し、沢山の方々に見に来ていただきました。今回その時の展示会の様子と展示物、未完の原稿を含め、「遺歌集Ⅱ 遺作展」としてまとめてみました。

前回の「長谷川利春遺歌集」では、平成七年までに出されたものがほとんどで、平成十年に大動脈瘤で倒れてからは、平成十四年に出したごく短い

「青い丘―第二集」のみでした。いつか出そうと蓄えていたものの、出版するまでの気力が出なかったのだろうと思われます。平成十二年年初「二千年一月八日まっさらの八十一翁胸張り歩む」と、小康を取り戻した時、元気な歌を詠んでいましたが、徐々に病氣・死に対する不安や苦しみ、これまでの人生を振り返って、必ずしも明るくないものが多くなり、悲痛な叫びと思われる歌もあります。晩年に書かれた文字は解読するのが困難で、今回、平成七年以降、病氣を患った前後からの短歌の一部、短歌に関する随筆、ほかの人の短歌の評釈などを、掲載させていただきました。ページ数の関係で、残りは次回作にしたいと思います。

父は、初等教育しか受けておらず、独学で哲学や短歌を勉強していました。日本が裕福になった今日、義務教育は勿論、多くの日本人が高等教育を受けられる時代になっています。しかしながら、恵まれすぎた環境のために、真に創造的な業績が少ないように思われます。授業をサポートバイトに

明け暮れる大学生、学校の指導が悪いとする親たち、登校拒否、校内暴力等、何か受動的な風潮があるようです。これに対し父の短歌を作る情熱は、内部からの要求（内部急迫）に従って起っていたようです。以下に、父の残した随筆の一つを紹介いたします。

「私達は何故作るのか、その根底には大なる呼声があるようです。斎藤茂吉は内部急迫と言っています。短歌も俳句も抒情詩として喜び、悲しみを言葉にします。喜びは生きる影を宿し、悲しみは死の影を宿すものです。生命は生きるものが死を持つものです。そして生きるということは死を越えようとする努力です。言葉というのはその努力が生み出した形です。私達は言葉によって死んでいった祖先の声を聞き、生れて来る者に声を伝えようとします。そこに私は大なる呼声があると思うのです。見出した形に於いて呼び交すのです。過去と未来を一つとする呼び交しを持つのです。私はそこに私達を呼ぶ声があると思います。そしてそれはそれによってのみ私達が

真の自己となる道だと思っています。歌が出来ないとよく言われます。しかしそれはこの大なるものに生れようとする努力であると思っています。明日からも頑張りたいと思います。」

平成二十一年 四月

長男 長谷川利路

追記

本書を作成中、平成二十一年二月二十二日 母 美知子が逝去しました。謹んで両親の霊前に捧げたいと思っています。

合掌

☆市民ギャラリー展示案内☆

長谷川利春

遺作展



期間：平成20年 9月1日（月）～9月13日（土）

場所：コミセンおの1F 市民ギャラリー





長谷川利春 遺作展

長谷川利春は、大正8年1月に小野市住吉町にて出生し、金物卸売業（～平成2年1月）を営むかたわら、西田幾多郎氏の哲学の影響を受け、また一方では短歌をこよなく愛し、多くの作品を作っていました。平成19年5月に永眠するまで（享年89才）、美加志保短歌会第2部選者・発行委員、上田三四二賞実行委員、北播短歌連盟幹事・選者、コミセン下東条短歌教室講師等を歴任し、後進の指導にも熱心で、松尾鹿次氏とともに、小野市における短歌の推進者としての役割を担って来ました。

平成10年10月、第12回全国短歌フォーラム（長野県塩尻市）にて、以下の歌が三席に入賞しております。

～優秀作品～ 竹とんぼ過去へ過去へと飛んでゆき
われに小さきてのひらありき



その他、多くの短歌集を発行しておりますが、今年の7月にこれまで作品（約6000首）を、長谷川利春遺歌集としてまとめました。また、これまでに「満七十才記念 随想・小論集」「初めと終わりを結ぶもの」「自覚的形成」「自己の中に」の4巻を発行しております。

今回、これらの本を展示すると共に、未完の随筆や短歌（現在発行準備中）の一部、自筆で短歌をしたためた色紙、短冊、書簡、及び写真を展示致します。多くの人に故人を思い出して頂ければ幸甚に存じます。

また、本等、部数に限りがありますが、ご所望されれば差し上げますので、ご一報下さい。

平成20年9月 長男 長谷川利路



展 示 会



短歌への思い感じて 長谷川利春さん遺作展

9月13日まで、コミセンおの市民ギャラリーで、「長谷川利春遺作展」が開催されました。

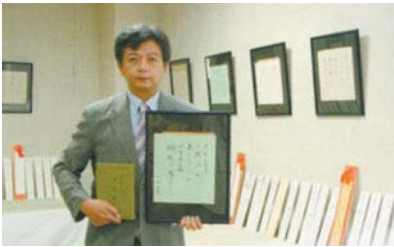
故利春氏は大正8年（1919）住吉町生まれ。金物卸売業のかたわら、独学で短歌や随筆にいましまれ、短歌教室の講師なども務められました。

今回の展示は、小児外科医師の長男利路氏が、六千首余りにのぼる遺作を集めた「長谷川利春遺歌集」を刊行されたのを機に「父の作品をさらに広く知っていただきたい」との思いで展示されました。故利春氏は、「人生の喜び、悲しみ、楽しみ、苦しさ、自然とのふれあい」を心の底から「内部急迫」を感じ、短歌、随筆に表現されておられま

す。一九九八年の全国短歌フォーラム（長野県）で三席に入賞した「竹とんぼ過去へ飛んでゆきわれに小さきてのひらありき」などの作品からは、作者の繊細で情感豊かな人柄が偲ばれます。

利路氏は「未刊作品などが五千首あり、今後、書籍としてまとめたい」と話されていました。

（中番小学校区担当 山本正さん）



展示品の前で父親の短歌を手にする長谷川利路氏

展 示 会



神戸新聞

2008年(平成20年)9月3日 水曜日

亡父の短歌遺作展

小野の
長谷川さん 色紙や短冊280点

昨年五月に八十九歳で亡くなった元北播短歌連府賀面市住「父の筆。四十七年には美志保盟幹事の長谷川利春さん創作への熱い思いを感じてほしい」と呼び掛けて展が、同市王子町のコミニティセンターおので開かれている。約三百八年に小野市で生まれた。十歳選んで展示した長金物卸売業を営む傍ら、



父親の短歌を手にする長谷川利路さん「ミニニティセンターおの入場無料。コミュニティイセリタ」おの ☎ 0794・63・1020

(金井恒幸)

独学で短歌や随筆を執筆。四十七年には美志保短歌会に入会。コミュニティセンター東条短歌教室の講師なども務めた。九八年、父から脳病生活を送ったが、短歌の創作を欠かさなかった。利路さんは、六十余りの遺作を集めて今年七月、長谷川利春遺歌集「を出版。さらに広く作品を知ってほしいと遺作展を企画した。会場には、長谷川さんが色紙や短冊に短歌を込めて書いた短歌をはじめ、愛用のすずりなどが展示されている。一九九八年の全国短歌フォーラム(長野県で三席に入賞した「竹んぼは過去へ過去へと飛んでゆき、われに小さきてのひらありき」の直筆の色紙も展示。利路さんは父が竹んぼを見て「わものころを思い出している感じが想像できるので、一番好きな歌です」と話す。

土改と土堤 今、洲は向
津の勢 日におもひ

女のはさばい、堤のふところ

三郎、おはきとをきふ

舟の勢も、舟りさけ、大なる 同、舟りさけ、ふゆのさ

舟今、ちあひつ、つゆ、行く、この舟、舟りさけ、と、舟りさけ、舟りさけ

舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ

舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ

舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ、舟りさけ



平成9年3月 美加志保短歌会にて



美加志保短歌会 飛鳥にて

短歌や俳句を作るといふこと

短歌や俳句を作るとはということか、私の考えを申し上げたいと思います。私達は生れてきたものです。生れてきたとは生きるべく現れたということです。生きるとは死をもつたものが死と戦つて自分を現わすことです。営みとは死に打克つ努力です。私達はそこに死の方向に悲しみをもち、生きる方向に喜びをもちます。この喜び悲しみを言葉に表わすのが短歌や俳句であり詩であると思います。それではこの言葉に表わすとはどういうことであるのか。例をとつて申し上げますと「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という短歌があります。私達はこの歌を読みますと故郷を眺めて流した仲麻呂の涙が私達の目に湧いて来ます。千年の時間を越えて涙が直につながるので。私は人類が一つのものであり、その現われであると思います。そしてこの人類の一つの命に於いて私達があることだと思ひます。仲麻呂の涙が私達の目に湧いたように、私の涙が私でない人の目に湧くのです。流れ合う涙があり、交し合う微笑みがあるのです。そこに私達はあるのです。ゲーテは「永遠に女性的なるものわれを導きてあらしむ」と言っています。私はこのわれをあらしむものを人類一つの命に見たいと思います。流れ合う涙、交し合う微笑みに見たいと思います。そしてそれは言葉に表わすことによつてあるのです。お互いに明日からも作りたいと思ひます。

大 却 運

本箱を見ていると「現代日本文学全集」の中に斎藤茂吉の名が見えたので取出した。私は茂吉を尊敬している。他の人の歌は私でも作れそうな気がする。しかし読んで氏の歌はとても出来ないと思う。そういう割に私は茂吉を知らない。歌集も読んだことがあるが忘れてしまった。覚えているのは十首程である。文章も凄く精力的だなあと思った位である。だからと言って私は氏の著書を全部読み、全部の歌を暗記している人より理解が足りないと思っていない。理解とは知識より来るのではなくして心気契合より来るのである。

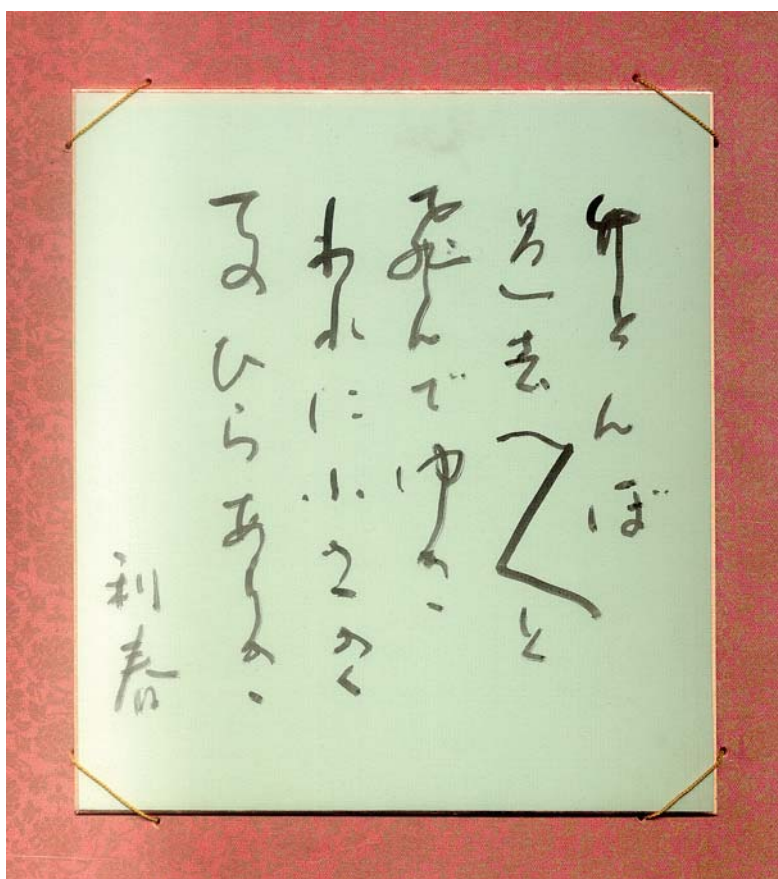
その中に「予が歌を作るのは作りたくなるからである。……この内部急迫から予の歌が出る。如是内部急迫の状態を古人は『歌ごころ』と称えた。『このせずには居られぬ』とは大きな力である。同時に悲しき事実である。方便でなく職業でない。かの大却運の中に有情往来し死去するが如き不可抗力である」と書いている。この大却運とは何なのであるか。広辞苑を調べてみたが無い。しかし大体解るような気がする。曾って何かの本で印度にしゅみ山という仙人の棲む世界一の高い岩山があり、天女が年に一回降りて来て羽衣でその岩に触れ、山が磨滅するのを一却というのを讀んだことがある。大却とは天

地の始まつた時よりの時間ということであろう。運とはその生命の運びであると思う。茂吉は作歌へと動かすものは此処より来ると言うのである。亦「予は予等の祖先の命を尊び味わい常に感謝しているものである。予が創造という語を用いて予の信念を表わすに當つて常にこの深大深遠なる因縁の上に立脚しての論である。この点は貴君とは違ふのである。」と書いている。即ち歌を作るのは却初よりの生命の働きであり、それが日本民族としての我々の祖先に働き、祖先の見出したものを承けることによつて自分の創作があるといふのである。勿論それは歌体を模倣するのではない。精神を承け継ぐのである。彼は「私の歌は出鱈目の歌である」と言っている。出鱈目とは如何なることであろうか。私はそこに作歌に當つて如何なる構えも持っていない氏を見ることが出来ると思う。対象に對面して純一であることである。純一とは対象と自己が其処より出で來つたものを掴もうとすることである。却初より働く力が形作つていくものをさながらに表現せんとすることである。したことを見たものをどのように表現しようとするかにあるのではない。行為を起さしめ、見ることを要求せしめる生命を表そうとしたのであると思う。逆白波の歌、冬原の歌、一本の道の歌等々限らない力の働きを見ることが出来ると思う。形象が時間の深さに於いてあるのである。そこに「この点は君と違ふのである」と言つた所以があると思う。時間に

於いて全て形あるものは移っていく。移っていくとは形が現在に消え現在に生れるということである。この我に消えてこの我に生れるのである。全宇宙は現在として実現し、この我に具現するのである。彼の歌は自己の行動、亦は人間の行動に於いて捉えたものが多い。それは今のこの我が大却運によってあり、今のこの我を把握することが生命普遍の実相を明らかにすることであつたのであろう。私達が捉えれば一私事になるところを全生命の韻きをもつのは天とより言い方がないと思う。

昨日の新聞に全て金属は純粋になるという性質を一変し、鉄も純度九九点九九九%となると錆が出なくなり貴金属の如き輝きをもつと書いてあつた。氏の脳細胞は天によって純化されていたのかも知れない。松尾鹿次さんが氏は北上川の畔に平日頭を抱えて歌一首を作つたと言われていた。我々の到底なし得るところではない。その差が氏との歌の差であると思う。

第十二回全国短歌フォーラム・三席入賞



竹とんぼ

過去へ過去へと

飛んでゆき

われに小さき

てのひらありき

利春

二千
年
一月八日
ハミ翁
胸張り歩む

利春

二千

年
一月八日

まっさらの

八十一翁

胸張り歩む

利春

「なおちゃんに

見られたからね

亀さんが

はずかしいって」

うらうらと照る

利春

「なおちゃんに
見られたからね
亀さんが
はずかしいって」
うらうらと照る

利春

明日のある
ことの不安に
老ひゆくと
子童の横を
通りすぎたり
とーば

明日のある

ことの不安に

老ひゆくと

子童の横を

通りすぎたり

利春

何日よりか
 憂ひととなりて
 未来あり
 つやの失せたる
 手の指のばす
 としはる

熱き血の
 めぐりし記憶
 戦は
 おろかなりしと
 人の言ふとも
 としはる

何日よりか
 憂ひととなりて
 未来あり
 つやの失せたる
 手の指のばす
 としはる

仰向けに
 ベンチにい寝て
 下りくる
 大きく深き
 青空ありぬ
 としはる

蛙らは
土に潜みて
曝れしに白く
冬の日
の照る

利春

蛙らは
土に潜みて
刈株の
曝れしに白く
冬の日
の照る

利春

上履が

なくなり靴の

片方が

無くなり仔犬

育ち来りぬ

利春

上履が
なくなり靴の
片方が
無くなり仔犬
育ち来りぬ

利春

寝ころびて
はくちやく
るあり
煎餅とりて
はりはりと噛む
としはる

利春

寝ころびて
淡くなりゆく
吾のあり
煎餅とりて
はりはりと噛む
としはる

としはる

古き家具
捨てんと積みし
自動車の
傍へに母の
沈黙のあり

利春

古き家具
捨てんと積みし
自動車の
傍へに母の
沈黙のあり

利春

一望に
青く草木の
地を覆ふ
日本とおもひ
坂下りゆく

としはる

一望に
青く草木の
地を覆ふ
日本とおもひ
坂下りゆく

神前の
木に我らの
むすばれて
知らざる明日を
誰も持ちある

利春

神前の
木に我らの
むすばれて
知らざる明日を
誰も持ちある

利春

りんりん
満ちて渡れる
虫の声
届ける涯の
黒く眺む
としはる

背に溢む
光りの差して
冬眠の
虫潜みある
土に沁み入る
利春

平かに
山を写せる
水となり
冬は乱せる
魚かげを忍ず
利春

春のこいの
 鳴き声は青に
 すくすくふり
 道は花も
 春のこいの
 鳴き声

あじさいの
 咲きたる青に
 すみとふり
 道は殖もる
 寺門に至る
 としはる

神前の
 木に紙占を
 結ばれて
 誰も御らざる
 明日をもつらし
 利春

神前の
 木に紙占の
 鳴き声は
 鳴き声は
 鳴き声は
 鳴き声は

満天の
 星の光りの
 ふりそそぎ
 雌呼ぶ虫の
 声わたりゆく

満天の
 星の光りの
 ふりそそぎ
 雌呼ぶ虫の
 声わたりゆく

すきとほる
山のりまに
なみ
男のりして
下りて来にけり

利春

すきとほる

山の日差しに

なるもみじ

男かざして

下りて来にけり

利春

春となる

光りの呼べる

はらの声

つくしは土を

被きもたぐる

利春

春となる
光りの呼べる
はらの声
つくしは土を
被きもたぐる

利春

夕陽は

犬と吾とを

染めてをり

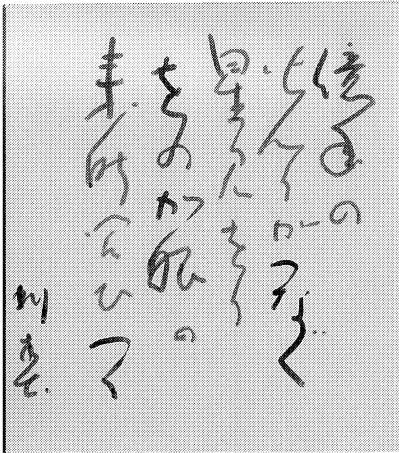
無為に過ぎたる

ひと日の歩み

利春

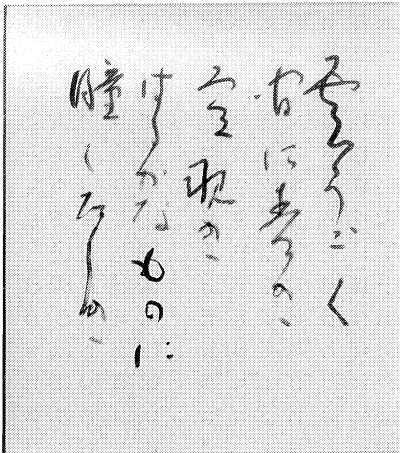
夕陽は
犬と吾とを
染めてをり
無為に過ぎたる
ひと日の歩み

利春

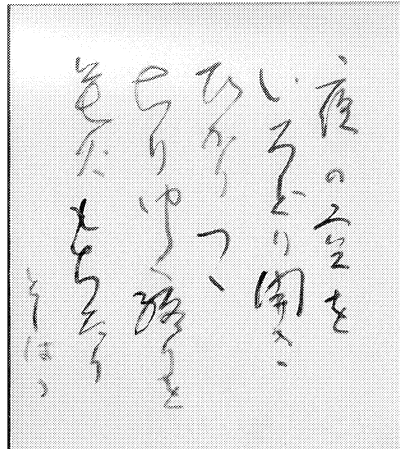


億年の
光りがつなぐ
星にをり
をのが眼の
来時食ひつく

利春

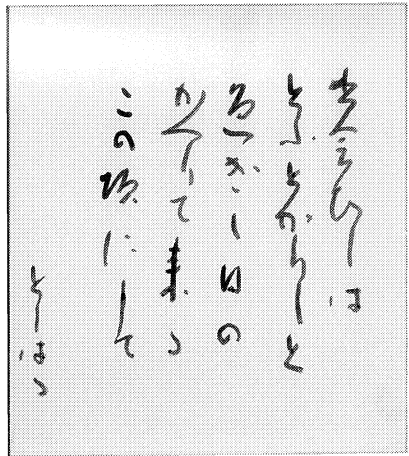


雲つづく
宙に青き
空覗き
はるかなものに
瞳したしき

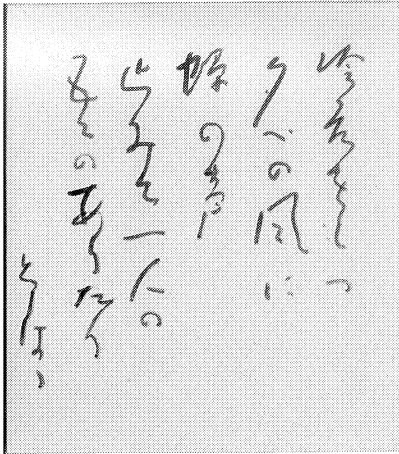


夜の空を
いろどり開き
ひかりつつ
ちりゆく終りを
花火もちたり

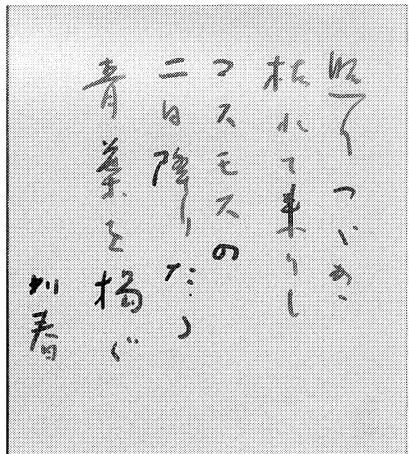
としはる



出會ひしは
とふとかりしと
過ぎし日の
かくして来る
この頃にして
としはる



冷えをもつ
タベの風に
蟬の聲
止みて一人の
吾のありたり
としはる



照りつづき
枯れて来りし
コスモスの
二日降りたる
青葉を掲ぐ
利春

夕映えに
水けり翔ち
る羽の如
わたり 若に
かへりゆく
たり
利春

夕映えに
水けり翔ちし
二羽の鳩
亘る茜に
かくれゆきたり
利春

夕ぐれは
宵の言葉を
携へて
己れ問ふべき
吾となりゆく
利春

夕ぐれは
宵の言葉を
携へて
おのれ肉に
まじりゆく
利春

幼子は
まじりて
手を振れり
おのづからにて
としはる

幼子は
窓より覗き
手を振れり
瞳合ひたる
おのづからにて
としはる

目を上げて
バス停迄の
はるかなく
一足づつの
あゆみをつまぶ

利春

目を上げて
バス停迄の
はるかなり
一足づつの
あゆみを運ぶ

利春

てのひらに
うけるものとして
雪のふり
幼ら居れば
歓声のあり

利春

てのひらに
うけるものとして
雪のふり
幼ら居れば
歓声のあり

利春

台風の
過ぎたる空の
すみとほり
今し峯より
月さしのぼる

利春

台風の
過ぎたる空の
すみとほり
今し峯より
月さしのぼる

利春

櫻の木に
 色移りゆく
 雨蛙
 午の庭前
 もの音のなく
 利春

枯草の
 間に赤き
 葉のありて
 斜となりし
 光が透す
 利春

しもとけて
 葉のみみじの
 色まさり
 原の展ぐる
 冬の絢爛
 としはる
 利春

移りつつ、
 回りめし独楽は
 一とこころ
 置く軸心に
 回り澄みゆく
 かき

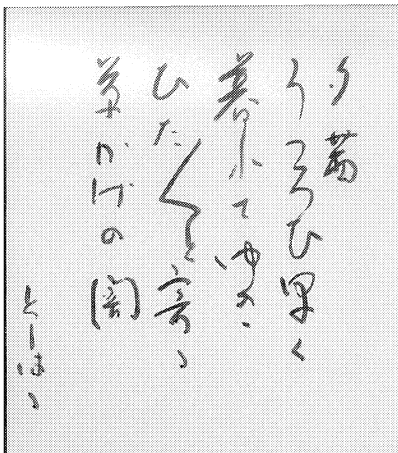
移りつつ
 回りめし独楽は
 一とこころ
 置く軸心に
 回り澄みゆく
 利春

はつなつの
 路のかほりは
 母の声
 吾に食べよの
 言葉すまはす
 としはる

はつなつの
 路のかほりは
 母の声
 吾に食べよの
 言葉すまはす
 としはる

流れ来し
 水に登れる
 魚のあり
 水の動けば
 おのずからにて
 としはる

流れ来し
 水に登れる
 魚のあり
 水の動けば
 おのずからにて
 としはる



夕茜

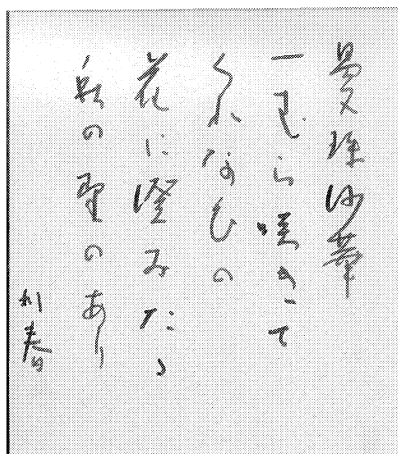
うつろひ早く

暮れてゆき

ひたひたと寄る

葉かげの闇

としはる



曼珠沙華

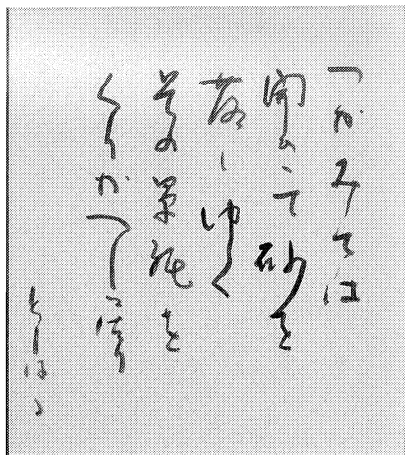
一むら咲きて

くれなひの

花に澄みたる

秋の聖のあり

利春



つかみては

開きて砂を

落しゆく

その単純を

くりかへし居り

としはる

ほくほくと
われは食ふをり
焼栗の
はぜし一夏の
日差しを
とほ

ほくほくと
われは食ふをり
焼栗の
はぜし一夏の
日差しを
としはる

寝返りて
顔にのせたる
をさな脚
肉やはらかく
抱へて移す

利春

寝返りて
顔にのせたる
をさな脚
肉やはらかく
抱へて移す

利春

野焼せし
跡の堤の
平らにて
つくし生ふべき
光りわたりぬ

利春

野焼せし
跡の堤の
平らにて
つくし生ふべき
光りわたりぬ

中心に
 廻る渦紋の
 美しく
 でんどん虫は
 木の幹這ひぬ
 としはる

中心に
 廻る渦紋の
 美しく
 でんどん虫は
 木の幹這ひぬ
 としはる

空の青
 かくふかくして
 ひる飯を
 食べゐるひまに
 雨上りたり
 としはる

空の青
 かくふかくして
 ひる飯を
 食べゐるひまに
 雨上りたり
 としはる

一日を
 いもほり自然
 体験の
 人等は意を
 讃へかへりぬ
 としはる

一日を
 いもほり自然
 体験の
 人等は意を
 讃へかへりぬ
 としはる

ふたつひの
うすくさをは
しやうあつ
そを押しけ
かに咲かぬ
うは

くれないひの
うすき色付
しげりある
葉を押のける
力に咲きぬ

としはる

ほつほつと
つくしの土を
被き出で
背の温かき
あゆみなりけり
利春

ほつほつと
つくしの土を
被き出で
背の温かき
あゆみなりけり
利春

かえりたる
田新は草より
けく水と
あかしてをり
れまを

かくれたる
田新は草より
尾の見える
ゆるゆる水を
動かしてをり

利春

ひとまわり
大きくなりて
水ぬるむ
渚に魚の
せびれをふるふ
利春

水にうつる
月のひかりに
白き蛾の
とびゆくときぞ
いのちかなしき
利春

エンジン
の音過ぎてゆく
夜の空
きびしき聖者の
言葉をさがす
利春

ひとまわり
大きくなりて
水ぬるむ
渚に魚の
せびれをふるふ
利春

水にうつる
月のひかりに
白き蛾の
とびゆくときぞ
いのちかなしき
利春

エンジンの
音過ぎてゆく
夜の空
きびしき聖者の
言葉をさがす
利春

秋原の
葉しょうじょうと
枯れてゆき
澄める地平に
ひとみを移す
かきもと

秋原の
葉しょうじょうと
枯れてゆき
澄める地平に
ひとみを移す
利春

わたる日に
山の梢の
けぶらひて
萌す若芽の
生きもちたり
としはる

わたる日に
山の梢の
けぶらひて
萌す若芽の
生きもちたり
としはる

外燈の
あかりに飛びて
死にゆきし
虫のまなこを
ゴッホにつなぐ
かきもと

外燈の
あかりに飛びて
死にゆきし
虫のまなこを
ゴッホにつなぐ
利春

風に乗り
 羽根を揺らし
 おのずから
 空に遊べり
 利春

風に乗る
 羽根を揺らし
 おのずから
 空に遊べり
 利春

半眼を
 ひらきし思性の
 しずけさに
 十年前の
 佛頭ありぬ
 としはる

半眼を
 ひらきし思性の
 しずけさに
 十年前の
 佛頭ありぬ
 としはる

慾望の
 淡くなり来て
 深みある
 若き声聞く
 慾望尊し
 利春

慾望の
 淡くなり来て
 深みある
 若き声聞く
 慾望尊し
 利春

あけびの実
熟れぬて幼き
日の還り
歩みしたしき
山路となりぬ
としはる

のむ水が
汗に出ずるを
拭ひおへ
かへり来りし
あぐらをかきぬ
としはる

灰色に
色もつ空に
灰色の
やや濃き煙が
一すじのぼる
利春

のむ水が
汗に出ずるを
拭ひおへ
かへり来りし
あぐらをかきぬ
としはる

草の枝
 うちゐる堤
 吹きすぎる
 風とはしれる
 犬をよびたり
 利春

草の枝
 うちゐる堤
 吹きすぎる
 風とはしれる
 犬をよびたり
 利春

草の枝
 うちゐる堤
 吹きすぎる
 風とはしれる
 犬をよびたり
 利春

草の枝
 うちゐる堤
 吹きすぎる
 風とはしれる
 犬をよびたり
 利春

草の枝
 うちゐる堤
 吹きすぎる
 風とはしれる
 犬をよびたり
 利春

もに水
 かけすにちて
 まやなれば
 救ひのこそく
 るふりそめぬ
 としはる

花に水
 かけずに出でて
 来しなれば
 救ひのごとく
 雨ふりそめぬ
 としはる

水に映る
 月のひかりに
 白き蛾の
 とびゆくときぞ
 いのちかなしき
 としはる

水に映る
 月のひかりに
 白き蛾の
 とびゆくときぞ
 いのちかなしき
 としはる

りのひらに
 月をいばし
 溢れさす
 しずかな眠り
 われのもつべく
 としはる

てのひらに
 月光しばし
 溢れさす
 しずかな眠り
 われのもつべく
 としはる

よしの山
はなの下より
はなの下
仙峯 とはう

よしの山
はなの下より
はなの下
仙峯 としはる

朝顔に
つるべ
とられて
もらひ水

利春

朝顔に
つるべ
もらひ水

利春

秋ふかし
隣は
すゝ人ぞ

芭蕉
利春

秋ふかし
隣は
何を
する人ぞ
芭蕉
利春

すくすく
鐘を敲く
かねの音
すずしさや

すずしさや
鐘を離るる
かねの音
燕村 としてはる

智門は高きを
優となし
慈門は低きを
妙となす
公顯 利春

智門は高きを
優となし
慈門は低きを
妙となす
公顯 利春

ゲイシャの歌
居してパンを
食うては
夜との臥床を
ほろりし人
知らずいと高き
此身のみまを
とほ

大いなる海は一つのたゆたひに
岸壁おつゝ波の返せり

利春

大きな海は一つのたゆたひに
岸壁打てる波の返せり

利春

行き交す列車に乱るる髪の毛の
吾あるは常に一人なりとき

利春

ものいのも極まるころは炎なす
山の緑とて出会ひ来しなり

利春

もののいのち極まるところは炎なす
山の緑とて出会ひ来しなり

利春

しろがねのおく露しげき草原と
なりて時鳥のとほりすぎたり

利春

しろがねのおく露しげき草原と
なりて時鳥のとほりすぎたり

利春

うつくしきみどりに和布もどされて
はりはりと鳴る胡瓜を食べる
利春

うつくしきみどりに和布もどされて
はりはりと鳴る胡瓜を食べる
利春

夕闇にひしとよりくる吾子の手の
そのやはらかく吾は父なり
利春

万両は赤き実を一着けぬたり
音なく雪のふり積りゆく
利春

てのひらにしたたるジュース白桃の
甘きをわれはかぶりゆきたり
利春

てのひらにしたたるジュース白桃の
甘きをわれはかぶりゆきたり
利春

半袖とびし輕さに春風の
吹きくるるを歩みゆくかな

半袖となりし輕さに春風の
吹きくるる道を歩みゆくかな

利春

背に心ゆく日は早春を伝へて
種子朝顔のやさしき眠り

利春

背に沁みる日は早春を伝へて
種子朝顔のやさしき眠り

利春

一夜経て暮るる胡瓜の浅漬は
茶を飲む口にはりと鳴る

一夜経て青深き胡瓜の浅漬は
茶を飲む口にはりと鳴る

利春

平かに広き水面は還るべき
心がかそけき吾が息きこゆ

利春

舟木湖の堤の葉の泡もつは
星かへるか水に映さむ

利春

舟木湖の堤の葉の泡もつは
星かへるか水に映さむ

利春

窓開けて風の力なる吾となり
葉摺ふの音の伝はり来る

利春

ゆらゆらと風吹くままに空を行く
白き雲ありおのずからにて

利春

ゆらゆらと風吹くままに空を行く
白き雲ありおのずからにて

利春

かすといふ傘断りて降るとなき
五月の雨をほほに遊ばす

利春

かすといふ傘断りて降るとなき
五月の雨をほほに遊ばす

利春

水と花映し合ひおりみず色の
ふじさいの花重みに垂るる
利春

水と花映し合ひおりみず色の
あじさいの花重みに垂るる

利春

渾身のかで泣けりみどり児の
声は昨日より孫等の来る
利春

渾身のかで泣けるみどり児の
声は昨日より孫等の来る

利春

美しき女の説話の輝きに
秋澄む月は空を渡りぬ
利春

美しき女の説話の輝きに
秋澄む月は空を渡りぬ

利春

吾の雲藤村の雲小諸なる
雲のふかきをゆるゆる渡る
利春

吾の雲藤村の雲小諸なる
雲のふかきをゆるゆる渡る

利春

饒舌の客を送りてあほむけに
一人となりし室に寝ねたり
利春

饒舌の客人送りてあほむけに
一人となりし室に寝ねたり

利春

磨り減りて凹む石階詣で来る
人は悲みもちて祈りき
利春

磨り減りて凹む石階詣で来る
人は悲みもちて祈りき

利春

夕闇が点す星光はるかなり
太初に腫かへりゆきたり
利春

夕闇が点す星光はるかなり
太初に腫かへりゆきたり

利春

ゆるみし空に目を上げ窓にほす
白きシートに日の照りおよぶ
利春

ゆるみし空に目を上げ窓にほす
白きシートに日の照りおよぶ

利春

草枯れし池の堤の広くして
尚微せざるひとりの歩み

利春

草枯れし池の堤の広くして
尚微せざるひとりの歩み

夜の風に落ちて散ばる葉のいくつ
おどしき朝の光りが照す

利春

夜の風に落ちてちらばる葉のいくつ
おどしき朝の光りが照す

空ふかく雲は形をなしてめん
吾子はわが手に手をおき眠る

利春

空ふかく雲は形をなしてめん
吾子はわが手に手をおき眠る

朝よりの雨にこもりてあたりしが
声する方に向かむと立ちぬ

利春

朝よりの雨にこもりてあたりしが
声する方に向かむと立ちぬ

さきばさきつひひびくと南くとさつ
さきふくもつ
利春

雪に雪つもるひびきを聞くと立つ
夕ほそほそ雪ふりつもる

利春

月光のといふ限りを夜の澄み
身を照されて歩みゆくかな

草を見ぬ湖の岸の水澄みて
波は岩より岩へと濡らす

利春

月光のとどく限りを夜の澄み
身を照されて歩みゆくかな

利春

草を見ぬ湖の岸の水澄みて
波は岩より岩へと濡らす

利春

吹く風に身を挙げたる幼児は
ひたひ露はに走り出したり
利春

吹く風に声を挙げたる幼児は
ひたひ露はに走り出したり

利春

このところ人の榮えて亡びぬと
木標一つ原に立ちより
利春

このところ人の榮えて亡びぬと
木標ひとつ原に立ちおり

利春

花の咲く木を植えたりき生きの日の
愛しき眼を母の托しぬ
利春

花の咲く木を植えたりき生きの日の
愛しき眼を母の托しぬ

利春

一枚の蒲団と言へど来所聞え
体温め冬の夜を寝る
利春

一枚の蒲団と言へど来所聞え
体温め冬の夜を寝る

利春

透きとほる炎となりて燃焼は
目が完結を遂げてゆきおり
利春

透きとほる炎となりて燃焼は
目が完結を遂げてゆきおり

利春

億光年星の光りの顔を差す
ことの不思議に歩みゆくなり
利春

億光年星の光りの顔を差す
ことの不思議に歩みゆくなり
利春

手を握り脚を伸ばして泣く声は
明日の吾家を継がむ力ぞ
利春

手を握り脚を伸ばして泣く声は
明日の吾家を継がむ力ぞ

利春

夕庭に風しずまりて一隅の
秋海索の紅ぞ今なる
利春

夕庭に風しずまりて一隅の
秋海索の紅ぞ今なる

利春

霜のなき四五日つづき蚕室の
育ちゆけるは葉を上向けぬ

霜のなき四五日つづき蚕室の
育ちゆけるは葉を上向けぬ

白髪と禿の頭を指し合ひて
久方ぶりの挨拶をする

利春

白髪と禿の頭を指し合ひて
久方ぶりの挨拶をする

利春

古しき羽織じんべに直し母の着ぬ
黙して欲することのなかりき

利春

茶を捧げもちくる歩みおのずから
しづかな室の一人となりぬ

利春

古しき羽織じんべに直し母の着ぬ
黙して欲することのなかりき

利春

茶を捧げもちくる歩みおのずから
しづかな室の一人となりぬ

利春

棕櫚の葉の半ばより折れ下りぬ
今日は風なき冬のしずけさ

利春

棕櫚の葉の半ばより折れ下りぬ
今日は風なき冬のしずけさ

利春

いづれも我は我に在るし
利春

はるかなる灯り点もりて今日生きし
いのちを吾はわれに確かむ

利春

おばきゅはテレビの漫画にて
一ますとくに我はよろこぶ
利春

おばきゅはテレビの中の漫画にて
へまするときに我はよろこぶ

利春

夕闇の覆ひ来る中水白し
帰りて己を問はんと欲す
利春

夕闇の覆ひ来る中水白し
帰りて己を問はんと欲す

利春

すきとほる水が香りをやしなひし
芹を食べよと出して下さる
利春

すきとほる水が香りをやしなひし
芹を食べよと出して下さる

利春

ふり上げしころにすや槌の音
川の向ふに亦建ちおりぬ
利春

ふり上げしころに聞ゆる槌の音
川の向ふに亦建ちおりぬ

利春

煙のみ見えたりしがあかと
野火頭ち来る夕となりぬ
利春

煙のみ見えておりしがあかかと
野火頭ち来る夕となりぬ

利春

閑したる障子に光り寂かにて
距てし蟬の声のこもらふ
利春

閑したる障子に光り寂かにて
距てし蟬の声のこもらふ

利春

しろくと水に光り残りあて
見えろし山も闇に沈みぬ
利春

しろくと水に光りの残りあて
見えろし山も闇に沈みぬ

利春

ふりむかず鮒を喰へし猫の去り
冬 尔は土のあらはにありぬ

利春

ふりむかず鮒を喰へし猫の去り
冬原は土のあらはにありぬ

利春

晩春の日は曇る水廻り
泥鰌は葉によりゐて浮ぶ

利春

晩春の日は混じる水面
泥鰌は葉によりゐて浮ぶ

利春

照りつづき枯れて来りしコスモスの
二日ふりたる青葉をかかぐ

利春

照りつづき枯れて来りしコスモスの
二日ふりたる青葉をかかぐ

利春

よしや世の中飲んだがましよ
丁司の建てたる甍もなく

よしや世の中飲んだがましよ
丁司の建てたる甍もなく

利春

短
歌
隨
筆

短歌や俳句の背景

短歌や俳句は日本語特有のものとして他に類を見ない詩型であると言われる。詩は民族の生命形成の表現である。各民族はそれぞれ特有の詩をもつ。生れたところを環境としてそこに働き死に、環境に作られ、環境を作った限らない過去からの情緒的結晶が詩である。その意味に於いて詩は他の民族の理解を拒むものをもっていると思う。それが短歌や俳句に於いて特に言われるのは何によるのであろうか。

私は短歌や俳句が生れたのは日本の自然にあると思う。日本程四季の移り変りの鮮やかなどころはないと言われる。移り変りとは何か、生命は生死に於いて生命である。私は今ある生命が減んで新たな生命が生れてくることであると思う。死にかなしみ、生によるこぶのである。鮮やかであるとは敏くなることである。一陽来復と共に野に緑が溢れ、花が咲き満ちる。人はそこに花と歌い、花と踊って命のよろこびを分ち合う。併しそれも束の間に花は散り春草は枯れる。そこに共に生きたが故の悲しみが生れ、それに自己の生死の影を宿し見るのである。年年歳歳のよろこびかなしみの反覆は生に死を宿し、死に生を宿しゆくのである。咲き盛る花に命のはかなきを思い、散りゆく花に爛漫たりし日を偲ぶの

である。そこに感覚の無限の分化が生れる。僅かな色の變化、形の變化の中に生の影を見、死の影を見るのである。形とはよろこびかなしみに映された生の影、死の影を対象がもつことである。斯くして対象は生の影、死の影を映して無限の分化をもつものとなる。それが感覚が鋭くなり繊細となることである。斯かる無限の対象の分化を生死をもつものとして統一し、分化と統一を自己の働きとするものが心である。人格としてのわれである。

私は短詩型としての短歌や俳句は斯かる生命形成の分化・統一の洗練の中から生れたのであると思う。鮮やかな四季は一瞬一瞬の移ろいの中に生死を宿すのである。一瞬の生の影に一つの形を見、一瞬の死の影に一つの形を見るのである。そのときに自己を対象に映し、対象を自己に映すのである。そこに如何に短い言葉によって対象と自己が形を生み、自己と対象が形の中より生れるかということが問われると思う。斯くして短歌や俳句は日本的形成の必然であつたと思う。

私は抒情詩はその本質に於いて短詩であり、長詩は叙事詩か亦は思想詩であると思う。日本にも昔長歌があつた。私は読んだことがないので語る資格がないが叙事的亦は思想的でなかったかと思う。今はそれを歌う人はいない。いないということは日本の心の形成を指向していないということであろう。私は日本的形成が叙事的ではないということは日本

民族が他民族との激しい対立を持たなかったことに因ると思う。亦自然も対立的ではなかった。そこに見られるものは対立の根底に大きな一があるということである。営みの根底にこの一が働くということである。それが共感である。聖書などでは斯かる一が契約として現われる。併し日本では直接の事実として現われるのである。そこに刹那としての現在に形を見ていくのであると思う。

風 流

今ではあまり言わないが、私達の小さい頃は短歌や俳句を風流の道と言い、作る人を風流人と言ったものである。風流とは如何なるものであろうか。私はそこに日本の生命形成の特質の一つがあるように思う。短歌や俳句は外国語に翻訳することが出来ないと言われる。それは日本人が日本の風土に於いて形成し来った独特の美ということである。そこに我々は生命の形をもったということである。それを要約し、言表したのが風流であると思う。

日本人の繊細な感覚は四季の鮮かな推移によって養われたと言われる。短歌や俳句は移りゆく微妙を人に映すときおのずから言葉に凝固したものであると思う。私は斯かる四季の推移を祖先は風に見たのであると思う。風は形無きところより現われて来る形である。そしてそれは四季を超えたものである。風は四季ではない。しかし最も鋭く、最も繊細に四季を伝えるものである。寒風が漸く頬に和み出してくると、野に浅緑の毛 となり春風が花を運んで来る。それも束の間に吹雪となつて散る花は過ぎ行く季と共に春愁の思いを呼ぶものである。春が過ぎると陽の透く若葉をそよがせて吹き来る風が半袖となった腕を

洗つてくれる。私達は身を吹き抜けて地平に走る風に初夏の爽快を満喫するのである。それが過ぎると地を灼く熱風に猛々しい夏を知るのである。猛暑に悩まされた皮膚は秋風の僅かな冷えに敏感である。冷えがもたらした透明な風が青空を何処迄も高く押上げて行く時、私達は秋を感じ救済を見るのである。そして野分に草が枯色となり、木枯しに一年の滅びを見る時我々は悲傷の思いに言葉を失うのである。

私達は四季の現われとして春の花、秋の月、冬の雪を語る。しかしそれは四季の特殊な内容として、四季を網羅するものではない。私は風に日本の生命形成の心を見たのではないかと思う。四季を映し、映すことによつて感覚を養い、生命の形を見出したものとして、形なくして形に出で、四季をあらしめるものとしての風は形の根元の意味をもったと思う。私達は四季の鮮やかな色彩を愛すると共に移るものを風に見立てた飄然たるものを愛するのである。四季を見る目の私の飄然たるを愛するのである。そこにそこより対象と我が生れる世界がある。私は風流という言葉はここより生れたのではないかと思う。

短歌と身体について

ロダンは、ギリシャの彫刻は、両肩と両足に於いて四つの面をなしている、それは生命の調和の姿である、それに対してミケランジェロの作品は二つの面である、それは苦悩の姿であると言っている。そしてミケランジェロに深く傾倒した彼は作品「考える人」に於いて、上体を深く折り曲げた姿勢によって、人生の苦悩を徹底的に追求している。

短歌とは抒情詩である。感情による生命の表現である。感情とは何か、私達は生命であり、生命は身体的に自己を形作る。私は生命が自己を形作っていく動的なるものが感情であると思う。私達はその激情に於いて身体を忘れる。そして最も静的な睡眠に於いて感情を失う。身体が動く時、身体は情緒としてあるのであると思う。顔の動きは表情としてあるのである。それは顔の動きは感情の動きとしてあることである。

私達は生命として生きているものが死を持つものである。そして身体は力として、力の表出に於いて死を克服して生の姿を打樹てんとするものである。そこに生は喜びとして、死は悲しみとして現れ来るのである。力の表出に於いて死を克服する時に私達は意識を持つ。そして意識に映すことによって世界は無限の展開を持つのである。愛憎はそこに生れ

るのである。斯かる無限の展開に於いてより深大なる喜び悲しみを見出すのが芸術である。意識に再生させることによってこの我の内容となるのである。それが芸術である。例えば舞踊の如きも、体験した動作が意識の再生に於いて、間然することなき感情の秩序を持つのであると思う。短歌の如き詩は意識の内容としての言葉による表現としてより高次なるものであると思う。言葉は記憶と想像を持つものとして、身体の瞬間性に対して、永遠として時間を包むものである。そこに文字による表現の苦しみがある。併しそれによって深き喜び悲しみに接し得るのである。

作歌について

先般岡野弘彦氏が来られた。私は耳が遠いので邪魔になると思つて行かなかつたのであるが、その後松尾さんが紹介された記事の中に私と見解を異にすると思われるものがあつたので少し書いてみたいと思う。

氏は短歌は訴えるものと言われたという。私はそこに疑義を抱くのである。私は全て形を表現として捉えんとするものである。表現とは内なるものを外に形において見ることである。内なるものとは何か。私は内を外と別にあるのではないと思う。私達は生命として、食物を摂ることによつて身体を形作つていくものである。斯かる形作る働きにおいて食物を外とし、身体を内とするのである。形成作用において外と内があるのである。内と外とをもつものとして、内としての身体を形作るために外としての食物を獲得するのは努力である。外を内とする機構を身体はもつのである。そこに生命の発展があるのである。外を内とし、内を外とする機構の形成が生命の発展である。身体と食物として対立しつつ、内と外は一として形を見出していくのである。生命形成は内外相即としてあるのである。

私は人間生命を自覺的生命として見んとするものである。自覺的生命とは内と外とが対

立を超えて、世界として一つの発展をもつことである。身体が技術的身体となり、物が製作物となることである。私は芸術も斯かる自覺的形成の一環として捉えんと思うものである。そして発展の方向を身体がもつ情緒の表出が、身体のもつ欲求を超えて純なる情緒の発展を見たところにあると思うのである。色が、音が、涙が、ほほえみが身体の隷属を放たれてそれ自身のよろこびかなしみの形相を展開するのである。

生命の形成は内と外の一として風土的である。私は日本の芸術は日本の風土に生命を映し、生命に風土を映した無限の形成であると思う。短歌も亦斯かる形をもつものとして成立するのであると思う。稲を植え酒を造り、領ち食べ、乏しきを嘆いた喜び悲しみが個々の事象を超えて言葉につなぎ、消えゆくものを内にもつ大きな生命を共有したところに成立したのであると思う。

私は斯かる共有は全ての人間が生命の完結をもつところにあり得ると思う。私達はホモサピエンスとしての百四十億の脳細胞と六十兆の細胞をもつと言われる。全ての人が同一の人体の構造をもつのである。斯かる同一の上に遺伝子の文字の差異をもつのである。それは一つの世界の個性としてあるということである。全ての人が生命の完結をもつということは、全ての人が自己完成をもつということが世界が自己完成をもつということである。

私は全ての人が世界を映すところに短歌の発展があると思う。訴えるのではなくして共感し、相照らすのである。単に人に対するのではない。私の根底に還ることによって人に対するのである。

短歌表現に於ける主観について

二月号の井上実枝子氏の一首の中に「先月号のH氏の一首抄の中に」と書いて主観の問題が取り上げられていた。H氏とは前後から押して私のことであろうと思うので、私が何故に主観を不可とするかを論じて皆様の批判を仰ぎたいと思う。

私は短歌が抒情詩である限りよろこびかなしみの表現であり、主観としての観念の把握でなければならぬと思う。観念とは世界の求心的把握として、われわれはそれによって自己を確立していくのである。言葉による表現として短歌も亦自己発見をその根源にもたなければならぬと思う。斯かる自己発見をわれわれは観念にもつのである。

唯私が言いたいのは嬉しいという言葉は、嬉しいということではないということである。幾度も言う如くわれわれの生命は内外相互転換としてある。外としての米や野菜を食べて身体を形作っていくのである。斯かる生命形成の充足が喜びであり、欠乏が悲しみである。外はわれならざるが故にその獲得は喜びであり、欠乏は悲しみであるのである。

勿論我々の喜び悲しみはそれに尽きるものではない。人間は言葉をもつことによって食・性・自己防衛の本能の根元に還り、永遠の前に立つことによってさまさまの哀歓の壁

をもつ、個性・愛・聖等を生命形成の内容とするものとなるのである。併しそれが生命である限り充足と欠乏を喜び悲しみの原型としてもつことに変りはないと思う。

故に喜び悲しみを表現しようとすれば、その充足や欠乏の状態を言えばよいのである。例を俳句にとれば「大晦日隣は餅搗く杵の音」これで悲哀は表現されつくしているのである。若しこれに「子等は如何なる思ひに聞くらん」と主観を加える如きは詩性を殺すことに他ならないのである。

人間が社会生活を営み、言葉によつて意志交換を行う限り、観念の根底に事実があり、事実の根底に観念があるのである。事實はわれわれが其の中に生き、それに面するものとして短歌に言われる具象であり、具体である。観念はその根源としての具体の中に消え、具体の中より生れることによつて澁澗たる清新さをもつことが出来るのである。観念は形成的生命の内容として、無限に動的でなければならぬ。世界形成的でなければならぬ。それは創造的転身をもつことである。

私が具体で捉えなければならないというのは、観念が具体の中に消えよということであり、それは亦具体の中より生れることである。そして私はそれが観念を更に深めていくものであると思うものである。観念樹立とは初めに言つた如く自己の樹立であり、観念の深

化は自己の深化であり、そこに真の詩精神を見んとするものである。

桜花と作歌

正月なので美しいことを書いてみたいとおもう。岩波書店の戦後五十年の『世界主要論文選』を読んでいると、大岡信の『言葉の力』の中に面白い文章があった。少々長くなるが引用したいとおもう。

『京都の嵯峨に住む染色家、志村ふくみさんの仕事場で話していた折、志村さんがなんとも美しい桜色に染まった糸で織った着物を見せてくれた。そのピンクは淡いようにでいて、しかも燃えるような強さを内に秘め、はなやかでしかも深く落ち着いている色だった。その美しさは目と心を吸い込むように感じられた。『この色は何から取り出したのですか』。

「桜からです」と志村さんは答えた。素人の気安さで、私はすぐに桜の花びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。実際はこれは桜の皮から取り出した色なのだった。

あの黒っぽいゴツゴツした桜の皮からこの美しいピンク色がとれるのだという。志村さんは続けてこう教えてくれた。この桜色は一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮を貰ってきて染めると、こんな上気したような、えもいわれぬ色を取り出せるのだ、と。』

私はこれを読み乍ら、思いを短歌の創作に結び付けて行つた。桜の花は雄花だけで営みではなく、木の全体生命の営みによって現はれるのである。木の全てがああ美しい花の色を創出してゆくのである。私達はよく歌の出来ない悩みを聞く。この悩みとは何なのであろうか。私は言葉が現はれんとして、言葉が全生命たらんとする内奥の努力ではないかとおもう。歌を作るものにとつて出来た歌は花である。そこに私は皮膚の下から血の中迄、言葉を循らさなければならぬのだとおもう。目も手も言葉と化すのである。斯くして出来るのは歌だけではなくして、その人の匂ひとか氣品といったものが同時に備はつてくるのであるとおもう。禅宗の坊さんは座禪を組むことによつて一つの境地に達した時に、体にアルファ線とかいうものが生まれてくると言はれる。私は私達が全身を言葉とする時、表現としての言葉を持つ時、身体は新しいものを加えているのであるとおもう。身体は常に内が外に現れ、外が内を作るのである。そこから自己への信が生まれるのである。

生命は全て自己の形を実現しようとする。それが止まったとき、それは死である。私達は人間である。人間とは言語中枢を持つ動物である。言葉による新しい形を生んでゆくのが生命形成である。新しい形を生まない言葉は駄辯である。新しい形を生むためには苦悩と努力が必要である。美しい自分を作るために今年もお互いに頑張りたいとおもう。

杳、颯、響、著

先日の歌会で松尾鹿次氏が『丹生の田中義昭氏は国語学者であり、

杳の字をはるか読み、亦とうしと読ませるものがあるがあれは間違っている。また颯つと書いてたつと言うのもいけないといはれた』と述べられた。私は斯る言葉の使用を肯定するものである。肯定するものとしていけないと言われただけで、はいそうですかという訳にはいかない。勿論言葉には論理がある。論理があるとは何かの根底に何故にがあるということである。私が何故に肯定するかを述べ、田中氏が何故にいけないかと述べられて、氏の論理の方が透徹していると思った時は潔く私の主張を撤回するつもりである。私はまだ氏の何故にを聞いていないので私の理由だけを申し述べることにする。

よく人間は手をもつことによって人間になったと言われる。手を持ったことは人類の祖先が敵より逃げて樹上生活を持つようになり、樹を握る行動によって指が伸びたことによると言われる。もちろん猿が何時迄も猿であるのはそのみではないということである。人間は手の出現と同時に言語中枢の出現によって人間となったのである。掴むことによって得た屈身自在な指の操作性が言葉と結びつくことによって物を作る生命となったのである。

る。人間が物を作る姓名となつたとき、樹上は最早真に機能を發揮できる所ではなくなり、且つ又多くの敵に對峙して優位を保ち得る確信が沸き來つたのであろう。即ち地上の生活者となつたのである。

言葉の發展は物の發展と共にあつたと言われる。物とは製作物である。物を作ることによつて人間は言葉をもつたのである。物が言葉を生み、言葉が物を生んでゆくのである。人間を定義するときによく手でも動物であるとか言葉をもつ動物であると言われる。手と言葉を持つ動物として人間は社会を作り、生命を他の動物と異なつた軌道に於いて發展させて來たのである。斯く物の出現を担い、社会の發展を担うものとして言葉は無限に動的なるものでなければならぬ。人間の生命を表現するものとして、物や社会と共に生きるものでなければならぬ。新しい物、新しい社会と共に新しい言葉が生まれ、古い言葉は死んでゆくものでなければならぬ。

私達は短歌を作る。短歌を作るとは日本が形成し來つた社会の内的表象としての心象を表現するものであるとおもう。心象を表すものとしてそれはイメージの創出である。言葉によつて絶えず日本のイメージを創出することが歌を作ることであると思う。言葉は斯るイメージを創出することによつてわれわれの言葉なのである。ここに私はわれわれ

歌を作るものの言葉であると思う。よい言葉とはより瞭らかなイメージを作り出すことが出来る言葉である。私の経験で言へ、杳をはるかともくらしとも書く。このはるかとは時間的、空間的な距離であると共に、それを越えた混沌の意味を含む場合に用いるのである。原初である。くらしは物未だ分かれざるくらしである。はるかにはわれわれがそこから現れ来った距離である。響るは単に聴覚のみではなく、水の落つる音のような重量感を伴った、筋肉覚を混ぜた聴覚の内容である。顕つは単にあきらかになつたのではなく、心に大きな比重を占めた場合に用いるのである。

感性の豊かさとは、現代の世界を感覚に表す力である。感覚は様々の表象を複合することによって複雑な現在を表象しようとするのである。そこにイメージがある。われわれがもつイメージは無限の複合表象より現れ来った世界像である。私は上記の言葉は近代的な複合表象の記号として、豊かなイメージ創出力を胚胎するものであると思う。私達は探索するものとして何よりも生命に忠実でなければならない。固定された既成観念に執するものは言葉の木乃伊を抱くものである。思いを同じくされる方は大いに使っていただきたいと思う。

時局と短歌

三十年程も前になるであろうか。松本章さんがみかしほに居られた時のことである。私が「あそびと短歌」というテーマで文章を書いて出した。昔は上流社会に於いて、「遊ばせ」と言う言葉が普通であつた。「お帰り遊ばせ」、「お帰り遊ばせ」と言つたものである。労働が物を作るのに対して、遊びは神の内容を創ることであつたのである。それを松本章さんが「働くものの歌でない駄目だ」と言つて返された。

当時は丁度、終戦の混乱が漸く秩序を取り戻そうとしてゐる時であり、マルクス主義が新しい社会の担い手として、世界を席捲している時であつた。資本主義社会をブルジョアジーとし、帝国主義として資本家と労働者、搾取者と被搾取者の階級に分ち、労働者専制の呼称の下に世界革命を実現せんとするときであつた。「蟹工船」や「女工哀史」が読まれ、街には赤旗が林立し、知識人は競つて「帝国主義打倒」を叫んだ時代であつた。歌人の多くも自分で如何に過酷な労働に生き、搾取されるものとして、如何に悲惨な生活を送っているかを表現しようとした。貧乏・失恋・病気が短歌の三種の神器であると聞いたのもその頃である。その悲惨を新たな社会建設の起爆力にさせようとしたのである。そこに働く

ものの歌の時代的要請があつたのであると思う。

共産主義の大本山ソ連は崩壊した。倒れてみると真にお粗末なものであつた。労働者専制として無限の富を生み、地上の楽園を樹立する筈であつたが見るも無残なものであつた。生産は労働ではなく、創意と工夫だったのである。筋肉と汗ではなく頭脳だったのである。ノルマではなくして競争だったのである。機械の発展は人間を労働より解放した。農業すらも園芸化したと言われる。歌会でも働く苦痛を歌うものは少ない。短歌は「神あそび」に帰っているように思われる。

定型と自由

コップの中に水を入れて塩を加えていき、一定の濃度を越えてくると結晶を作り始めるそうである。そしてそれは塩の形以外の何物でもないそうである。私は現れ来ったものは全て斯かる結晶作用によると思う。人間の創作の如きも斯かる形の自覚として、斯かるものの上に築かれたものであると思う。

私は短歌の五七五七七の三十一文字による定型も斯かる結晶作用に於いて捉えたいと思うものである。それは叫びと言葉の境も定かでなかった太古より環境と対峙し、恐怖と安堵、喜びと悲しみの中に熟成・発展して行つた声であると思う。戦争やら耕作、集団と個の分化による感情の飛躍の中からおのずから構成され、調つてきた言葉であると思う。結晶作用とは斯かる経緯を介して一つの形を成就していくことである。環境と対峙するものとしてそれは風土的形成である。私達を取り巻く山河風水の中に生きるものとして、最も緊密なる姿を作り上げていくことである。私達の身体は日本の風土を衣食住の環境として、最も緊密なる身体を作り上げているのである。外遊したら日本の食事を恋うと言われる所以である。私は前に生命の静的なるものが身体であり、動的なるものが情緒であると言っ

た。私は日本の生命の無限なる活動を短歌の定型に捉えたいと思う。私はそこに日本の感情を飛翔し、沈澱するのであると思う。

昔小野十三郎という詩人がいて「定型は奴隸の韻律である」と言っていた。しかし私はそう思うことは出来ないと思う。私達はホモサピエンスとして同一の身体を共有する。私は人類の普遍の根をそこに求めるものである。人類的普遍を有するものとして、自由と自己の内面を最もよく表現することが出来るところにあると思う。私は国際化の進むところ、特殊なるものの深奥が照らし合うところに世界詩が成立すると思う。日本も、アメリカも、中国も、ドイツも特殊である。

平常底としての短歌

私は十二月号の一首抄で禅家の平常底と短歌を言った。今朝正法眼蔵を読んでいるとそれに適切な例があったので書いてみる。原文は慣れないと読み辛いので私なりの解釈とする。

雪峰の直覚大師の近くに一人の僧が草庵を作って住んでいた。年月が過ぎても髪を剃らず、どのようにして生活しているのか誰も知らなかった。自分で一柄の木杓を作って、溪ほとりに行つて水を飲んでいた。

だんだんと日が経つにつれてその人のことが人の口にのぼるようになってきた。ある日僧が来て、庵を結んでいる僧に「いかにあらんかこれ祖師西来意」と尋ねた。祖師西来意とは、達磨大師が苦難を侵して印度から来た志は何であったかということである。庵主はそれに「溪深くして杓柄長し」と答えた。尋ねた僧は意味が解らなくて礼もせずに戻って行った。そして山に登つて雪峰に尋ねた。雪峰は「大変に良い。言葉に言い難い迄に良い。それであれば自分が行つてみよう」と言った。それから雪峰が行つて道得の深奥を開演するのであるが、本論に関わりがないのでここで打切る。

水を汲むものにとって溪が深ければ柄杓の長いのは当然である。何故に雪峰はそれを激賞したのであろうか。私はそこに生命の大用の現前とでも言うべきものを見ることが出来ると思う。砂地に生えた草木は根を長く伸ばすと言われる。水の保有力の少ない砂地の水のある所に届かんが為である。柄杓の長いのはそれと同じ原理である。日蔭の草は太陽を求めて長く伸びる。私達の働きは斯かる大用の無限の内面的發展の上にあるのである。日日の働きは斯かる大用の現前にあるのである。私達が当然とするのは大用の現前なるが故である。

私は短歌とは斯かる日常の底に流れる代用を言葉に捉えることにあると思う。言葉に捉えることはそれを發展せしめ、豊潤ならしめることである。流した涙を言葉に捉えることは心をより深くあらしめ、交した微笑みを言葉に表わすことは内面をより豊かならしめることである。白菜を漬けた、畑の土に鍬を打ち下ろした等、全て言葉に捉えることは喜び・悲しみをより大きく開いていくことである。呼び交すことによって根底に入っていくのである。

庵主は唯「溪深くして柄杓長し」と言った。私はそこに東洋的の把握がらと思う。僧は解らず、雪峰は讃えた。境地に至ることによって感応道交するのである。全生命に於いて会

得するのである。感応道交は短歌に所謂共感である。私は短歌とは斯かる東洋的把握に於いて日本語がその調べに於いて形をもった表現形式であると思う。判断によって会得するのではなくして体得する世界である。勿論知識を軽視するのではない。知識も亦そこから来るのである。体得の世界は冷暖自知の世界であるつねって痛さを知る世界である。私は短歌も亦そこに系譜をもつと思う。感情とは湧く涙であり、出でくる微笑みであり、躍る血潮である。嬉しいとか悲しいとかはそれを記号で捉えたものである。抒情とは斯かる感情の出で来つたものを生命の営みの中より放り出してより豊かな感情を見出そうとすることである。それは事実として具体である。短歌の表現が何処迄も具体に即さなければならぬ所以である。嬉しいとか悲しいという言葉は結んでしまう言葉である。観念は感動の生動をそこに断ち切るのである。「溪深うして柄杓長し」である。

付記 本文は正法眼蔵三十三、動得を読んで書いたものである。深大な宗教的体験をもたない私が果して正しい理解をなし得たか疑わしい。唯私は上述の如く解釈し短歌に結びつけたのである。知見の方の御叱正を賜らば幸甚である。

作品の独立

みかしは八月号の『ひとこと』と題した中で山本年子さんは「歌は発表された時点で作者を離れ、読者にどう解釈されても致し方のないことと 생각합니다」と書いています。発表された時点で作者を離れるということは表現の本質の問題である。表現ということは個としてのこの我を人類普遍の中に見ることである。一瞬一瞬の現われては消えるこの私の行履に、人類が人類が時間を超えて見出した形を宿せしめることである。それを担うものが言葉である。

私は作品が作者を離れることは作者を超えることであり、それは亦読者を超えることであると思う。それは作者が独善的な作品が許されないと共に、読者の独善的な解釈は許されないものであると思う。即ち読者にどう解釈されても致し方がないということはあり得ないことであると思う。言葉とか文字とかいうのは一語一句が特有の意味を担うのである。独自の内容をもつのである。創作とは斯かるものによるイメージの構築である。意味をもつものを素材として構築することによって更に大なる意味の実現をもつものである。一語一句が意味をもつということは、それを離れては理解することが出来ないということ

でなければならない。山本さんはどのように解釈されても致し方ないと言う。しかし私は一語一句が特有の意味をもつ時、作品はこのように解釈されなければならないという要求をもつと思う。そのことは亦読者が字句の意味、亦それによって構築された意味を取り違えた時に作者は訂正を要求し得るものでなければならないと思う。作品の独立とか、作者を離れるということは、字句が固有の意味をもち、作品を鑑賞評価するのはその意味に随わなければならないことであると思う。斯く随わなければならない意味が創造の内容であり、人類普遍の形象であると思う。私達は永遠の生命をそこに見出していくのである。

私は一語一句が特有の意味をもちつつ一つの文章が構成されるということは人間の身体に似ていると思う。人間は六十兆の細胞により成るという。その細胞は一々が生命の完結体である。一々の細胞が完結体であることによつて多細胞動物はより高い機能をもつことが出来るのである。そしてより高い機能をもつ統一体より一々の細胞の特質が決定されるのである。或いは肝細胞となり、或いは脳細胞となるのである。そして身体は世界を知り、世界を作るものとなるのである。文章もそのように思う。一語一句が特有の意味をもつということは、文章の成立の中から決定されるのである。文章の成立は統一体である。それは世界の実現である。そして斯かる世界は一語一句によつて構成されるのである。私は私

達の身体は無限の陰影を宿すと思う。そして世界は斯かる陰影の実現であると思う。短歌の表現も亦そこよりであると思う。

しんしんについて

みかしほ七月号で岸田玲子さんより私の作品、「しんしんと降りいる日差し萌え出て直ぐき緑にアスパラガスは」のしんしんを指摘された。この問題に対しては辞書と同行二人と言わねば松尾さんに依頼する方が適当かも知れないと思う。併し犯人として先ず私が出頭するのが本筋と思うので釈明した。

筆を起す必要から私は何ヶ月かぶりに重い広辞苑を棚から下ろした。津津、振振、深、森森、蓁蓁、駉駉、私は字を知らない自分に驚いた。知っているのは津津、深深、森森、の三つだけである。この内、私の作品に当てはまるのは深深である。読むと夜の静かにふけてゆくさま。寒気の身にしみる様と書いてある。そう言うとき昔夜はしんしんと更けてゆきという映画の名台詞があったように思う。それでは何故夜が静かに更けてゆくのを深々と書くのであろうか。私はそこに静けさの深まりというのがあると思う。深深は静けさの深まりゆくことであり、夜はその代表例なのであるとおもう。岸田さんが言われている次に来る名詞は雪ではないかの雪も、音無く

として降る雪が万物を一ならしめ、静けさを増幅するが故に氏のイメージとして浮かん

で来たのではないかと思う。私は夜にも雪にも増して万象動かず音無き昼に静けさを感じるのである。それは私だけではないようで、俳人なんかも昼無音といった言葉で昼の深い静けさを表はしているようである。この作品は音無き昼が育ちいるアスパラカスの直ぐき緑に目を遣らしめ、アスパラガスの直ぐき緑が昼の静けさをあらしめる。そこにアスパラガスは愈々緑の直ぐく、天地愈々静かならしめんとしたのである。そこからしんしんと降りいる日差しという言葉が生まれてきたのである。唯下手糞のために共感を得ることが出来なかったが意とするところは諒を得たいとおもう。

私は本分を書きながらおもったのであるが、静けさの深まりゆくということは動くものを包んでゆくのがあるように思う。昼無音というとき昼は万象が明らかである。形象は対立するものである。万の音を蔵するのである。万の音を蔵してひそまり返っている、そこに限りない深まりがあると思う。雪は雪自身が動いている。故に降り始めはしんしんと言わないようである。万象を白一色に覆うて降るときにしんしんと言うのであると思う。万象を覆うとは対立を失はしめることである。対立なきことは争ひなきことである。人は

と降る姿に安らぎと清らかさを見るのである。そこにしんしんがあると思う。それに対して夜のしんしんは違っているように思う。昔は夜は魔の棲む世界であった。台詞の夜

はしんしんとふけてゆきに続いて軒下三寸下るとは、丑満時は狂宴のために全ての悪魔が屋根に集る時であり、その重さで軒が三寸まで下るといのである。私たちの小さい時に裏の八女で与平鳥というのが夜になると鳴いていた。湖内さんによればふくろうかみみずくかであった。それが「よへーもうつてねんころせ」と鳴くのである。すると祖母は「与平鳥が鳴いたら皆早う寝よ」と言つて寢床に入るのであった。与平鳥は悪魔の使いであり呼び集める声だったのである。夜のしんしんは息を潜めて自己を無とするしんしんであったし、その残像を引くものであると思う。夜を歓楽の時間とする現代に於いては夜はしんしん、の言葉は私語となつたのではあるまいか。

言葉が整うということ

短歌を始めた頃、私はよく天神へ行つたものである。当時東条には藤原優、藤原彊、湖内隆次、松本才逸、西中藤治、芝田すみれ等の諸氏が居られ、歌会に研究会に動きが活発であった。それぞれ一家としての識見を持つておられ、語り合つて飽きないものであった。殊に湖内さんは行き勝手がよく、酒量も同じ程であつたので一升瓶を携げて行つては夜の一時、二時迄語り且飲んだものである。その時私は作歌の第一条件として変遷の激しい時代に生きるものとして、現在を如何に表現するかに置かなければならないと言つた。それに対して湖内さんは言葉が整うと言うことを第一義とされた。よく「言葉がちゃんとしておればよろしいやないか」と言われた。それだけに氏の作品は言葉の構成に隙がなく、何を歌つても高い抒情の質を示すものであつた。氏が病まれてから久しい。自分の思索にみ急な私は訪ねることも稀となつてしまった。今氏を思い出すに連れて言葉が整うとは如何なることであるかを考えてみたいと思う。

言語中枢は人間のみが持つといわれる。そして人間は万物の霊長であるといわれる。言葉を持つことによつて霊長になつたとは、言葉は現在の生命の最も深大なるものであると

いうことである。生命は時間に於いて複雑なる機能とその統一をもつたのである。生死を介してより大なる生命を形成してきたのである。言語中枢が出来たということは今までの生命が言葉を持ったということではない。言葉がはたらき、言葉によって成る新しい生命が出現したということである。私たちは言葉によって記憶を持つ。記憶は時間の統一として経験の蓄積である。経験の蓄積とは過去によって現在があるということである。それは言葉がはたらくことであると同時に、言葉は経験の蓄積の表出であるということである。経験の蓄積が言葉であるということである。

経験の蓄積は過去に現在にはたらくことであることは、それによって生命の新しい形成が生まれることである。過去の形が現在を創るものとして、現在の形に転じてゆくものである。それは新しい経験の獲得として新しい形が生まれることである。蓄積された経験が新しい経験を獲得によって新しい形が生まれるとは、形が形の中に形を見てゆくことである。そこに生命形成があり。その内的方向に言葉が生まれ、その外的方向に物が出現するのである。私たちはその内外対立の内的方向として言葉を捉えるが故に、言葉によって見るとか、言葉によって作ると言えば奇異に感ずるのであるが、言葉と物は生命形成の内と外として、内が外を映し、外が映すところにその具体を持つのである。色彩が色彩の中に

色彩を見、力が力の中に力を見る、それが言葉としての生命がはたらくということである。そこに絵画が生まれ、物理学が生まれるのである。新しい色彩と新しい言葉が生まれ、新しい力と、新しい言葉が生まれるのである。生命が言葉を持つとは、生命が自己の中に自己を見る生命となったということである。私たちが力を知るのは天地の運行によってでなければ、物体の落下によつてでもない。大地を掘り、木を伐り倒すことによつてである。更に列車を操り、クレーンを使うことによつてである。それは言葉と物が映し合うことによつて新たな物と新たな言葉が出現したのである。色彩にしてもそうである。飾ることによつて、描くことによつて、新しい色彩と言葉が生まれてくるのである。

私は言葉が整うこともここにあると思う。新しい形の出現によつて生まれた言葉を明らかにすることであると思う。新しい物が現れ、新しい言葉が生まれたということは、新しい世界が出現したということである。そこにわれわれは自己を見るのである。形成的生命として世界出現的に自己を見るのである。ものが現れることは言葉が現れることであり、言葉が現れることは物が現れることでありそこに自己がある。斯る自己を言葉の方向に於いて捉えるのが言葉が整うことであると思う。それは言葉が現れることは者が現れることであるとしてどこまでも物に即してゆくのである。言葉は単なる既成の観念である。それ

をどこまでも新たに現れた物に即せしめるのである。物は亦、言葉によって見出されたものとして、既成の觀念を新たなものの秩序に組換えるのである。それが言葉が新しいということである。

万物は流れると言われる。一つとして同じものの出現はないと言われる。日々の生活の一々は新たな言葉の出現を要求するのである。私は表現と斯かる要求を現実のものとするところにあると思う。それは世界史の動向であるかも知れない。自然であるかも知れない。汝としての愛憎の対象であるかも知れない。私たちは斯かるものを既成の觀念の中より生まれ来たったものとして、既成の言葉を組換えることによつて新しい形象を出現せしめんとするのである。対象尾を言葉において捉えんとする時、対象は無限の緑暈をもつ繁雑である。そこから現在の我と物の形成体を把握するのが言葉が整うということであると思う。例えば春の野に咲き満ちた花に生命の躍動を覺えたとする。躍動は原全体にあると共にそれを担うものは一木一草である。原全体というのは捉えきれものではないと共に、真に自己の生命感に対するものではない。一草のもつ息吹に原全体を表されるのである。生命は一木一草が持つのである。一草は全ての春を担うものである。そしてそれは生命の躍動に於いて我と繋がるのである。私はそこに言葉が整うということがあるのだと思う。

整わないとは他の草が入ったり必要で無い陽光が入って来て、そこにこの私の把握を散漫ならしめ、或いは拒否するところにあると思う。内と外が相即し、内が明らかになることが、外が明らかになるとは、生命が自己の世界を出現させたことである。言葉が整うとは生命がそこに自己を実現させたことであると思う。外に空間を拓き、内に時間を包むものとして現在に宇宙の完結を持つものとなつたのである。言葉が整うとは、表現的に自己を見てゆく生命が、表現するのもと表現されるものの一を見出したものであると思う。

永 嘆

私は八月号で岸田さんより指摘されたしんしんの釈明をした。そのときに感じたのであるが、重ね詞というのは永嘆ではないかと思う。ますますとか、いよいよとかいうのは心情に関わる主観的なものであるが、あかあかとか、あをあをというのも単なる字生ではないように思う。重ね言葉は非常に強い言葉であるといはれる。例えば青いと青青は何の違うのであろうか。強いとは何うゆうんとなのであろうか。私は青いは単に対象の視覚的映像であるに對して、青青は映像の青が青自身を深めてゆくものがあるように思う。ゲーテがバラの花を見ていると花びらの中から花びらが生まれたというように、青の中に青を生んで視野を青で溢れさすような力があると思う。私は永嘆というのはそのようなものではないかと思う。ソレは例えば青い草の命の力であると共に、作者の言葉として作者の命の表れである。そこに対象のより明らかなるものを見ると共に作者はより深い自分に至るのである。私は短歌が永嘆であると言はれるとき、永嘆とはそのようなものでなければ鳴らないと思う。製作に於いて対象と作者は唯一生命を見出してゆくのである。対象を見ることとが自己を見ることであり、自己を見ることが対象を見ることである。対象をより明ら

に、より深く見ることである。対象をより明らかに、より深く見るのが、作者がより明らかに、より深くなつてゆくことである。それは無限のはたらきである。それは対象を見ることが自己を見ることであり、自己を見ることが対象を見るものとして自己の意思によるのではない。世界が世界を見るのである。はたらくとは世界がはたらくのである。そこからの永遠の呼び声が永嘆であると思う。永嘆というものがあるのではない。創作の底に現れてくるのである。そして底に現れたるものとして底より我を呼ぶ声となるのである。

勿論、重ね詞が永嘆を表すといつても、重ね詞を使えば直ちに永嘆としての短歌が出来るものではない。強い言葉を使うにはそれだけ対象への目の透徹が必要であるかと思う。見るということは視覚の構成である。私達は同じものを見ても表現を異にする。一つのリングを描く十人の画は異なり、作る歌は異なる。それは一人一人が視覚を構成するかこの丁吏を異にするからである。重ね詞が永嘆であるとき、目は個個のものを超えた個個のものを見るものとならなければならぬと思う。人類の目として、全生命の目として見るものでなければならぬと思う。全生命のよろこびかなしみの目とならなければならぬと思う。一匹の蟻の生命もそこより見るのである。流るる水もそこより見るのである。私は重ね詞は強い詩的表現の手段であると思う。唯それが適切なる場合に於いてである。そのと

き重ね詞は内より口を衝いて出てくるであらう。

創作の価値の基礎について

よく「好きな歌がよい歌である」と言う人がある。その論旨の不可なることは少し考えれば判ることである。甲の人がこの歌は好きであると言ひ、乙の人が同じその歌は嫌いであると言つた場合、我々はその歌の評価に対する何等の基準を持たないことになる。何等の評価も持ち得ないということは惚けた老人の独語と変らないということである。そこには創作ということもあり得ないことになる。言葉は対話として世界を表象するものである。我と汝がそこにある世界の形象を見出すものである。評価とは如何に世界に参与し、如何に世界を形作つたかを定めるものであり、次の世界を拓く踏み台となるものである。そこに創作があるのである。

しかし「それならお前のよい歌というのはお前の好きな歌ではないのか」と反問されたら答えに窮する。広辞苑に好きとは「氣に入つて心がそれに向うこと」と書いてある。撰歌を依頼されたときもざつと目を通して氣に入つたものに印を付けていく。更に印を付けたものに精密な考察を加える。撰ぶのは好きな歌である。注意するということが既に氣に入つたということである。作歌するのもそうである。心の向うことなくして作歌はあり得

ない。参考となるのは常に心気を高揚させてくれる歌である。即ち好きな歌である。そしてそれがよい歌であると言わざるを得ない。私達はそこに好きな歌がよい歌である、しかし好きな歌がよい歌の基準になることは出来ないという難問に当面せざるを得ない。私はこの問題のよって来るところは感情は個人に関り、価値は世界に関るところにあるように思う。個人は世界ではない。世界は個人ではない。而して世界は個人によつてあり、個人は世界によつてあるのである。個人と世界は相反するものであると同時に直に一つのものである。私はそこにこの問題を解くべきものが潜んでいると思う。

生命は内外相互轉換的に形成的である。外を内とし、内を外として自己の形を作つていくのである。外を食物的環境として、食物を摂ることによつて内としての身体を形作っていくのである。私は斯かる生命の自覚として人間があると思う。自覚とは相互轉換としての形成が内面的發展を持つことである。形成としての生命が内と外としての、身体と環境により大なる形相を見出していくことである。生命は働きと形、時間と空間の統一としてある。生命は生存としてより大なる形相とは、より長く生き、より大なる場所を持たんとすることである。斯かるより大なる形相を内と外とを見ることがよつて形作っていくのが内面的發展である。私は斯かる内面的發展を経験の蓄積に見ることが出来ると思う。経験

の蓄積とは一瞬一瞬の内外相互転換を時間の持続に於いて見ることである。一瞬一瞬の内外相互転換が、一瞬に消えて一瞬に生れるのではなく、前の一瞬の働きが今の一瞬の働きの力となることである。前に現われた形が今の形を生む力となることである。例えば野菜を植えているところにごみを捨てたとする。そしてそれによって成長が早められたとする。すると次に野菜にごみを施すときである。そこに時間と空間が現われるのである。野菜畑にごみを捨てたら野菜が早く大きくなったのが過去であり、ごみを肥料として施しているのが現在であり、野菜の成長と収穫を予測するのが未来である。そして野菜の栽培の場所が空間である。時間・空間は製作によって出現するのである。

技術的製作的になるとは形が無限に生れることである。外とは我ならざるものである。内外相互転換とは内としてのこの我が外としての我ならざるものに出合うことである。相互転換とは外としての我ならざるものを身体としての内に転換することである。それを蓄積するということは、我ならざるものを我とする手段を持つことである。そこに必然が成立するのである。我ならざるものとして出合の偶然であった野菜は栽培に於いて必ず出合えるものとして必然となるのである。その必然の体系が技術である。生命の必然の体系に組込まれた野菜は、何処迄も外として、身体ならざるものとして、身体の欲求に従ってよ

り美味に、より多量にとして形相の大を求めるのである。そこから様々の形の分化が見られるのである。斯くして偶然と必然の交叉の中から創造として無限の形が生れてくるのである。

内外相互転換は生命の基本である。基本として生命発生以来の全ての生命が持つて来たものである。内外相互転換が生命形成であるとは、全ての生命が転換を持ち、転換に於いて生命と生命が食物の所有を争い、そこより形が生れたということである。有機体に於いて外とは敵である。内外相互転換とは闘いである。闘いは個体が死を超えようとする努力である。そこから個体としての形が生れて来るのである。動物の世界は闘争の世界であり、自然淘汰の世界である。私は人類の製作に於いて自他を統一する大なる世界の展望を持つことが出来たのであると思う。製作は前にも書いた如く偶然としての外を必然としての内に組み込むことである。斯かる外は私一人の環境としてあるのではない。この我も亦生れ来ったものとして、無数の人々が生まれ、育ち、死んでいくところとして環境である。生まれ死んでいくところとして環境は大なる力である。製作は変革することであり、環境の変革はよく一人の力のなし得るところではない。それは全人類の無限の努力の上に成り立つのである。経験の蓄積というのも全人類の内容としてあるのである。蓄積を記憶として

持つ。我々が記憶を持つのも全人類の内容として、全人類の形相を宿すということである。人類が形成してきた世界の一点として記憶を持つのである。

製作は形の無限の発展である。私はそこに芸術の萌芽があると思う。無限の発展とは見られたものが見るものとなることである。作られたものが作るものとなることである。蓄積としての獲得した力が働くものとなるのである。作られたものが我と対し、我に対するものを外として更に大なる内面的必然の体系の中に組み込んでいくのである。即ち更に合目的な物を製作していくのである。製作として物は人を映し、技術として人は物を映すのである。内と外とは相互否定的に一として発展していくのである。形より形へである。製作は身体の形成として、身体の用のために始まった。而して形より形へは身体の用の中に消えゆくのではなくして物自身の発展を持つものである。勿論基本としての身体の用が消えるのではない。人類の内容として個体の用を超えた形を持つのである。社会の内容として商品となるのである。勿論商品は芸術ではない。商品は尚個体の欲求に即するのである。私はそれが芸術となるのは個体の用としての欲求的内容より転じて、人類が自己の形相を見るところであると思う。形より形へとしての製作は前にも書いた如く、瞬間としての内外相互転換を超えて過去・現在・未来を内に持つことである。過去は帰り尽くせ

ないものとして無限であり、未来は到り尽せないものとして無限である。それは全人類の持つ無限である。それは個を超えたものとして個を内容とするものである。私はここに現われる形は世界の形相であると思う。私はこの個を超えて過去・現在・未来を統一する生命として、世界が世界を見ることによって生れる形が芸術であると思う。そこは形が形を生む根源として純なる形である。

生命は生きるものが死を持つものであり、死にゆくものが新しい生命を生んでいくものである。営みは一瞬一瞬の内外相互転換であり、内外相互転換は形成作用として過去・現在・未来を統一するものである。永遠が瞬間であり、瞬間が永遠なるものとして営みを持つのである。製作も亦生命の自己表現として瞬間即永遠・永遠即瞬間として形を実現するのでなければならぬ。私は作られた形の全ては日常の用としての瞬間的な方向と形の実現として永遠の方向を有すると思う。そして日常の用の方向に物としての器具が見られ、時を包む形の方向に美としての芸術品が見られるのであると思う。茶碗の破片も時を包むものとして美の内容であり、飾り皿も果物を載せれば器物である。勿論碗の破片が美術品であるというのではない。最初に人類が物を作った時に用の方向と形の方向があったと思うのである。縄文土器につけられた紋様は神の形象であると言われる。天地を写すのであ

る。そこから種々の形が生れるのである。しかしそれはまだ芸術品ということが出来ないと思う。それが芸術品となるには用から離れなければならないと思う。用から離れて世界の形を表わすものとなるのである。最初の形は用として現われるのである。永遠なるものが初めに形を持つのは瞬間的なものとしてである。瞬間的なものとして身体に即して現われるのである。身体の行動的直感として現われたものが次の形を生むとき、そこに時の統一が現われ世界が見る形となるのである。私は芸術とは形が斯かる方向に内面的発展を持つことであると思う。この問題を解くために更に形とは何かについて踏込んでみたいと思う。

私は前にも書いた如く、死をもつ生命は生きんとするものであり、死の克服として現われた生命の相が形であると思うものである。初めに形が現われてそれが死を持つのではない。生れることが死ぬること、死ぬることが生れることとして形が現われてきたのである。形が現われることによって生と死が否定的に対立するものとなったのである。私は生命は生死の統一として初めて具体的な存在であると思う。具体的な存在とは形を持つことである。斯く生死を持つということが内外相互転換的であるということである。外を死とし、内を生とするのである。外は環境として死を以って迫ってくるものとなり、内は身体とし

て努力によつて環境を身体に転じて生を維持し發展させるものとなるのである。そこに外は世界として形を持ち、内は身体として形を持つてくるのである。斯かるものとして形は相互限定的である。身体は環境を映し、環境は身体によつて変革されるのである。形の成立は環境に作られ、環境を作るということである。斯くして生命の営為は環境と主体が映し映される無限の形成の働きとなるのである。村里と山家・大河と小川・温暖地と寒冷地等々一木一草に至る迄、我々はそこに生き、それによつて生きるものとして形を作つていくのである。生きるものとしての形を作つていくとは感情・意志・知識を作つていくことである。そこに生きるものは生れ変り、死に变り一つの形に生き、形を發展させていくのである。斯くして生きるとは先人の形を学び發展させていくこととなるのである。ここに於いて私達は形に生き、形によつて生きるのである。経験の蓄積はここに成立するのである。経験の蓄積は外が身体の内を離れて形が形を生み、生命形成の内奥を露わにすることである。身体を超えた形として世界が現われることである。

用を離れ、身体を超えと言つても進退がなくなることではない。内外相互限定としての内の身体を失うことは形がなくなることである。唯用としての内外相互轉換は身体が重心を持つのに對して、形としての内外相互轉換は世界が主となるのである。前者に於いて

は世界は感官的欲求の内容となるのに対して、後者に於いては身体は世界の内容として、世界の形を現わすものとなるのである。身体はもともと無限の奥行を持つものである。但しそれは内外相互転換的に外を映し、外を映したものを自己とすることによってである。無限の創造的發展を潜めるものとしてである。身体が奥行を持つとは外を映すことに無限の形を持つことである。そしてそのことは亦内外相互転換として外に無限の形をあらしめることである。ここに我々はこの我をあらしめ、物をあらしめるものに逢着するのである。この我をあらしめ、物をあらしめるものは我でも物でもなくして我と物を超えたものでなければならぬ。超えたものとして物に移して我をあらしめ、我に映して物をあらしめるものでなければならぬ。而して我と物をあらしめるものとして見出された形は超越者の姿でなければならぬ。超越者が自己自身を見るものとして形成があるということではなければならぬ。そのことは我が物を作り、物に我を見えるということは超越者の自己創造ということである。私は形が実用を超えるというのはそこにあると思う。そこに物は身体を用を超えて超越者が自己自身を見るものとなるのである。我々が物を作るのは本来超越者が自己自身を見ることであり、身体の内はその手段となり、その陰翳となるのである。斯くして超越者の内容としてのこの我が超越者を宿すのが価値としての表現であり、芸術も

亦そこに生れるのであると思う。短歌も亦芸術として日本の特殊に於いて超越者を表わすところにあり、評価の生れるところもここにあると思う。

日本の特殊とは日本の風土である。そこに生れて働き死んでいく自然である。生きて死んでいくということは内外相互転換的に環境と主体が映し映されて形作ってきたということである。そこに我々は自分の形を作ると共に日本の形を作ってきたのである。自分の形を作ることが日本の形を作るものとして生きてきたのである。私は斯かる形成作用の日本の形を作る方向のひとつとして短歌が見られると思う。それは身体の利用としての物の方向ではなくして、対立の統一としての言葉の方向である。物が身体の生死を映すものとして現われて消えていくのに対し、それを超えてそれをあらしめる言葉の方向である。それは対象を映し、対象に映されて自己を明らかにしていく創造的一者の形成作用である。私は短歌は斯かるものとして、日本の風土に生きる生命が風土と生命の相互否定的転換に於いて世界を形成し、世界を明らかにしていく一つの手段であると思う。それは無限の転換である。外を映したということは外をイメージとして自己の形を作ったということである。内を外に映すということは、外を獲得した新たな力によって更に大なる世界を作ることである。更に大なる世界を作るとは超越者が自己自身を現わし切ろうとすることである。而

してそれは無限者として無限の働きである。無限なるが故に超越者なのである。私達は斯かる世界の内容として、働くということは無限の姿を見えるということである。実現するということである。私は斯かるものとして良い歌とはどれ程世界を映し、我を実現したかにあると思う。映し映されることによって世界を形作り、形作ることによって見ていくのである。それは映し映されたものとして無限の過去を内に見るものであり、無限の未来への呼びかけを持つものである。良い歌とはより明らかにより大なる世界を開いたものとして、この己により明らかなより大なる内容を持たしてくれるものであると思う。そしてそれは映し映される、無限の努力の中より生れてくるのである。努力するとはより明らかなより大なる世界を求めていることである。求めているものが与えられた時、より大なる光りを与えられた目の如く知るのである。そこに形成的生命の自己直観があるのであり、生命は直観的に自己を形成していくのである。目から鱗が落ちたという言葉がある。より大なる世界に接して、より大なる形を見、形を作る目となったということである。私はそこに芸術の世界が成立し、客観性はそこに求められると思う。日本の自然と人間が映し映されるときに和歌という形に結晶したのである。作品を介して主体と対象、我と世界は明らかな形を持つてくるのである。映し合う主体と対象は作品によって自己を明かにしていくので

ある。恰もそれは鏡の如きものである。鏡に映して自己の姿を知ると共に、ありたき姿とある姿の乖離を埋めんとしてより美しいより大なる自己の姿を作っていくのである。乖離をもたらずのは世界としての他者の目である。斯くして自己をより美しくより大ならしめるものは重々無尽の世界である。勿論作品は鏡ではない。単に写されたものではなくして実現したものである。逆に世界を作るものである。作られた世界として次の創造を呼ぶものである。私達の無限の努力はここより生れるのである。我々の働くことが呼ばれるものであることによって限りなき努力をするのである。

私は良い作品とは我と対象としての世界をより明らかにし、その明らかにしたものに於いて創作を呼び続けるものであると思う。創作を呼ぶということは好きということである。そこに好きな歌が良い歌であるということのよってくる所以がある。しかし好きというのは自己に関するものである。自己に関するとは他者に関らないということである。そこに世界形成はない。世界形成のないところに自己は消失しなければならない。好きということの上立って自己を見るとき、自己とは唯世界形成より他者を捨象して見られた抽象物に過ぎない。自己に世界を映すのみにて、世界に自己を映すという意味が失われたところにあるものとなるのである。そこから新しい形としての自己を生むことが出来ないと思う。勿

論内外相互轉換としての現実にはこのような一方的なものはない。好きは他者に関するのである。唯好きという時他者の中に自己を消していく真の形成はないと思うのである。呼ぶというのは内外一としてこの我を超えた形としての世界より我をあらしめる声である。好きというのも我をあらしめる世界の中により真実の我を見出した感情である。世界が自己を運ぶところに生れるのである。それを評価に於いて逆に我よりとするとところに誤謬が生れるのである。

形は何処迄も内と外とが作品を介し自己を明らかにするところより生れるのである。現われた形が世界である。この現われた形以外に世界があるのではない。そしてそれをあらしめるのが内と外として無限に映し合う主体としての人間と対象としての物である。この世界の内容として現われたこの我々と物以外に物や我があるのではない。この我や物が評価を持つということは、映し映された世界の明らかさをどれ程深く大きく担っているかということになければならない。映し映されることによつて明らかになるとは自己の中に自己を見ることである。自己の中に自己を見るときは初めと終りを結ぶものが自覚的ということである。初めに終りがあるのである。初めに単細胞として地球の一点に生れた生命は無限に自己を複製し、内外相互轉換として形の中に形を見出していくのであったのである。

そこに新しく生れることは初めに帰ることである所以があるのである。最初の生命が内外相互転換として新しい形に転じていくのである。しかしそれが単に転じていくのは形成ではない。過去を包むものとして、蓄積するものとして転じていくのである。そこに新しいものを見るとは初めを見ることであり、発展することは根元に帰ることである所以があるのである。創造は宇宙唯一生命が自己を見るところに成立するのである。宇宙唯一生命は初めと終りを結ぶものとして自己の中に自己を見る生命でなければならない。学ぶとは真似ぶであると言われる。大なる過去に還ることが大なる未来に至ることである。私は斯かる創造的世界が自己がその中にあり、自己がその中に見られるものとして自己に対するとき客観的世界が生れるのであると思う。作品の評価はどれ程深く大きく世界を明らかになし得たかにあると思う。それは内と外が深く大きく映し合ったものとして、どれ程深いところ、高いところから読者に呼びかけ、読者の目を開いたかにあると思う。そこに作品の価値は世界の真実となるのである。好き嫌いは個人意識、時代意識に左右されることが大である。勿論個人意識、時代意識なくして意識はない。唯私はその根底に世界意識とか、宇宙意識とかがあり、個人意識や時代意識はその上に成り立つと思うのである。そしてその根底に還ることによって個人意識や時代意識はより明らかな形を持っていくと思う。呼

びかけ目を開かしめるものはここより働くのである。それは個人意識や時代意識にも働きかけるのである。意識がより明化を求める限り働きかけるものであり、意識は明化を求めるものである。個として意識は無限の深化を求めるのである。そしてより深い世界の呼び声を持つのである。そしてより深い世界に立った時、前の良い歌が詰まらん歌になり、新しく良い歌が見えてくるのである。新しく良い歌と言っても何か素材が新しいのではない。新しい素材を求めるとき逆に自己の中に自己を見えるという意味が失われなければならない。旅行詠なんか意外良い歌が出来ないのはそこに原因を持つと思う。私達の営みは日々の繰り返しである。而して繰り返しであるが故に形が生れて来るのである。経験の上に経験を重ねていけるのである。経験の上に経験を重ねるのが世界形成であり、その形成を呼ぶのが世界意識であり、宇宙意識である。私は短歌の評価もそこにあると思う。創作したものが如何に深く世界から呼ばれ、如何に明らかに自己を表わしたかにあると思う。身体に映し、対象に映すことによって無限に働くものを如何に露わにしたかにあると思う。

短 歌 作 品

病 む

胸締むる痛みが不意に襲ひ来て持てる基石を置きて伏したり

胸しめる痛みは漸く呼吸あり急救車を呼ぶ声聞きつ

わが体担架に載せて車へと押し込み直に走り出したり

服白き医師に看護婦白き壁我は病院に寝てゐるかな

泡を吹く器具運ばれて鼻に管さされて我は横はり居り

死際の刹那にはほえみ浮ばせて保ちしままに瞼閉じたり

ひきつれる痛みは呼吸の細くなりほえみ死なん演技をおもふ

病室の景

からみゐる痰を吐き出す唸る声擦る女の頬赤くして

押へゐる声に夜半を咳込みて誰も耐えゐて患ふらしき

咳込める声の止まざる夜半にてカーテン距つわが耳冴ゆる

誰も皆眠れる室に点滴の透きたる液がきらめき落つる

口中に唇落ち込み頬削げて老婆眠りしいびきかきをり

痰をとる咳する声のいのちある限りの声が夜明にひびく

暖房に病衣つて寝るが見へやせたる脚の大きな足裏

腕に針鼻より管を差込まれ安静の手足伸べて寝ねをり

言うことを聞かざる男の大きな目のぎろぎろとして瘖せてゆきをり

くり返し声挙ぐ老婆痴呆症と知りつつベットに起きて見守る

血の色の頬に冴えゐる看護婦と見守り採血の腕を差出す

若き女が隣の見舞いに來て居りぬ隣の故に美しくして

カーテンを引きて己の城となし病める四人が一室に住む

咳込みて夜をとうせし男にて昼を寝ねゐるいびきの聞こゆ

人の來し氣配に開きし瞳にて血圧計る看護婦が立つ

四日ぶりに膳にのせたる飯の出で腹空きたるをかくさずに食ふ

川 三首

なめらかに岩に苔生え苔を食む躍れる鮎を追ひて泳ぎし

鯉を取る姿の见えず深き淵変らぬ青にしずもりて居り

女童も槌を捲りていっさんこ追ひしはこころが草に埋もる

飛ぶ雲の岐れて空を走りゆき枯葉捲かれて土に狂ひぬ

神装束なして鉄打つ鍛冶なりき破れて黒き筥に残さる

打つ鎚と受ける鎚とに向ひゐて鉄を鍛ふる二人は黙す

胸撮りし断層写真は如何ならんうつし絵もつか我は寝ねつつ

黄葉を生み赤き葉生みて秋来る画匠の彩管揮はさんため

夕鳥は言葉さらひて飛びゆけり臉を合はす闇迎ふ故

白き紙振りて豊饒祈りゐる宮司未明の水を浴びたり

呻きゐし声も眠れるいびきとなり朝の空は明け初めてゆく

呻き声出して一夜を過したる疲れに朝を眠りゐるらし

思ひ出に辿るいのちは限りなし収めてしずかな老ひの日ならん

朝もやに茜の渡り病みて臥す瞳を開く光り差しくる

戦中と戦後を生きて来りしと点滴受くるやせし手は見つ

原なりしところに密々家の建ち光る車の出でて来りぬ

手術するせぬは家族に任せゐてわれは点滴の歌考へる

杉の秀の伸びゆく晴れし青き空我を呼ぶ声そこより来る

見舞客帰りて声のなくなりし室にしばらく何すとあらず

あめんぼがかすかな波を起しゐて昼が落せる葉蔭のふかし

片かなの工場の文字より朝明けて車の出入りは人の営む

工場の片仮名の文字明らかに見え来てはたらくひと日初まる

白く映ゆ壁となりきて光り差し閉せる窓は人まだ眠る

払はるる霧の中より一つつつ象現はれ来るたのしさ

一つつつ異なる象に現はれて山に生ふ木に霧はれてゆく

炎をなすと見上る楓の紅の情緒過剰に虫の這ひひをり

ドア閉ぢて寒気断ちたる室となり病みて生きゆく空間ありぬ

ゆれ止まむ体重計の針見をり知らざるおのが体をもてば

喉の下に肉衰へしくぼみ出来ながき安静の時の過ぎたり

安静の体に臥して懸命に己れいやせる循る血のあり

転々と寝返り打つ日日寝台の小さくなりしに軀順うしたが

曇り来し窓に安静の目はゆきて重なり来るこめる雲あり

一日に癒ゆるならずと胸に置く手を本棚に伸ばしゆきたり

挟みたる豆が箸よりすべり落ち生きる力の指に失せゆく

澄む水と泥とに分れ溢れたる昨日の雨は一夜過ぎたり

幼らはひそみて闇を見つめをり闇を見る目の光り増しつつ

今撮りしネガを眺むる医師の目の動かぬものを我は見てをり

生まれしは全て死するとおもうとき舗道に人は溢れて歩む

病める身は医師に委せて起き伏しの湧ける思はいは文字に托しぬ

安静の医師の言葉に臥してをり縛らる服を壁に向けゐて

するするとカーテン上りて人の居ず自動といふを我は見てをり

わが体を他人に尋ね知るを得るこの不可思議に病みあるなり

順調の言葉がありて開きたる安静の目を亦閉じてゆく

広き空の広きを眺め安静の今日いち日も暮れてゆきたり

夏の用終へたる布の千切れゐて案山子は畦にほうられてをり

大きな緋色の缺ふりかざしざり蟹激つ水さかのぼる

いそしみて紅き葉をなす庭の見え罪のごとくに臥してこもりぬ

老ひし木も紅葉なしゆく一斉を見つつこやりて今日も過ぎゆく

渴きたる口をうるほす湯のあるを何に向ひて感謝すべきか

十二時となれば食事の運ばるる恵みを我は受取りてをり

窓開けてひと日増したる紅を見てをり楓に臥せる目やしなふ

錠剤が一つふゆると卓に置きナースは安静告げて去りゆく

点りゆく灯りは高く階昇るビルの象かたちとなりて昏れゆく

各々のビルの形に整ひて闇に灯りの増して来りぬ

ひょうひょうと鳴りゐる風の耳を研ぎ一夜研がれし耳に寝ねをり

しわくちやの手と思ひしがいつの間にかやせたるままに艶をもち来ぬ

夜の駅を降りたる人等いち日の疲れもてるはひたすら歩む

赤きもの見れば血として歌に書く戦し日をながく離るも

仔犬らは生れしものの当然の如く朝の光り浴びをり

母よりも悲しく生きしものありやことごとく我を原因として

一日をたしかに満せし紅くれなひに楓は秋を輝きてをり

走りゆく落葉となりて風の吹き襟を押へて人歩みゆく

同じ程老ひたる人がひさぎゐて買はねばならぬ物のあらざり

風神は大きな袋担げると夕飯はやく食ひをはりけり

医師の言葉ひたすら守り過ぐる日日命令は死に関り生まる

計りたる体の数値メモをして我に告げず医師の去りゆく

薬包やみかんの皮など一人臥す室のくず箆もいくらか溜る

窓下に紅葉増しゆく一樹あり無視せる群をわれは眺めつ

開け口と書きあるところ開けられず力任せの力失せたり

屋上に赤き灯ともし迫りくる夕の闇を統べてゆきをり

更けてゆく夜のしずけさに読み居りし本を閉して坐り直しぬ

照り残る茜の雲も沈みゆき時に帰る鳥も絶えたり

湧き上る霧が押し上ぐ山の峯一すじ青く天に遊べり

比えい山焼打したる信長は下天は夢を常うたひしと

欲しきものなきかと思舞に來り言ふ欲しきは大方禁制にして

追憶は母が大方占めてをり幸せなりし記憶なきため

けん命に血を循せる心臓など更けゆく眞夜に思ひてゐたり

八十のおきなのためにナース等の若きが眞夜を走る音聞く

朝の日が運ぶ新たも臥せる目に押れてわずかに頭回らす

葉の落ちて樹液少なく乾く幹露に並ぶ道となりたり

眞夜中のかすかな音に目のゆきて便を捨て呉るナースの動く

寝台にひとでの如くはりつきて旬日経たり明日も然らん

葉の散りてあらはな幹が乾きたる白き光りを返し並びぬ

昼も夜もいつとはなくて過ぎてゆき入院十日の検査するとど

照り出でて秋山紅き恍惚に向ひてゆける歩みなりけり

くれなひの樹液登りてゐるならん秋の山路の葉を分け登る

うすずみに暮れてゆきゐる夕山のなずみていつとはあらぬ淋しさ

ブルガリアヨーグルトとふを食べ終へて唇なめて夕食終る

幽鬼など作りて昔の人あれば静かならざる夜の雨そそぐ

静脈の青く夜の灯に浮びゐて安静ながく病みて臥しをり

交し合ふ枝に競へる紅葉に昼の陽差しは澄みとほりつつ

重なれる山の奥処に墓建ちていのち継ぎゆく人の住みたり

しつ黒の闇のキャンバス七彩の花火を人は展げゆきたり

遠く飛ぶ翼をもてば高き木の梢に鳶は眼置きたり

つひ一つ食べし豆菓子レントゲン撮らるることを忘れてゐたり

夕闇に靴音生れ歩みゐる我の姿の消えてゆきをり

食べるなど言はれし故の腹空きぬ治りゆきゐる我にてあらん

差出してかざしゐる手に並ぶべく焚火の群に入りてゆきたり

生れたるいのちにこの世の声挙げて燕のひなは巢より乗り出す

賜りし花の蒼の開けるを瞳尋ねて朝の明けたり

ほつほつと緑の若芽吹き出でて古木乍らの今年新らし

輝きてカーテンのすきを日がもるる開けと呼べる声をひそめて

口開けて深き陰あり生涯を食ひて養ふいのちの底ひ

時が来て便意に立ちし腹腔の暗き底ひの秩序もちたり

寝台の狭きにいつしか順したがひて伸ばせる脚のつか間え失せたり

大別山駆けて登りて敵追ひし脚にてありきベットにすがりつ

木枯しに吹き散されて転ふ葉の枯れて落ちしは行方を知らず

手を足をベットに投げて臥してをり癒えゆきあるか医者が知りゐて

お通じがありましたかとナース問ふ弁証法より緊急にして

撓^{たわ}ふだけ撓^{たわ}ひて柿の実りをり継ぎて栄へん必然にして

看護る媼みとらるおきな病室の中はテレビが音なく写る

限りなく祖^{おや}等仰ぎし星光^{かげ}を仰ぎて夜の道かへりゆくかな

ながき時地中に距ていにしえの乙女は墓の壁に新らし

木の下に赤きポストのあることを見つけてあたり暫く見廻す

朝の口漱げる水に仰向きて今日も底なく晴れし空あり

忘れたる古き歌集の出で来りよみがへくる文字の新らし

吹き溜る落葉の量に足止めて並木は激しき夏の日経たり

夜の空を赤く点りて続べゐしが消されてビルの角に小さし

小さな注射の針の刺さるるを怖れて皮ふは体を包む

蛆よりもたやすく人を殺す文字人なる故の憎しみもてば

鉄板を敷く一ところ音高く足踏みしめてわれの渡りぬ

聴診器胸に当てられ皮ふが包むわが暗黒の計られてゐる

死ぬべしと思ひ定めし体にて布団にひざを揃へ坐しをり

六つの管に採られたる血が並べられ各々異なる検べを受くる

冬の夜の眼は冷えに澄みとほり天を渡れる月と向き合ふ

身をつくし傷き生きし母なりき与ふるのみの一世にありき

神の御名遺^{みな}りて草生ふ小道のあり人等つつしみ歩みし跡か

萎へ初めし早さに瓶の花りて臥しゐる床に旬日過ぎぬ

断^きつ立てて高く建ちゐるビルとなり果なく青く空の晴れたり

うつむきて来りし花と朝見しに花びらいくつ卓に散ばる

人間が建てたる故に仰ぎをり空貫きてビルの輝く

巨きなるビルと思ひて仰ぎしがビルの中なる人間となる

天渡る茜の空に満つるとき染まれる我となりて仰ぎぬ

夜の灯に降圧剤の白く照り水をくむべく我を立たしむ

昼の陽のさんさんと照る山の道紅葉は己れに酔ひてゆきたり

幾年かすれば居らざるこれの世に怒れる我の声がひびきぬ

愛想笑ひなしたるわれのあるなれば人居る所を離れゆきたり

ひろげたる翼に空を従へて飛びゐる鳶は見ても見飽かぬ

音ありて耳あることを耳ありて音あることを臥して思ひぬ

窓渡る小鳥の声の入り来りしばらく空の青きに遊ぶ

朝の薬数確めて服みをへて病みゐる我のひと日初まる

蜜々と凝りて集る天心のしたたる原を歩みゆくかな

泳ぎゐし泥鰌も泥にもぐりゆき草枯る水は澄みて来りぬ

死にし故謝るすべをもたざれば言葉の荊負ひてゆくかな

下からは上は見へぬと常に言ふ小金を儲けて蓄めたる奴が

与へられし薬服みをへ用終るものの如くに横たはりゆく

すこやかな若物綱に昇り来て臥しゐる我と向ひ窓拭く

病む胸に朝の光りの直ぐくして生きねばならぬ我となりゆく

ながながと足を伸ばして寝るとき生きる命のありたりしかな

伝へたる播州^{ひでり}旱に米買ふな水に争ひ祖等^{おや}生きたり

萎へて来し花殻捨てて残りたる咲く花見つつ繋る瞳は

湧き上る雲を眺めつわが血潮応へぬ冷えをもちて循れり

ふくらめる霧が写せし天と地の伸びゆきはらりと落ちてゆきたり

八十を楯にあやまち庇ひゐて今日も過ぎたり明日からも亦

さまざまの医療具とつなぐベットにて使はれざるが良^{よし}と備はる

ひるがへる自在に鳥の飛びゐるに安静の眼窓を距てつ

変身の誘ひしきりに透く服のショウウインドウにぶら下りたり

鎌で草刈りゐる顔が先ず浮ぶ男にありて病みて臥せると

羽重き唸りに蜜蜂飛びゆきぬ耐へて生くべき性に生れし

暮れて来て点れる店に人並び鉢食ふさまにラーメンすする

左手に串焼持ちてコップ酒飲みをり今日を働かし声

星辰とつながて夜の眼ありしみじみ人に生れけるかな

それぞれの室のもちゐる断絶に大きなビルは並び建ちたり

公民館に明る過ぎゐる灯の点り唯事ならぬしけさに照る

得たるものに執着少なき我の性握力弱きに関るらしき

一輪の花がもちゐる完結を屈み眺めて問ひつめ飽かず

照り出でて窓の紅葉に光り透き抹茶を点せる手許明るむ

吹き来る風に再び転びゆき落葉に安らぎ与へられぬず

泥と水分れて上の水の澄み豪雨止みたる一夜明けたり

吹き溜るくぼみのありて転びぬし落葉はそこに重なり合ひぬ

くり返し倒産の話してくれぬ高き笑ひの声も混へて

脚の力弱くんりゐて幼な日に心かえられる歩みなりけり

転び来し葉は翻り転び去る枯れきて枝を離れ落ちしは

窓開けて吾の吸ふべき新たなる空気流れて室を満しぬ

枯草に雨降る言葉紡ぎゆき紡ぐ言葉に雨降りつづく

青亦の電飾空を占めてゆき闇を拓けるいのちの動く

電飾のめぐれる下を歩みゆき原色渦巻く肉体をもつ

安静の二旬が過ぎて唯に臥す己が在り処の言葉をさがす

地下の水涸れたる木々の肌乾き吹きくる風に枯葉を落す

明日ありと眠りしならず横たへし瞼に意識うすれ来りし

黄葉紅葉燃え立つ木木の開きたる瞳となりて歩みゆくかな

風船に針を刺したる如き萎え我は病床に横たはり居り

もう死ぬと思ひたりしが癒えの見へ今暫くを生きて居らんか

書き綴るペンの先より生れくる言葉に動く指となりゆく

ふり向きてわが顔ありし窓ガラス眠らん今日の闇ふかまりぬ

子の恩師岡田先生いちはやくリボンを結び花を賜る

晴れたりと思ひし空の亦時雨しぐる秋の天氣の如く病み居り

花びらを落せる花に算かぞえられわが入院の半月過ぎぬ

考へて成ることならず食ひをへし休みの時の体横たふ

泥の手に顔振り汗を落したる男再び屈まりゆきぬ

勝敗のその簡潔の好ましくテレビに相撲のスイッチ入れぬ

われの意志超えゐて事の進みゆき無力の腕に頬を支へぬ

安静に臥せてゐる身は暮れなずむ秋のもやひに瞳置き居り

にちにちの臥して過ぎゆく病める身の今日の曜日を問ひ糺したり

濡れし羽根しばしば振ひ落しゐし鳩もいつしか消えゆきたり

ふくらます羽根に振ひて雨落し鳩は飛立つ羽づくろひなす

びつしりと車の駐まる広場にち変りて居りて街の明けちゆく

蹴るボール追ひて走れる人の群シャツに光りの流れゆきつつ

霞み来て模糊と拡がる街となり球形タンクの簡明が顕つ

若物は夏を走れり雫なす汗流るるを恩恵として

羽根打ちて鳥の飛びゆき大空は果しのあらぬ青となりゆく
ながながと寝て思へり結局はこの安らかにかへりゆかんか
明けてゆく道にライトの増し来り競ふ早さに走り過ぎゆく

紅に一葉一葉を染めたるを散りて跡なく裸木立ちぬ

億年の光りの届く夜の空に悲しみ小さし捨てて歩まな

読みしだけ書きたるだけの我なると残さる日日の灯りを点もす

刃なす氷の光り万の虫眠れる土を覆ひ張りたり

限りなく虫潜ませる冬の土夕影ひきて帰りゆくかも

奔流の如くライトの走りゆく暗き闇へと眼いこはす

振り合へる手を引き離しエレベーター閉ゆき一人の歩みを返す

窓に置くびんに日差しの及び来てびんがもちゐる緑を散らす

らんらんと窓を点して夜のビル競ふ高さに立ち上りたり

萎れつつ残る蒼の開きゆきびんに挿したる花房ありぬ

如何ならん数値出るかと血圧計見てをりわれの体を知らず

腰痛み動き得ぬ迄歌会の作品集刷りてくれたり

アパートの窓に干物溢れさせ日差しは背中暖めて照る

隣床の人は鼻より管差すを退院の足罪にも似たり

夜の水は光り集めてしろしろと迷ふ眼を照してゐたり

行方なき一人の歩みとなれるとき白く輝く雲の生れたり

落ちる陽は今日を茜に輝きて蟬のむくろを照してゐたり
同化作用失せゆく固き葉をそよがす風の冷えもち初めぬ
おのずからほほえみ生れて記憶もつ人の瞳と瞳出合ひぬ
軒下の草のいつしか緑増しそよがす風のひかりふふみぬ

わたくしの知らぬわたしの事を問ひ知らぬと言へば隠すなど言ふ
照り出でてアパートの窓のすすぎもの色それぞれの光りを返す

昨日読みしところを忘れ進まざる本を開けり飽きてはならぬ

砂に水かけるが如く読みしときのみを覚えて本をめくりぬ

つぼみまだ半ば残りて花房の枯れをり天に向ひしままに

月光を登れば月に至るべし冬の夜冴えて裸木に掛る

撓^{たわ}ふだけ風に撓^{たわ}ひて折れし枝搔き寄せられて火にくべられぬ

開きたる目より涙の溢るるを溢るるままに傍に立ちをり

大き間口小さき間口に並びゐて営む人の出でて入りゆく

プリズムに分ちし色どり撒き散らし花園に花咲きて満ちたり

背の温む光りの沁みてたんぽぽの花より春を掲げ来りぬ

たんぽぽの花と差しくる光りとの交せる中を歩みゆくかな

光り射す紫集めて咲き出でしすみれの花を嗅ぎて寝るべし

立つ爪に飛びゐし鳶はわが言葉攫^{さら}ひて山に消えてゆきたり

深き穴掘られてをりぬいにしえにけもの陥して獲りし暗さに

光り増す風となりゐて地低くたんぽぽの花は開き初めたり

店頭に強き陽射しを集めたる南国の花飾られありぬ

打つ波がやしんふ脚の赤銅の獵師大股に歩みて来る

注ぐ湯に開く桜の花びらの春行樂の友を浮べつ

いくつにも裂けゆく花火乱れ滅ぶもの美しく展きゆきたり

時ながき煙にくすむ巨きなる煙突が続ぶる空間のあり

ノストラダムスの予言の年の来るれば次の終末生まねばならぬ

肩に手に触れて散りくる花びらのひける光りに包まれてゆく

艶をもつ細き緑の密々と草は田の面を覆ひ来りぬ

照り出でて透くあさ緑春となる田の面に草は競ひ萌えたり

竹の子の伸びる芽地中に調ふを掘り居り金に代へんがために

菓戴せるワゴンを押して夜を廻り看護婦は何時眠るとあらず

雪もよふ空を渡れる雁の群くずれぬ列に山を越えたり

冬ながく乾きし土に竹の葉の色は褪せつつ伸ばす根をもつ

振る腕にたすき受ると待つ走者足を上げ初め駆伝熱し

色褪せし竹の葉打てる細き雨春を待ちゐるつぶやきをもつ

はなびらに山盛り上げて花咲きぬ続べねばならぬいのち持たり

切尖に土を開きて筍は伸びねばならぬこの世に出でぬ

夜を降れる雨に舗道の濡れ来り点る灯りを集めて光る

われの目を開きて朝の明け来たり雀生きゐる鳴く声伝ふ

死者をして死者葬らしめわれ生くるああ戦に死にたる友よ

このここに道に迷ひし人ありき右じようどじ左うれしの
手術するかせぬかの検査何事と思へど口のしきりに乾く
夕闇を鎧ひて迫る山となり一夜こもらん窓を閉しぬ

地の中に調ふ新たな芽のあらん竹の葉褪せて寒風に鳴る
なびく葉の緑褪せたる冬の竹乾ける庭を影の掃きゆく

何事のありてナースの走り過ぎわれは己れの首廻し居り

巻く渦の空洞作り空洞の巻きつつ水の流れ出でゆく

漂へる小舟の如く検査受く明日待つ体を床に横たふ

明日の検査如何になるかと無駄なこと亦も思ひて時過ぎてゆく
生かされてゐると言ひつつ悪口を言はれたと怒る声を出し居り

影として霧の中より現はれて影とし人は去りてゆきたり
飛ぶ声の突き出す頭の先端に尖るくちばし神はついたり
溜飲を下げたき万の目を集め打者はバットを上げて構へぬ
フェンスを越へゆくボール数万の溜飲下げゐる眼が追ひぬ
道乾き木の幹乾き我の目の乾きて冬の風の吹きをり
めぐらせる思ひに明日は恐ろしき顔をもちゐて立ち上りたり
雨防ぐ構へし屋根を仰ぎをり縄文展を見ての帰り路
ねぐら指す 鴉窓^{からす}を過ぎてゆき夕餉の灯り人等点もしぬ
けだものの眼となりて飲食の鉢の並べる前に立ちたり
ガラス戸の向ふの闇にわれのあり昏るる深さに現れゆきて

不景氣と雷族の絶えしこと偶然ならん静かなる街

癒えて来てしばらく命保つらし読みたき本を書店に探す

つかの間を揆けて散るを愛しゐて孫と夏夜の花火を囲む

一枚のシャツを着重ね増し来たるわが体温に出でてゆくかな

時ながき蔭に生ふ草少なくて大きな木の下水のひそまる

ながながと倒産せるを語りくるるわが倒産をせぬ声高く

古沼に幾年継ぎて水草の冬を潜める黒き根が見ゆ

満開の桜の花の饒舌に君と行かんか言葉携へ

カーテンを閉ずれば個室開けたれば共同の場に病室のあり

見の広き池となりゐて鴨が押す立てゐる波が光りを交す

生きてゐることに過ぎゆくにちにちに病室の窓眺めゐるかな

吹き荒れしひと日の過ぎておのずから臉垂れくる日差しの亘る

こめて来し霧にいただき高くして天に浮ぶは畏み仰ぐ

岩と岩囲ふところの波収め底ひに砂のゆれて動きぬ

白き壁目に立ち冬の街のあり葉の枯れ落ちし梢の細く

ほくほくと我は食べ居り焼栗の揆けし一夏の日差しの量を

羽搏きて窓を掠める黒き影鴉は埒ねぐらへかへるをを急く

松葉杖立掛け夕焼見る人と窓に並びて没陽の赤し

彼よりもましとの思ひふと兆す病みゐる心衰へしかな

月光は落ちたる紙に白くして渡れる天の澄みとほりゆく

涙もつ体に生まれし不思議さに思ひ及べり涙ぐましも

海底に這ひゐし魚の大きき口開きて箱に並べ売らるる

わたつみの寄す群青の波の背の鯖放られて土間に散ばる

流れゐし雲去りゆきて晴れわたり果なきものに瞳向ひぬ

煮魚の骨の数多を疎みつつ骨が支へし魚体にありぬ

芽吹きゐる下に枯葉のくさりゐて一年とふをわれは見てをり

散り落ちし枯葉の腐りゐることもいのち蓄めゐる大地を歩む

階多く重ねるビルの間に立ち円型のタンクのつぺらぼう
ひま

赤い舌窓より垂らすバーゲンの広告眉に唾つけるべし

指折りて正月迎へし幼な日の情景ありて床に臥し居り

靴下の織目を写す脚となりひと日はきたる靴下脱ぎぬ
けものらの眠れる夜を開きゆき電飾空に輝き循る

山槌^{つち}に沿ひて流るる水清く人等貧しく生きて来りぬ

山裾に幾軒新たな家建つはゴルフ場にと土地を売りたり

冬の日にホースリールの忘られてこのみ赤き光りを返す

爪赤き女が一人老人の間に掛けて山の駅あり

虫と白鷺 四首

耕耘のエンジン響く空の上白鷺陽を浴び群れて舞ひおり

耕せる土に棲みゐる虫を見る鷺かエンジン響きゐる上

耕せる人去りゆきて一せいに舞ひゐし鷺は降りて来りぬ

舞ひ下りし白鷺の群交々に頭動くは虫を啄む

山青く空気うましと掲げゐてこの村多く老ひと行き合ふ

愛郷のポスター掲ぐ駅前のお店閉されて扉鏽^{さび}たり

こころざし遂ぐを得ざれば昏れてゆく光りあつめて湖白し

空と地^{つち}別るるところに葬らる我なれ若き瞳とどきし

プラットに春光わたり脚白き女は脚を見せて過ぎたり

採石の山見え急坂登り行くトラックは山の蔭に消えたり

急坂を上るトラック岩蔭に消えてゆきしが出でて来りぬ

戦跡と書かれし標柱文字うすれ叫喚ここにありたりしかな

うまきもの食ふが生きゐる口銭と言へり唇あぶらに濡らし

これから生きどくなり友の言ふ唯飲食にすきてゆかんと

つねにつねに光りは影を伴へり土堤より橋の裏側が見ゆ

食堂に並びて食へる何の顔も唯一様のひたすらにして

留守居する妻に電話をかけおへて眠りゆくべく灯りを消しめぬ

灰色の空に影なき電柱のありて一人の朝餉に向かふ

炎がよぶ炎のたけり激しくる情に似ると思ふさびしさ

枯原に畝作られて人植えし甘藍の葉のみどりがありぬ

アパートの窓に吊るされ灰色のシャツは男一人が住まふ

このところ村を見下す松ありき朽ちたる後の何も残らず

団員が二人になりしと山峡のこの村今日より青年団のなし

愛の字をふれあひであひなぞに附す易き心も我は読みいつ

席を求め車内をゆききする人等我はかかはりあらぬ目をもつ

生活の手助けなどと高利貸の看板立つを都会といはん

ガラス一つ距てて雪に肩すくめ着ぶくる他者の歩みすぎゆく
憎しみて死にゆきたりと憎しめる力をもちていたるしあはせ
作られし菊の華麗に目の疲れ素直な畦の花と思ひぬ

口開けて眠りおりしか目が覚めて腔内いたく乾きておりぬ
目が覚めて口角濡るるに手の触れぬ涎たらして我は寝ねいし
汲取りの蛇腹のホース蠕動なしこの家の人生きのたくまし

工夫等は出でてゆくらし階段に乱るる音のしばらく続く
潮ひきし岩にとび来し数十羽千鳥は穴をつつきはじめぬ
魚を売る女等喋りつ乗り来り一人の旅は瞼を閉す

一掴み出してくれたるペーペーを分けおり戦時経て来し我は
山なみのなざれて槌ひく中腹に村あり後に墓を並べる

貨車が過ぎ特急過ぎてわが乗れる列車はドアを閉しゆきたり
板距て底ひ知らざる海の水白き漁船は出でてゆきたり

日の当る石に坐りて母親は背の子を抱き替え乳房出したり
差し交す枝に小暗き谿たにとなり岩間を水の激ちて白し

この山に執念く生きて枝継ぎし木地師と言へる人等もなしと
冬眠の虫は今日より出でくるといにしえ人は暦にしるす

室の掃除これからするとふ妻の声庭吹く風へ出でてゆきたり
月宮に姫住まはしめいにしえの人等は天を仰ぎ見たりき

自転車の幾台並び酒店に立呑む人等灯りに赤し

酔へる顔灯りの照し一日の仕事をしへし人等立呑む

仕事しへ歸りに寄れる酒店にコップの酒を一息に呑む

二杯程コップの酒を立呑みて充ちたる顔に出でて来たりぬ

いちにちを働き寄れる酒店のコップの酒に眠らむ人等は

夏の夜の明けて死にゐる虫無数虫は虫にていのち継ぎきし

沢近氏病む 七首

病惨を見らるは家族だけでよし見舞断るはがき来りぬ

やつれたる姿見らるを断りし君が心は瞼を閉す

奥さんが見せて下さる病床記文字乱れぬは心しずけし

読み進む病床日記ときおりに大きな文字に書きつけたるは

綴られし病とたたかふにちにちの文字の乱れの増して来りぬ

端正に書かれし文字の時として乱れ見ゆるは迷ふところか

常日頃語られざりし奥さんにかけてし労苦も返し記さる

削られし山に思ひ出重ねゆき鳥鳴く声に歩みとめたり

外燈の明りの中に動き出て蛙は集ふ虫をくはえぬ

美しく花咲く草を育てんと周りの草の取り除かれぬ

たどたとむく皮らしき見ておりし女はむいてあげると言ひぬ

しずしずと陽は西山に沈みおゆ雲に茜の色移りつつ

春となる光りの呼べる原の声土筆は土を被ぎもたぐる

雲の割る光りの差して紫のすみれの花のありたりしかな

醒めてゐるひとりの臉を閉ぢており風鳴る音は夜底に消ゆる

掌に種子まろばせば色刷りの袋の赤きはなびらありぬ

明かに水に梢の写れるをときに乱してふ小魚^{およ}遊ぶ

風にまろぶ紙を子犬の追ひ走り畦のよもぎの緑増しゆく

明かに松の緑の写りゐて堤に一人の歩みなりけり

草枯れし池の堤の風冷ゆる冷ゆる瞳になかく立ちたり

背の温む光りとなりて冬眠の虫ひそみゐる土に泌み入る

頬撫でる風の出で来て小波の池のたひらなおもて渡りぬ

さきがけてすみれの白き花の咲き髪をなぶりて風過ぎゆきぬ

疲れ来しあくび押へつ百貨店歩き足らざる妻にしたがふ

野 焼 八首

燃え上る炎が風を呼び込みて風が炎を煽り立てゆく

春呼ぶと焼かるる草は萌し初む青新しき芽を持ちゐたり

ひと冬を枯れたる草の焼かれゆきいのちはぐくむ光りの渡る

春を呼ぶ野の草焼ける煙立ち人交し合ふ小声の渡りぬ

ひと冬を枯れたる草に火を放ち来らん春に人等向ひぬ

枯草を焼ける炎は畦走りいのちはぐくむ春近づきぬ

ひととせのいのち了へたる枯草は撥ける音に火に包まるる

枯草を矢きて迎ふる原の春煙の中を人影動く

平らかな水と思ふに池堤藁莢いくつ転がりありぬ

一陣の風吹き来りたちまちに池は修羅なす波打ちはじめ

原稿紙机に置きてつくづくと学ぶことなく過し来りぬ

冬ながくひそまりおり土の中わらびは陽を浴び出て来りぬ

天に向く白きはなびら日に透きて木蓮の花競ひ咲きたり

冬の土夜に凍ておりこの下に萌し出ずべき万の種子棲む

去年生えしところと同じ草萌す生きゐるものは日々新たに

出でゆきし友 三首

死にしも今日伝はりぬふるさとを出てゆきたる君老ひてゐん

年老ひて知らぬ所に出でゆきし君よ其の後音信あらず

知人なき所に住むに年老ひし君なり死にし噂聞きつつ

平らかな池の面に撃ちたるは鴨か堤に菓莢散りぬ

解体の柱に煤の黒くしていぶける中に祖母炊ぎたり

白鷺は日に輝きて飛びゆけり水に映りて渡りゆきたり

梢ややけぶるはふくらむ芽にあらん歩みゐる背の日に温かし

小波のおさまり了へし水となり細き梢を木陰もちたり

小波の風ぎたる水を白鷺の陽に輝きて渡りゆきたり

魚の骨昨日見つけし場所目差し放ちし犬は走りゆきたり
道もせに茂るクロバー人の踏む一すじ低く山に消えたり
ただよひて来る香りに見廻して白く先たるくちなしありぬ
漂ひて来るかほりにおのずから吸ふ息深く沈丁花咲ありぬ
にちにちに青さ増しゆく畦道の今日はげんげの花が開きぬ
灰色に朝より雲の低くこめたんぽぽは今日の花卉を閉じぬ
餌は妻運動は我の犬の世話二人で寄れば妻にとびつく
枯れし草萌しゐる草たたずめるまみ締まらせて吹ける風あり
スピードをあげし車の走り過ぎげんげの花はそよぎていたり
にちにちに堤の草の青さ増し連れ来し犬は風と走りぬ

吹き来る風に目を上げ山と空分かるところのすみとうりたり
限りなく残るものなどあらざれば無縁佛は親しく立ちぬ

いのち終る唯それのみの清しさに無縁佛は墓隅に立つ

地の色なべて消えゆく夕まぐれのみどに熱き酒を欲せり

おとなしき男が酔ひて呼べるも我の裡なるさびしさにして

白く塗るガードレールの輝けば裡に唄へる死者のあるべし

枯るるべく伸びゆく草と思ほへば暫らく風に共に揉まるる

暴動の南アのニュース見来し目を池の面の平らに置きぬ

平らかな水に突き出る葦の葉の日日に領域増して来りぬ

冬原の草の枯れいて露はなる土にもいつしか押されししずけさ

万の花透かして点る電燈の百の明りに桜花咲く

枯れし草白く伏しいて量低く池の堤は移りてゆきぬ

民族独立の戦ひ

機関銃の向けたる口に走り寄る民族自決叫ぶ若きは

独立を叫べるものに銃火噴き死したるものは言葉をもたず

死とは何自由とは何ぞ銃火噴く前に出で来て血潮に倒る

常に常に変革は血潮に購はる街頭走る戦車を映す

地球より重き一人のいのちにて百人の死を新聞報ず

ごみ箱の中より出で来し犬のあり夕べの路地の闇に消えゆく

雨の降る窓を閉して灯を点し書を読む前の瞼閉じぬ

家解体さる

はぎ落すタイルの下に柱あり祖等炊ぎし煤の沁みたり

トラックに放らる瓦の砕けおり幾代過ぎし苔のむしいて

三世代住み来て我の継げる家沁みたる煤は黒く艶もつ

おやぶと

祖人の炊ぎし煤の沁む柱ユニボーはたちまち引き倒したり

土煙にかすみて倒さる柱あり裂けゐる音の聞え来りる

株で得し金は株にて失ひぬ天向ひて笑ひゆきたり

翅の音曳きゐる蜂と蜂を待つ花咲きうらうら光りの亘る

雨の止み光り射し来て花めぐる蜂の翅音の早も飛び交ふ

谷底の小さく咲ける花いくつここに飛び来し蜜蜂のあり

実をつけし重さに穂先垂れ下り春生ふ草の茎伸び切りぬ

春は黄と片山さんのうたひたる草も大方実を結びたり

畦草の中に茎伸び枯るるべくだいおうは葉を紅く染め初む

おのずから伸びゆくものの艶をもちキューイの蔓は柵を抜きたり

畦草に首突つ込みて嗅ぎおりし犬は一枚の葉をしがみたり

朝よりの雨に訪ひ来る人の無くおのずからにて瞳の深し

泡を生み水の落ちる音ひびきしずかなる野の歩み向けたり

すりガラスの明り俄に増し来り止みたる雨に瞳放たる

朝よりの雨にしばらく目を閉じぬ人に会はぬも放たれており

新しき花飾らるる大師像きびしく罰をあてる故らし

身の終りを意味せし年貢の収めどき農夫は年々経たる事にて

願へるは己が幸せ幾人か花を供へてのひら合はす

野佛は鼻の欠けいて傾きぬ罰当てざれば人の願はず

腰かけて休める場所も備えあり罰のきびしき大師を祀る

罰あてる大師に花の供えられ我は忘らることを願ひぬ

花の山の人に従きゆき吾の目は枯れたるままのすすきに向ふ

天づたふ月を映せる水おもて至り着かざるおもひに澄みぬ

飲み了へし壇の卓上に置かれて空しきものの透きとうりたり

目を閉ぢて瞼むくみし重さあり常より内の思ひくらくて

犬の声止みたる夜のしずけさに閉ぢたる本を再び開く

実の撥でて枯れたる草は吹き来る風のままなる傾きもちぬ

饒舌の尚言ひ足りぬ女等は手を振り合ひて別れゆきたり

奪ひ合ふ言葉に悪口言ひおりし女等いきいき帰りゆきたり

山桜散り落ちて晩春の葉群の中の一つとなりぬ

半年を梢にありて散り落ちぬこの精緻なる葉脈なして

散り落ちる一葉がもてる葉脈の精緻を畏る問ひゆきたれば

いたずらを共になしたる言葉にて禿と白髪た笑ひ合ひたり

花が咲きてあるを知りたる山桜このさびしさに向かひ立ちたり

先生と言ひたる声に見廻して我を見おれば返事をなしぬ

山桜花散りおへて葉の紛れ紫の房藤の垂れたり

山桜散りたる山に藤の房花むらさきの静なりけり

花明りして山の桜散り藤の紫は近寄りて見る

畦に咲く黄の花数の減り来り泡立草は年々低し

滴垂る柿の老ひたる幹黒く萌ゆる若葉は雨に透きたり

飛び交す羽根の唸りに花咲きて堤に春のたけて来りぬ

秋葉山回顧 十首

石積みし跡の散ばる山の上ここに秋葉の社ありたり

一望に村見ゆ山に祀られて火の神秋葉は朱く塗られき

このやまに砂運ばれて奉納の相撲取りたり小銭もらひき

奉納の相撲とりたる幼な日の酒に酔ひたる行司も憶ゆ

山も木も神のすまひしその昔祭りて酒に村人酔ひき

この山に神すまはせ祖先等のこころよ木々の緑さやけし

唄ひては酔ふを祭りとせし昔神と人とは一つ胃腑にて

村人の心に去りし山の神石魂いくつ跡をとどめる

我が世代過ぎたる後は散る石の何にありしか問ふもなからん

山も木も昔のままを神とせぬ我等の帰る返り見をせず

はや爪の伸びしがありて閉したる障子の内に一人坐しおり

憑かれたる目をせる女の表紙にて若き女は先ず取り上げぬ

大きな音の夜半に不意にたち夜の闇そこに暫く動く

鳴の皆帰り去りたる岸を打ち水は澄みたる光りを湛ふ

はなびの地に散り敷き春盛るいずくど恋ふる牛の咆ゆるは

道教ふ少女の指のいや織く夕つ光りに赤く染みたり

手に掴む砂の崩れをいく度も幼な童はくりかへしおり

花を切られ葉の黄ばみしアネモネは今日より乾く土にあるべし

削られて面新つらしく映ゆる木に大工ためらはず墨糸撥く

しろがねの鱗光らせ鮒番ふ産むはいのちのたかまりにして

山獨活を手に入れたれば来よと言ふ呼ばはる声を暫し抱けり

雨止みし小舎より犬の出で来り我見つむるは散歩うながす

噴きつげる煙はふくらみ盛上り天に昇りて拡がりゆけり

水に写る影に小鳥のありたりきながく見上ておりし木の間の

吹く風の白き羽毛を分けゐるを白鷺は立つ池の畔に

山城は石組み並ぶこの石を担ぎ運びし人の背あらん

山城の陰しく細き曲る径石を担ぎて人の登りし

知る人の音信大方電話にて郵便夫ごみを配達に来る

轆かれたる犬のはらはた露はにて我等ももてば血潮慘たり

雨止みて雲間に差せる陽のあらんダイヤガラスにシーツの白し

手を振りて少女笑へり知り合えることの歓喜は亦差し上げて

千年後に名を残さんも愚にてせなに差す日のぬくとさにおり

灯の下に踵の皮を削りおり歩みし戦亦出商ひ

時移り枯れて伏すると鶏頭の花の真紅の狂ひ燃えぬよ

おもむろに這ひゐる虫と距離つめし蜘蛛は一瞬飛びて捕へぬ

ひるがへる鮎の鱗は光りおり番ふ渚の草を揺りつつ

点しゐし昨夜の蛍は何処ならむ闇が抱きて庭の木々立つ

幸せと我を言ひおり我は唯生きゐる問を続けゆくのみ

とび立ちし鳥に見さけて南天の光りを返す赤き実のあり

にちにちに遊べる二羽の鳥のあり先に來て後に飛べるは雄か

金あるも仕方になしと言ひたしと幾等出来てもお前は言へん

測量機据えたる互の手を挙げて隧道抜くべき岩そそり立つ

弱る木の切られしことにこだはりて帰りの際に亦立止まる

凹凸のはげしくなりし舗装路を直すことなく村しずかなり

スピードを競ふ若きが追ひ越せるときしずかな我のありたり
人のみが他人の世話になることも蟬の骸の転ぶを見つつ
平安の故に移れる日々のあり一人留守居の怖れしずかに
藤の房垂れ咲きゐるも櫻花散りたる季の移りに見つつ
空高き雲雀の声の窓に降り下駄突っかけて歩み出でたり
一すじの煙と化する落葉にて庭に半年濃き蔭作る

安保容認社党の談ず 八首

角材に対せし安保闘争よ今日容認を社党の語る
闘争に流せし血潮の時移り安保容認社党の談ず
流したる血潮を無意味とならしめて時移りゆく安保のことも

流したる血潮は移りゆく時に罪とふ言葉を多く貼られる

安保闘争忘れていしは容認に移りていしか社党の談ず

動きゆく世界は世界の論理持ち流せし徒勞の血潮うるはし

角材に安保闘争なしたりし人等を容認談聞きゐん

安保闘争なしたる人等容認の談話に如何なる自己評価をもつ

争ひて吠え合ふ犬の声聞えつながら犬は立ち上りたり

降り来よと語りてやりし月面の兎に幼こえをかけたなり

もの乞ひの幸やんは如何なる死に方をなせしか不意に思ひの来る

如何ならん死に態もつか年々に問ひの大きく育ちて来る

乾きたるタオルに汗を拭ひおへ緑新たに風走りゆく

本能寺に向かへと光秀采を振る決断は常に偶然に似て
軒庇闇をなしあるひとところ落つる雫はそこに光れり
のみの先のミケルアンゼロの目に沁みて滴り落つる真夏の汗は
雨の止み出で来し原に水ひびき犬は歩める足を速めぬ
溝に水溢れて流れ早苗運ぶエンジンの音空にひびかふ
口惜しく過去ありたれば頬杖をつきたるままによる更けゐたり

雷 鳴

雷を伴ふ雲の空覆ひ青年土工の肌黒き夏
黒雲の中閃光のかけめぐり谷ふるはせて雷鳴渡る
轟ける神鳴る音は内深くもちいて出でぬわが声にして

天地をふるはす音をもたざれば雷鳴渡る耳のさびしさ

地を撃つかずちの音轟きて吠えぬし犬は小舎にひそみぬ

轟きて雷鳴空をふるはすを男生きるはもつばらにあれ

頭にかざす本に涼しき風生れて垂れいし首をすぐく伸ばしぬ

結局は我が四畳の本の部屋酔ひし眼を開きていたり

隣ゐて俺が俺がと言ふ男酒飲むころしずかならしむ

木の株のめぐりの雪の融けており冬も昇れる樹液のあらん

株のめぐり雪の融けおり葉の落ちし木にも昇れる樹液のありて

緋の花に秋の光りは澄みゐたり人無き山の駅の傍へに
初めなく終りのあらず流れゐる水と思へり夜半を醒めて
この先は人家のあらぬ山峡の家より幼な児泣く声聞ゆ
灯を消して水の流るる音伝ひ眞夜は地表に我のつながる
送りたるままの荷物の積まれいて店主は黙し帳簿を開く
ああと言へばおおと応へてこの店の主は椅子を差し出しくるる
目の届くかぎりを夕闇見てゐしが障子閉ざして頭垂れたり
水の音生るるところに我のあり宿の一人に夜更けてゆく
サルビヤの緋のきはまりて散り落つを風に冷えたるまみとなりゆく
見知らざる土地にてバスを待ちゐつつ青き大空仰ぐ親しさ

すでに地に種子を落せし秋草のさやさやとして風に吹かるる

泥沼の中より抜き得ぬ足の夢目覚めて足のほてりありたり

目に追ひし小鳥の群の森に消え澄みわたりたる秋空ありぬ

森蔭に鳥消えてゆき澄み渡る空にとどむるひとみとなりぬ

うるしの葉真紅なるまま散りゆけば透明の碑を我は刻まん

ひと年の陽に熟したる柿の実の光り返せり確信のごと

容るるべき心の積よ湖の水平かに夕暮れてゆく

傾きつ走る列車に我があれば水は走りて明日に流るる

野良を行く農夫の鎌を持たざれば鎌売りわれは目を落したり

地下街に秋となる風入りゆけば行方知らぬと人には告げよ

深々と頭を下げる老主人この山中の宿のしずけし

宿の灯は床の白磁の壺に照り己れにかへるひとみとなり

机一つたたみの上に置かれいるこの簡明に遠く宿りて

真夜を覚め敷布の振れを直しおり歩み商ふほえる足もつ

間に合つてゐると名刺を返されぬ頭を下げて戸口出でたり

まいどーと言ひたるままに室に入り父の代より取引をもつ

鎌屋さん今日はおれんちに泊つてゆけ日の高ければ好意のみ謝す

出張の案内見てより保ちしとしめじの汁を作りくれたり

商談をなしゐる室に酒置くは今晚泊めて吞ましてくるる

明け初めし窓に聞ゆる靴の音朝通へるは歩みの早し

大きな木蔭のベンチは鳥の糞多し払ひて寝ねにけるかも

天分つ青き峯より吹き来り風簾額の汗を拭ひぬ

終戦と夾竹桃のあかき花年経て我に強く結びぬ

葉の露を払ひて朝の風の過ぎ大地を踏める歩みなりけり

顔上げて草原渡る朝風の胸内にふかしおのずからにて

夕闇の覆ひくる中ややこゆき闇となりゐて歩みゆくかな

小さな種子とし落ちて草枯るる蕭条として風の吹きおり

しょうじょう

朝顔の青に朝の空気澄み本を読むべく歩み返しぬ

耳もとに小さな声に告げ来り少女は秘密を持ち初むるらし

コーヒーを一口飲みて背をもたらせ一人となりし瞼閉ぢたり

かたまりて少女等何にか笑ひおりしばらく茫と我は過さん

隣席の声もとうきがごと聞きてコーヒー店に睨閉じおり

ひさし深く帽子かぶりて歩みおりこの街知る人多く行き交ふ

うつうつと出で来し今日やおのずから道のへり撰る歩みなりけり

活作りされたる鯛はいのちある限りの口を開き来りぬ

晴れ渡る原となりきてはるかなる山は競へる木々として立つ

雲を割る光りおよびてはるかなる館はみひらく窓をもちたり

戸を開けて夏の日差しの白く照りしばらく眩む老ひし目をもつ

散り落ちしくすのきの葉の紅が風に吹かれて近くに来る

炎なす日照りも蟻は自在にて足の上にも登りて来たる

蔭ふかきところにベンチ置かれありすなはち我は歩み寄りたり
かりかりと自がせんべいを食ふ音の夜の底ひに聞けるさびしさ
歌作るひまに木影の伸び来り平たき岩に腰を下ろしぬ

世界を圧す日本企業おのまざまざと折込広告求人多し

クレータと岩と埃の月魄しろのはるかなものは輝きて見ゆ

他者として見れば輝く吾なるか月照る道を歩みゆきつつ

呼ばれたる人つぎつぎに立ち行きて待合室に一人となりぬ

名を呼べる声にふり向き久に逢ふものの互に歩み寄りたり

日の斑紋地にゆらめき葉を渡るすずしき風の木蔭にきたる

岩を置く間を童の駆けめぐり危ふし老ひしものの眼は

てっぺんに登りし少年仰ぎある友をしばらく眺めて降りぬ
三度目を窓口に立ちて尋ねおり痛みに耐へて妻の病み臥す
いしぶみの埃を落とし木の葉揺りわが髪乱し風の過ぎたり
寝て見る枝を組む木の高きかな葉蔭ゆ蝶の舞ひ降り来る

渦巻きて散りゐし煙おさまりて箒を担ぐ媼おうなかへりぬ

雲が出て光と陰の原に消へ内に還らん歩みを運ぶ

ひたすらに星の光りに祈りしと古代の心遠くまたたく

ののさんと我も唱へし月の冴え昭々として中天渡る

買ひ換へて使はぬ時計が正確に時刻めるを机に出合ふ

かげろふのひと日の命に飛び来り我等祖より承くるは永し

トンネルの傍^{かたへ}に古き道ありて山越ゆくねりの草にかくるる

もちの実の赤く光るに長く立つ冬にてあれば枯原なれば

おのずから歌詞に体の撓^{たわめ}ひゐて舞台の少女唄ひつぎゆく

待たれあるものの輝きおくれたるバスは街角曲り来りぬ

蛇の子は生れたるらし道に出て少し血を出し轢かれ死にをり

名を呼ばれ立ちし少女の直ぐき脚わが失ひし素直さにして

黒き実の並び輝き葉の落りし草は秋逝く風に吹かるる

スリッパに差し込む足のよろめきぬ老ひては忘れ生きて行くべし

過剰米過去最高の記事を読み豊稔の神を祀ると出ずる

窮したる返事は湯呑手にとりて飲むともあらず口に当てゆく

りんりんと渡れる声をひびかせて鈴虫終る命を鳴きぬ

はるかなる峯^{あた}鮮しく並びゐて二日降りたる空晴れわたる

吹く風にうねり打ち合ふ葉となりて近くにあるは傷をつけ合ふ

幹黒き木肌に置ける目となりてベンチに一人腰を掛けをり

雌犬を飼ひゐる家の横に鳴きひきゐる犬は抗ひをもつ

徐行せし車の窓の開かれて知りゐる顔はほほえみをもつ
掴まんと努め来りしてのひらのしわより乾き固きを開く
帽子脱ぎ首振り汗を拭ひたる男稲田に屈まりゆきぬ

対ふもの無き安けさに帰りたる後をしばらく頬杖をつく
金色にまな界ゆれて稲の穂の一夜の熟れを増せる明るさ

一日の熟れを展ける稲の穂の充ちゆくものにながく立ちをり
すきとほる滴が葉末にふくらみて降るともあらぬ朝よりの雨

かたくなに言ひ出しことを言ひ募るわれといつしか成れてをりたり
言ひ出でしことを否まる不快感強くなりゐる我と氣付きぬ

鼻の穴二つ作りし御心の量り難がてにて鏡見てをり

癒えて来て自在となりゆく身体の招きてゆける天地がありぬ

ぎっくり腰 八首

病まざりし吾に痛みを知るべしとぎっくり腰を与へ給ひぬ

寝返りを打つことすらも怖れにて仰向き真夜を目覚めてをりぬ

咳の出る喉の予感に怯へつつ痛み能耐へん手足を構ふ

底のなき痛みに怖れ向ふとき神よ汝に作られてあり

かすかなる動きに激痛はしりゆき知るべからざる身体をもつ

電撃の如き痛みに耐へて坐し壁を伝ひてトイレに通ふ

帰り来し外科医の息子がしつぷ薬痛み止めなど出してくれたり
身の中にどうすることも出来得ざる痛みのありて神にかかはる

ペタル踏む脚に突つ立ち急坂を若きら連なり登りゆきたり
澄みとほる支流の水もしばしにて大きな川の濁りに呑まる
壇の水区切りて透ける確かさに朝の卓にしまりてをり
峯いくつ月に浮びてわが生きる大地は夜をしずもりてをり
癒ゆるのは日にち葉と人言へりのろのろとしてズボンをはきぬ
読まざりし本の並べる棚見をり後ひと月で八十となる
夕映へに水蹴り翔ちし二羽の鴉^{にお}渡る茜にかくれゆきたり
柿の実の一つ残され日に映えて伝へ来りし言葉を守る
茂りぬし草の倒れて競ひたる茎の細きを露はに見せぬ
時間とは癒ゆる体が取戻す活力にして朝を起きたり

鉄 斎 五首

八十を過ぎて画境を拓きしと巨人といふに思ひを致す

六十はまだ青臭く八十より天地の氣概表し初むと

筆端に天地具現の自在とど富岡鉄斎晩年の作

如何に描く思ひ消へたる年となり筆おのずから動きゆきしか

八十となりたる我よ行く雲の流れ自在の言葉あれかし

差し交す森が落せる蔭冷へて森は孤りの言葉生み継ぐ

枯れて伏す窪地の草は冬の日の浅きを溜めし温とさをもつ

無視されてゐることも亦楽しくて各各異なる顎を見てをり

笑ふとき皆一様の顔となり論たたかはす集会つづく

血のめぐる赤く透きたる指となり夜の焚火にてのひらかざす

勝利せしものの顔なし噂して居りたるものも帰りゆきたり

這ひ居りし蟻の入りゆき昏るとき命満たる地の中ありぬ

夜の駅を降りたるものらひたすらに眠らんわが家を目指して歩む

貴方程病気の似合はぬ人無しと才筆満ちたる賀状をもらふ

草とそよぎ水と流るるにちにちの運びにあれや八十となる

立ちをりし煙いつしかうすれゆき炎ひたすら燃え澄みてゆく

銃声は冷えたる冬の空走り撃たれし鳥の羽毛落ちくる

寒風に色まさりたる葉のみどり若松切りて年改まる

とび上り逃げたる猫は燐光を放つ眼に我を見てをり

亡き後を芽吹かん言葉もちゐるやアスパカスの枯株眺む
草枯るる原を歩みてゐたりしが水の音するところに出でぬ
身熱をもてる歩みに重量のあらざる原の景となりゆく
抔げたる梢に風を鳴しつつ蔭の音なく老ひし木の立つ
千切を干せるむしろに冬日差したずねし山の家は閉せり
血の色に山茶花紅く散り落ちて土露はなる冬原ありぬ
枯れて伏す原に白鷺あらはにて冬を生きゐる眼鋭し

枯れし葉は浅き光りを溜めてをり冬の風なき畦のなざりに
力あるもののしずかに大きなクレーンは鉄を吊り上げてゆく
應へ得ぬ自が貧しさに湧く怒り汝を疎む形に向ふ

濡れて来て光りを反す道となり枯れたる冬の原を貫ぬく

二三日暖かなりし草の芽の一人歩める瞳に繁し

関らぬ思ひも隣の噂する声の次第に耳を占めくる

島蔭より漁せし船の戻りをり朝の茜に照りの増しつつ

方形の畑となりし台地あり伝へし言葉忘れあつ

動くもの蒸気のみなる冬の野の天に拡がり消ゆるは眺む

落つる水撥ける岩に立ちのぼる飛沫は虹を生みつぎゐたり

売れ残る桃腐りきて捨てられぬ運命は誰さだめと言ふにはあらず

戦に油をとると植られし川原の菜種が今年も咲きぬ

この山を拓きし汗の量のあり棚田に荒き草の蓋ひて

氷張る下に氷の張るが見え荒べる風が光りはしらす

スイッチを押せば落語が殺人に変わりて飽かずテレビ見てをり

飛沫立ち岩のり越える流水は淀みに入りて青く澄みたり

殺されし鳥おびただし一組の羽毛布団の値引き求めて

重量車通りし道の亀裂もち照る日に黒き蔭をひきたり

少年は空を見上ぐる飛び立ちて逃げたる蝉の聲の残るを

松喰ひに枯れたる松に目のゆきて緑さかな夏山ありぬ

淡く透く若葉の緑増し来り日差は飛ばん虫を呼びたり

枯草を鳴らせて風の走りゆき赤き耳立て園児並びぬ

裏庭の陰の湿りてかびの生えかびが保てる陰湿ありぬ

ネガ透かし説明さるるわが背骨白く細きが体を支ふ

よどみなく血潮のめぐる我のあれみどり透きたるレタス購ふ

枸杞くわの実の赤く熟れたる五つ六つ枯れたる原を点してゐたり

雲低く視野をせばめて雨の降り窓を閉して本を開きぬ

黒衣にて並び送りし人も去り忘られていく死者にてあらん

買物を了へし女の和む目と並びて階段下りゆくかな

少々の色の違ひと思へるに女は亦も売場へ返す

今少し色の濃きをと惜しみなく時間費す女待ちをり

誰も皆己が口へと運ぶべく卓に並びて箸をとりたり

地の應へ確となりしあし裏の癒へて来りし歩みを運ぶ

昇りつめしばらく宙を探りしが尺取虫は下りはじめぬ

僧房の隅に坐を組む人おもう華やぐ踊り見てゐるときに

一跳びの溝とおもふにためらへる足となりゐて廻りゆきたり

航跡雲空を貫き少年に還る瞳に仰ぎゆきたり

ことごとく空を指しゐて若草の伸びゐる道を歩みゆくかな

残りゐる命いくばくと思うとき過ぎたる日日の放漫なりき

残りゐる席の温みに温もりてバス来るひまの冷へに耐へをり

幼な日に歩み初めたるよろこびか癒え来し脚の直く伸びたり

日曜になるとブロック積みゐしが門燈つけて明り点もしぬ

雄犬は雄犬に向き吠え立てり勝たねばならぬ足の躍りて

海草の千切れて浜に重なりぬ昨夜は唸る風の吹きたり

窓の景闇に沈みてぼつねんと宿の灯りに我の坐しをり

花おへて忘れてゐたる梅の木の青くふくらむ実をつけゐたり

陽炎に菜の花ゆれてジャンバーを脱ぎし軽さに歩みゆくかな

時ながくわが目養なふ峯青く播磨山脈今日の晴れたり

庭隅に蟻の出で入る穴ありて底の見えざる闇の潜めり

照り出でて片面暗き影とんり道に沿ひたる電柱並ぶ

渋滞の車窓に首を出し入れす富みたる日本の一にんとして

鏡面に写れる瞳鋭くて見られん顔を女つくりぬ

紙障子はしれる黒き影ありて干せるタオルに風の吹くらし

ガラス戸を打ちゐる雨は灯したる光り散らして飛沫はしらす
雨に置く葉末の露を撒き散らしわが足音に鳥の飛びたり
ろうそくの灯りに我の影法師われを吞込む大きさに立つ
躍りたるひれの激しく刺身にと作らる鯛は死にてゆきたり
杉山はまだ冬葉のくろくして開く桜の花のつづりぬ

吉野山 六首

蔵王堂仰ぎて高しこの屋根より義光腹切り臓腑投げたり
腹を切り臓腑を敵に投げつけし氣力もちたるいにしへなりき
法螺貝の音轟かせ山伏のこの山坂にひしめきたりし
腕程の太さの葛飾かずらられて山の深さに思ひの至る

音に聞く大和の吊し小屋掛けて老ひし男が一人ひさぎぬ

国の富傾け帝の詣でしと生きるは誰もおろそかならず

菜畑に唯一匹の蝶をりて飛び交ひもたぬことのさびしさ

前肢を揃へ散歩を待ちてゐる犬よしとしと雨降りつづく

生む雲の白き一すじ飛行機は大きな空を貫きて行く

競ひ合ふ異なる緑に芽の萌し山はひと日のふくらみをもつ

釣りし魚池に戻してかへりゆく程に過せしひと日なるべし

ごみ底をめくれば動くぞうり虫住めば無辺の天地なるべし

差し伸べる天の日差しに紫のリボスの角芽解きゆきたり

露に濡れかがやけ耀りある苺簞に盛り一つだけだと言ひて下さる

月光の濡れる下に杉の秀の尖るが黒く並びて澄みぬ

じいさんが要るかも知れぬと置きゐると錆さびたる物ら積れてありぬ

山坂に萌ゆる芽並びへとへとに疲れる程の若さが欲しき

花散りてふくらむ小さき実を抱き命は常によるこびをもつ

葛藤かつとうの涙を舞ひ終へ舞踏家は両手を広げ笑みて礼しぬ

竹とんぼ過去へ過去へと飛んでゆきわれに小さき掌ありぬ

頭の上を不意に過ぎたる鳶の影不意と言へるは大きくはやし

日の光り射せる形に花開きひまわり太き茎をもちたり

桜たらの芽を探す眼に歩みをり天ぷら食べし記憶をもてば

苗植える機械の音の野を渡り養ふ水の満ちて流るる

水圧を耐へ来しものの噴き上がり抜かれし水は流れ出でたり
虫を待つ蛙は窓に止まりをり呼吸に喉の動くのみにて

砥に当てし鋼片火花をはしらせてものを切る刃の形なりゆく
かすかなる波紋ひろがり低く飛ぶつばめは水に翻りたり

拾はんとしたる帽子が亦ころび漫画の人となりて追ひゆく

合槌を打ちし言葉が言葉生み酒飲む席を去りゆき難し

蝉の声空渡りゆきひたすらの声もたざりしわれのさびしさ

田の水に写れる雲の流れゆき早苗は確かな青に根付きぬ

夕されば虫の飛びくる窓となり蛙は昼も動くとはせず

大江山紀行 四首

赤鬼の像がそここ並べらる征服されし人の姿ぞ

われらにはよこしまなしと叫びしと征服されて鬼とされしは
亡ぼせし鬼と名付けて自らを正しとなせり勝ちたるものは

勝ちたるが裁きもちたる戦の敗者は常に言葉をもたず

粗き石ころがる中の拘こたされて新たな道はここに着くらし

稜線は夕のもやに浮かびゐて一すじ青き起伏引きたり

新聞を拡げて日本の危機の記事読みたりしが飯を食ひたり

あおこなぞ太らせ夏の沼のあり炎暑は水の済むをゆるさず

熟れてきて解かん日のためたんぽぽじょの絮はひしひし組みて構へぬ

ガラス戸に止まりし虫は灯を映す眼の光り増してゆきをり
灯を写し光り増しくる虫の目の動かぬものを怖れてゐたり
更けてゆく夜の空渡る鳥の声帰らん声のしばしとどまる
走る音廊下にひびき訪ね来し孫は開けると我を呼びたり
悔恨は死者につながり何うしようもなく夕闇の道歩むかな
鳴る風の音の止みたる夜更けて行方を問はん眼冷へゆく
老ひし木の肌はだえに蟻の連なりて朽ちてくずれしところあるらし
力ある限りの燃焼をへし火は風に散りゆく灰となりたり
針金を巻きて撓たわむる枝いくつ鉢に松の木整へられる
覆ひくる夕闇の中帰りゐる足音のみの吾となりゆく

靴の音のみの歩みをもちろしが灯りに出でし我となりたり

外燈の灯りに見出でしわが姿救ひの如き歩みを運ぶ

ごみ箱に鴉が居りて寄る我に生きねばならぬ眼を向ける

戦^{いくさ}より帰りし時の紅冷えて夾竹桃は花を満しぬ

蝸牛の小さき角の沈めるを触れたる指の冷へに見てをり

地の中に伸ばしつづける根のあればわれは一人の本を読むべし

はるかなるもの見渡さん梢高く鳶は飛びぬし羽根を休めぬ

汚るる手を透きたる水に洗ひをり即ち透きたる水の汚れぬ

びっしりと一日刻みし予定表われより遠きものと見てをり

望月にかかりてゐたる雲流れ明らかなわれとなりて立ちをり

蒼穹の見ゆる限りを見てゐしがおのれに眼還しゆきたり

一年の蓄めし力に葉の茂り杉は去年より深き蔭なす

並び来しあきつの翅が運びゐる透きたるものに歩みを合はす

累々と祖先連なり累々と子供連なり夜の目を開く

鳴く声の夜空に消えてゆけるときわれも一羽の飛びゐる鳥ぞ

密々と生え茂りゐる草の葉の互が投げる暗き蔭見ゆ

しつ黒の空晴れ来り目とつなぐ億光年の光り差し来ぬ

轟々と空を鳴らして風の吹き屋根ある家にわれは住みをり

八王子の地名残りて地盛れ土を拝みし祖先つちのありし

スーダンの奥地にテロの訓練をなしゐる記事もビール飲みつつ

翅拡げ立上りたる鈴虫は全身震はせ鳴き初めたり

十五分後と告げられ誰も皆おのれが腕の時計を眺む

痴呆など体の中に潜めると焦点宙に浮きて坐りつ

這ふ虫を蛙は啞へ飲み込みぬ罪と言へるはおのずからにて

赤き光り反し走らす田のテープ啄む雀を追はねばならぬ

大きな声に鳴けるが太りゐて子つばめ首を伸ばし合ひゆく

コスモスが休耕田に植えられて日差に色彩競ひ合ひをり

子つばめは開けたる口に声競ひ餌を持つ親の帰りくるらし

あほみどろ水の表を領じゆき夏はいとなむ命のせめぐ

夕風の冷え増し来り夏草の伸びて下葉の艶の失せたり

赤き光り走るテープに雀追ひ稲田は稔る穂の垂れ来る

これからが生れ来りし口銭と言ひぬし友のともらひに行く

雲白くゆるゆる流れ吹く風に我も野径を運ばれてをり

刈られたる莖より浅き黄みどりの芽のほそぼそと伸びて来り

風なきにはらりと落ちてわくら葉は浅き黄に澄む色を地に置く

黄のまさり熟れて来れる稲の穂の風に明るき光り渡りぬ

われ故に不幸となりし人の顔次次うかび夜を覚めたり

習はしを当然とせる父母と否める我が一つ家に居し

石に名を刻みて並ぶ墓原に花を抱へし人連なりぬ

悪人も義人も石にきざまれて人は香葉を飾りゆきをり

石に名をきざまる我とおもふとき墓前の花の赤く咲きたり
遠き灯のまたたき明るくなり来り背後の山は大きく黒し
熟れて来し黄の明るさに稲の穂は朝の原を展きゆきたり
診察を受くる思ひは身体の内部に向ひ瞼を閉ざす

病院の待合室に友来り沈黙のがれん饒舌をもつ

子を抱き空を見上ぐるブロンズの裸婦の台座は希望と記す^{しる}

茜差す夕の光りにあきつ群れ輝く翅を並べ飛びゆく

目も開かぬひなが声挙げ餌を欲るわれももちゐる命の姿に
引き寄せる布団に肩の温かく遠き祖より承くるいとなみ^{おや}

分ち来し血潮が結ぶ墓域あり承け来しわれの水を手向くる

並び建つ墓に日の差しいのちある限りを生きしうからを埋む

必ずや行くべき墓とおもふときうからの声の埋まりてをり

風の昇る糸に加はりくる力少年飛翔の瞳ひからす

枯れし蔓空に泳がせ人を見ぬ畑は冬に入りてゆきたり

掌に摺り上りたる米並べ暫し恍惚の目を色をもつ

われの血にふくれたる蚊を追ひゆきて高き天井をながく見てをり

くれなひの全く澄める曼珠沙華はるかな涯は天地を分つ

夕茜光らせ飛べるとんぼ群れ吾の肩にも一つ止まりぬ

パチンコに負けたることを幾度も言ひては酒を誂へてをり

杣道に草生ひ茂り納屋隅に錆びたる鉋なたの吊されてをり

這ひ伸びし蔓より白き根を下し草は引かんとするを拒みぬ

透明の水は底ひに目を誘ひ砂のかすかに動きて湧きぬ

へつついへつの神と言へるがあたりき人の拝みて食物ありき

蔓草は根を出す節に切れてゆき残るいのちを土に繋ぎぬ

刈られたる株の切新しく稲田は冬の広さとなりぬ

憎しみがいつしか消へし親しさに八十年の思い出ありぬ

葉の散りて光りの量の多くなり土親しくて林を歩む

襲ひ来し黒雲たちまち空を呑み道をたたける雨音となる

ここの山稲田に拓きし碑が立ちて休耕田は草に埋もる

曼珠沙華枯れたる花の捲まくきゐるに老ひし瞳の敏く向ひぬ

若者は力の限り唄ひたるものの笑ひにマイク置きたり
草蔭にいこへる鴨にりよう銃の筒先次第に定まりてゆく
稲妻は夜のガラスにひらめきて夜を われの伏しをり

清死す 五首

残りなく生きたるもののほえみに遺影は我の顔を見てをり
兄貴から死んでゆくのが順当と言ひて居りしが先に死にたり
子や孫も大きくなりて商売も順調なればよしとなさんか
いきいきと受註の電話受けてをりやすらかに永き眠りにはいれ
いつにても明日を望みて生きてゆく長谷川の血の伝へしものぞ
杉の秀の光りし緑映しゐて山に囲まる池しずまりぬ

平らかな池の面に輪を描く虫のうごきて山しずまりぬ

あるだけの声挙げ幼の走り寄り帰れる母の脚を抱きたり

目の窩は大きく暗し鮓にする鯖く^{くぼみ}り抜かれ並べられをり

回る砥に当てし鉄より火花散りものを切る刃の形なりゆく

しろがねの露を置きたる万の葉の原は一つに光りを交す

救はれん魂ここに眠れると地藏の掛けたる布のあたらし

日本の危機など記せし新聞をまとめ括りて納屋隅に置く

飯を盛る碗の形の簡潔をいつくしみゐて老ひ来るなり

美しく塗られし故に剥落の壁もつ堂を廻りゆくかな

剥落の姿の故の慈悲の顔まさり来れる佛に向ふ

もの掴む形に波の立ち止り砕けて泡に消えてゆきたり

鈴虫の鳴きゐる声の渡るとき怠惰に過ぎしにちにちのあり

岩の間に一つ生えたるりんどうの守れる青に咲きてゆきたり

金色に全身装ひ逝く秋の光りを浴びて公孫樹立ちたり

台風がゆさぶり菜の葉の萎へるしが一夜過ぎたる張りを持たり

幼子は危く階段登りをり迷はず出せる小さな腕

街に住む孫に送れと柿の実の熟れしを交互に持ち来下さる

竹の幹直ぐく並べる影黒く透かして夕の茜かがやく

すさびたる昨夜の風のまざまざと倒れし稲は縦横にして

賞められし言葉に我の声の浮き厭へる我となりてゆくかな

台風を防ぐと打ちし板外す音そここに晴れ上りたり

同じ時間指せる時計はさまさまの装ひもちて並べられをり
殺すべく双のてのひら上げてをり這ひゐる黒き蠅の背の上
村人は眠りゆくらし亦一つ灯りの消へて黒き家並

月の差す白さに家並の瓦照りもの皆眠りに入りたるらしき
刈られたる後の稲田の草細く蔭に育ちしものは眺むる

昼食を告げたる孫は扉押へ出でくる我を待ちてをりたり

食ふために分けてゐる声捕へ来し魚は籠に黒き目をもつ

水を押し鴨ゆるゆると泳ぎをり獮解禁の始まるは明日

霜置けば枯るるひこばえ命ある限りの青葉伸ばしゆきをり

輪を作る少女等空へ響きゆく声の陶醉深みゆきをり

肺洗ふ空気しばらく吸ひ蓄めて本を読むべく窓を閉しぬ

鎖よりのがれんとして引つ張りし犬は素直な肢に戻りぬ

うすれゆく霧の中より紅き葉の先ず現はれて秋ふかまりぬ

おのがごとのみを語れるかたはらに疎み増しつつ肯きてをり

灯したる我が家のたたみにあぐらかき茶碗と湯吞手に取ゆきぬ

向けてゐる母の瞳に手を挙げて幼な童は歩みゆきたり

おとがひの肉の力の衰へて垂るるが映り店の明るし

苔さびし墓に向ひて君問ひぬ耐へ生くとは如何なる事ぞ

足音のわれに還りて冬原はいとなみおへししけさにあり

めぐりゆく時計の針に廃屋とならんが為に建ちし家見ゆ

石垣の間に根差し育ち来て一輪の小さき花を掲げぬ

両手上げ泥より足抜き倒れたる稲を起して刈取りてをり

ひとかた

人形と言へるは暗く人形にんぎょうと言へば明るき歴史もちたり

曇り来て光り沈める水の青そこより原の黙ふかし

誰が為といふにはあらず熟睡うまひする裸女豊満の白きしむら

次々と霧の中行く人の影朝の歩みは淀みのあらず

集めても飛ばん術なくむしられし鳥の羽毛が散ばりてをり

支柱より伸びたる蔓は蔓と蔓巻き合ひ天に向ひてゆるる

はいりたる蟹は出られぬ構造の箱を沈めて人去りゆきぬ

ぐさと刃を刺し入れ柿のへた取りて女は皿に出してくれたり

誰も見ぬ故闇のやさしかり涙の頬を伝ひ来りて

開きたる朝顔青く日に澄むを領ちて朝の門を出でたり
あした

おごそかに昇る朝日に背の直ぐき我となりゆき迎へてをりぬ

今日生きるならはしとして目覚めたる朝の口をすぎゆくかな

すぎたる朝の口に味噌の香の今日新しく啜りゆくかな

密々と木を組み交し建つ塔の匠の深き翳を仰ぎつ

夕闇に沈みてゆける目の冴へて光りあつめる水の白あり

耕して死にたる親に似て来り隣のをきなしわの増しゆく

掘むべきものあらざれば双の手をポケットに入て歩みゐるかな

ずり下るズボン露はに映りゐて旅する駅に鏡立ちたり

実の成るが神秘にあれば顔くするるも神秘にあらん熟柿落ちたり

柿の実のなべてもがれて黄に映ゆる光り失せたる畑となりたり

木の上に鳥の止まれり目の届く限りを見渡す頭を上げて

腰低く脚やや開き一輪車押せるは重きものを積むらし

落つる葉に肩を打たしめ秋の逝く林の中の我となりゆく

しべもたげ花びら垂るる野の草の滅びの中を歩みゆくかな

スタンドを埋めし人等こうふんに飢えたる声の応援送る

大空に球はしりゆき熱狂に渴ける声のドームゆるがす

せめぎ合ふ雨紋となりて飛沫立ち池の平らに雨の募りぬ

にらみ合ふ女の開く大きな目われはテレビを消して寝たり

木の蔭のなす幽晴に入りゆきて人に疲れし我のありたり

開きたる窓に入りくる風のあり動けるものはさはやかにして

重ね合ふ葉蔭を通ふ風冷へて長き山坂登り来りし

亦前のページに戻り読みてをり解きがてなるをよろこびとして

水落つるところに集ひ小魚は生きゐるものの動きを競ふ

見のかぎり稲葉のみどりゆれてをり遠き祖より耕おやしきたる

退院して日が浅いから暑いから読まざる口実次次ともつ

にじむ血に縮みて肉の焼けてゆき食ふべくたれの中につけたり

ごきぶりをたたき殺して口の端の歪める我となりて立ちをり

笑ひ声挙げたるときに思ひ出す名前となりて話はずみぬ

脱がされて自由となりし手や足に親の手を抜け幼はしりぬ
大きなるごきぶり茶色の背の光り人居ぬ卓を領じてをりぬ

耳動く猫との音の違ひなぞ思ひ追ひゆき日向にながし

山陰に舞ひ交ふ鳶の高くなり気流はそこに昇りゐるらし

熱き血の循環し記憶戦ひは愚かなりきと人の言ふとも

沸る血が全てでありし青春のわれは戦に出でてゆきたり

ボール蹴り転びし後を追ふ童一人遊びて休むことなし

柿の種切られて白き胚が見ゆ育ちて胚を作らん胚は

勾玉と胎児の形似てゐると遺跡展示をめぐりゆきつつ

休みなき活動として蟻の這ひ暮れてゆく日と姿消したり

地を灼く日差しの庭にふりそそぎ蟻はひたすら動きてゐたり

いにしえは賊の棲家の峠にて車窓に紅葉眺め過ぎたり

水かめの水を覗きて我を見る我の眼と向ひ合ひてをり

水草の朽ちて沈める底黒く冬池の水澄みとほりたり

目の合ひし雀飛び立ち残されて枯れたる原の広きがありぬ

行届く世話に育ちし大根の白つやややかに洗はれ並ぶ

テレビには若き女が騒ぎをり亡き母に斯る日のありたりや

搔き上げて僅に残る髪の毛の多く見ゆるを写し出でゆく

引き捨てしカンナの株の根付きゐて命もちゐる領域拡ぐ

手袋が水の流れに沈みゐてものを掴まんゆらめきをもつ

生え継ぎて永き時間を展ぐると切られし胚は白く小さし

新たなる命を生まん白き胚胚に潜める胚限りなし

生まれたる時より見たる前山を退院したる瞳に眺む

もがれざるままに柿熟れ先祖らの植えし心もたりてきたりぬ

鑑真の歌作らんと書いて消し大きな心至り難しも

風に乗る羽を広げしおのずから鳶は大きな空に遊べり

己が弾く音に振りゆく首となりオーケストラはテンポを早む

水冷えて魚等しずめる冬の池澄みたる青の深さに湛ふ

湯毛の立つ煮へし大根やはらかく息を吹きつつ舌に載せゆく

吹く風にはしれる紙を追ひかけて躍れる肢を犬の愛せり

大根の熱く煮へしを食べをりし人等次第に饒舌となる

大方は断りを言ふ人にしてベル鳴る音に立上りたり

病むは医者死ぬれば坊主後えんま委してわれは読むと定むる

死にたるが樂屋に入りて煙草吸ひ次に死ぬるが舞台に立ちぬ

美しく歩く練習などをして女は高き笑ひもちたり

誤ちてゐたかも知れぬ墓の前ひたすら己れに生きんとせしは

枯れ草の間に紅き葉のありて斜となりし光りが透かす

死にしもの病みたる者を数へ合ひ久方ぶりの出合ひ終りぬ

霜に萎へ地にはりつける葉となりて草は緑を保ちてをりぬ

くら闇の中に太れる憎しみの体を溢れ寝返りを打つ

芽生へたる双葉に水をそそぎをり赤き大輪信じられゐて

艶失せし手に支へゐる夜のあご思ひの痩せて追憶多し

吹く風枯葉散り落ち年老ひて言葉失せたるわが目の追ひぬ

電柱の一すじ並び枯れし草低くそよげる冬原となる

照したるライトの過ぎて夜の道の更なる深き闇を歩みぬ

生きし日の生活地下に作られて遺跡は上なるおごりを伝ふ

死して尚万の人をば酷使せし遺跡で塚は高く盛らるる

万の人苦しめ一人の王ありき埋めて高く土を盛らるる

人が人打ちて作りし塚高く王と呼ばるる人を埋むる

雲の間を流れて光り差し来り杉の秀光は天に鋭し

赤き花赤きに咲けり一年をいとなむ命しんともえ立つ

大きなロマンも埋め土高き墳墓の主はここに眠りぬ

ここに沼ありて魚等も埋められし記憶うすれて舗道の広し

夜を待ち出でて来りしごきぶりの営みながき果にてあらん

移りつつ回りゐし独楽は一点の軸心となり回り澄みゆく

杖を突きよろよとして歩みをり退屈とふより逃れんがため

湾曲の細さに月の光り冴え冷えたる冬の空裂き渡る

二千年一月八日まつさらの八十一翁胸張り歩む

赤き服着たる女が草枯れし冬の野原を歩みゆきたり

葉の散りて軒の露はに家並び冬は田に出る人影を見ず

ましぐらに猫は樹上に登りゆき喉もどかしく犬吠へ立てぬ

排水の大きな口の露はにて冬の野原は痩せてきたりぬ

白鷺は水に映りて立ちゐたり草なき冬の池のしずけさ

いつまでも生きよと友と言ひ交しはかなき思ひ沸きてきたりぬ

死にしもの互に数へいつまでも生きよと言ひて友と別れぬ

狂ひたる女の舞が見せつけし命よ終りて帰る夜の道

夕茜うつろひ早く暮れてゆきひたいひとと寄る草蔭の闇

草枯れてユー型溝の白く照り冬の野原を分ちゆきたり

朝早き葉末に結ぶ露無数集ふは円を原型とする

征服をせしは英雄されたるは鬼と歴史は記し伝へる

同化作用持たぬ葉群となり来り散りてゆくべき冷ゆる風吹く

おのずから葉の散り落ちる林あり身に受けるべく歩みを向けぬ
降りかかる散り葉の中に立止まり頭と肩を打たせていたり

かすかなる風に散りゐる葉のありて至り難しもおのずからなる
埴土に對き山を削れるブルドーザ人生きてゆく黄の意志は顕つ
ゆれいつつ我を運べる車窓にて老ひては移れるものを怖るる
たちまちに青き起伏の輝きて甘藍畑に日の差し来る

与へらる死の有りようを問ひゆけばみずうみは夜の眼を開く
曇天に田は一さまの平にてもやひし山に車窓近づく

鎌を商ふ　五首

髪の毛の白くなりたるいきさつも鎌の鋼に写し来りし

耕耘機出で来て牛馬を飼育せず鎌の売行きその時に減る

手作業の苦痛否まれ休日のは機械の唸りの高し

耕耘機草刈機にて減りし鎌は稲刈機にて駄目押しされる

これが底これが底ぞと言ひみつ職人居れば鎌売りに出る

無人駅となりたる峽のプラットにて老夫掃きおり乗る人のなく

流れに沿ひ飛びゐる白き鷺のあり暫く我の車窓と並ぶ

崖の下走る列車となり来り尾花は空の青きにゆるる

紫式部一つ一つの紫の並ぶ実充ちて光り返せり

亡き母を思ひおりゐて声の出で何事なるかと妻の間ひたり

峯に峯重ねる木曾の山見えて百草丸の看板掲ぐ

杉山の小暗き中に川の水岩にたぎてる白き泡見ゆ

木の幹の小暗き蔭に飛び来り蝶々は翅を閉し切りたり

無人駅に列車を待つは一人にてこまかき花を蜂のめぐれり

冬の田に鳥追ふテープの残りゐてそのみ赤く光るさびしさ

輝ける山のみどりも暫しにて冬空は雲の往来のしげし

夕映えが鳥追テープに亘り来ていきいき冬を赤く光らす

落ち来るわくら葉一つ手にとりぬ成れる精しき葉脈のあり

草低く枯るる冬田に残されて案山子は大手ひろげ立ちたり

乳張りし女の裸の人形が藁帽被りて川田に残る

揉まれたる風のままなる向き向きに尾花は秋の光り返せり

間伐の終りし林一斉に日の透くみどりの葉群さゆらぐ

山の襞深き翳なす雄々しさに伊吹山系峯を連ねる

空に向くサルビヤの紅咲き盛り秋の真昼の光り澄みたり

ばらの花は冬も咲くらし山深き無人の駅に挿せる人あり

かすかなる風の吹き来て花群はもたれ合ひつつ寄りつつさわぐ

古き地図宿屋にありて草鞋はく人の歩みし道細きかな

灯を受けて宿の机に向ひゐる我あり明日は祈りなるべく

道元の本を読みつつ目を閉じぬ解くを得ざりしものの導く

白髪を灯に曝しゐるのみに夜々の過ぎ行く残るいのちか

ダイヤルを廻して離るわが家に起れることの何かあらんか
クレームのありたる店の近くなり嘘の言葉もいくつか整ふ
田の中に忘れられたる道しるべこの古地図に岐れるところ
山峽を乗り来りしは一人にて時間調整バスの行ふ

門前に土産物店並びゐて一人の我に呼ぶ声すくなし

石階に生えゐる苔の新しく近頃詣でる人の少なし

雲しのぐ杉の木並びしめ縄を張り目ぐらすは神降り来ます
祈りなす人の少なき拝殿は蛇のぬけ皮しろしろと伸ぶ

うぶすなの神を祀りしこの宮居今は祈りて産む物のなく

落葉敷き荒ぶる宮居滅ぶるは時経しものの必然にして

芋の葉の黒くちぢみて枯れておりこの山中は早霜の降る

空高く風吹きみると行く雲は飛びゐる先を裂き継ぎ止まず

冬の風梢を鳴らし一本のもみの木高く原に立ちたり

穂の高さ揃ひてゆるる尾花原そのほほけたるふくらみ愛す

半ば程霜に枯れたる芋の葉の黒くなりゐて夕べしずもる

すぎ越しの日日の思ひもすきとうり秋の林の下蔭のあり

大方の下葉は枯れて葛原くずの残る青葉に秋日照りおり

群なして蜻蛉飛べるは妻問ひかこの里雪の降る日の近し

ガードレール塗りかへられて白新し澄める光りは歩みの高く

はすかひに我を見上げし幼な児はにつこり笑ひ走り去りたり
考古館と書きし看板掲げあり他所のいにしえ見るにものうく
全山をゆりゐるみどりの葉群髪国津産土神ぞ立ちたり

わが髪に似たる思ひのさびしくて枯れし疎^{まば}らの草に日の照る

轟きて雷が挙げゐる関^{とぎ}の声千の剣を杉の秀構ふ

細き雨に額濡れつつ歩みゆく冷えて生れ来る心あるべく

討死せんもののふの心曇りなし木の根机に暫しまどろむ

空覆ふ杉の巨木の並び立ち社は霊の棲ふ小暗き

鳥海のめぐり幾年商ひて我のつづれるいただき高し

甘すぎる菓子出されゐるお茶の承け峽の宿屋に我は泊まりぬ

ひと度を押しして瓶より湯が出しもすがしく宿に茶を呑みており

寄せる波返せる波のひたひたと打つ音たちて岸の夕暮

結ぶ実を木よりもぎたる手の罪の報酬幾ばく金をかどふる

とこしえに保つ形のまざまざと造花のそげく埃積みたり

傲慢する隣室の声の聞えつつ畳目すぐきしずけさにおり

くくみ啼く帰りし鳩の声聞え見えゐし山は闇に沈みぬ

返品とふ事実の前に致し方なし釈明なさん刃先折りつつ

肩を並ぶ美女は呼びたるモデルにて友はアルバム其処より開く

天人といふを描けり地の上に生くるは余りに苦しくありし

摂食と排便といふこの原始了えて宿屋の玄関出ずる

出張の予算一応書き上げぬこれより少なくなさん思ひに

ロックする扉に押れて閉したる障子の宿に敏く坐しおり

青き帽子被りし女乗り来り工場の壁長くつづけり

ビニールに箒とちりとり包みゐる老女は駅を一つに降りぬ

うつうつと曇れる下に灰色の屋根と壁とが連なり建ちぬ

血を出してちんばひきひき来し犬の瞳は神の前に立つかな

灰色にこめて動かぬ雲の下影なきことも一人なりゐて

土に降り消えゆきし雪積る雪先後の違ひ我は見ており

笑ふとは盗ることなりし両の手にりんご持ち来て高く笑へり

刻まれし文字を風化に読み難く無縁佛は寄せて積まるる

捨てられぬのみに寄せいて積まれいて無縁佛は見る人のなし

角棒をかざせし学生運動とは何にありしか語るひとなし

黄にやけて学生運動を載せてゐる新聞ありぬ忘れいたりし

戦争の力の余燼^{じん}と学生運動のありしを我は位置づけておく

安保闘争の誰も何時しか姿消し新聞時に赤軍を報ず

エンヂンの音の止みたる夜更けて枕の下に水流れおり

草枯れて小石の白き河原を流るる水も細くなりたり

降り初めし雨に濡れたる舗装路は曇れる空を白く映しぬ

おもおもと雪のこめたる並木道秋となる葉はなべて垂れたり

雨露を溜めたる花のくれなひの園一せいに光りをなす

細き雨降りゐる朝廷さきに濡れて明るき若葉のありぬ

散る前をくれなひ染めるうるしあり老斑浮く手に瞳を移す

このところ両雄干戈かんかを交えしと焼き捨てられし民家は書かず

この坂路信玄越ゆと兵糧ひょうろうを担ぎし奴もありたりしかな

コスモスの折れて他に咲く花も見えたけゆく秋の光り澄みたり

茶をすすりこはばる顔をやはらげて話し合ふべき言葉を出しぬ

ふふみたる光りのままに白き雲崩れず浅間の峯を越えたり

秋たける信濃の街に雨の冷え襟を合せて宿を問ひおり

とびとびの庭石濡らす細き雨先ずは炬燵のスイッチを聞きぬ

自慢話なし合ひおりし隣室の人等は闇に出でて行きたり

今の意味問ひゐる声す月明に黒くしずもる森の中より

馬車馬は視野を囲ひて走るとど我が一筋のおのずからにて
時折りに我を見てゐる目と思ふ新聞広げたるままに坐す

車中にて書きとめざりし短歌あり思ひ出せぬは光芒をもつ

飢えに開く黒人の子の目の写り窓おもむろに闇が閉しぬ

あはれあはれ足と胃腑との弱まりて口すこやかに生きゐるあはれ

葉のなべて上に向きゐる凜々と宿の一人に菊活けありぬ

ふくらみし白き尾花の野に満ちぬ一つ一つが抱く陽のあり

目がさめて障子に差せる明るさに一夜積みたる雪のありたり

扉同じき上に室番貼られゐるホテルといふはまだなじまず

家郷より離るる街も人居れば老ひたる首を直ぐく伸ばしぬ

花の名を室名として異なれる様にかまへし宿の親しく

便所にて作りし歌は手を洗ふひまに忘れて旅をつづくる

目が覚めて宿のカーテン先ず開く今日は傘なく歩めるらしき

宿を出て光り隈なき今日の晴れ地の果てなる空を見やりつ

この吊橋を渡り商ふ二十年揺れに応ふる足弱まりぬ

黒き衣に背を伸したる人並び類型の死のここにもありぬ

我と行く白き雲ある原の道幼き時に暫しかへりつ

高原の冷えたる風に草薄く隈なき黄葉のそよぎゆきたり

高原の草の黄葉の隈なくて澄める光りの透かしていたり

げに病めるもののうすさや高原の草の黄葉は隈なく透きて

飛び交す蜻蛉の群は移りゆく山のみどりに翅のひかりつ

移りゆく蜻蛉の群を見送りて晴れたる空に瞳の深し

サルビヤの花は袋の形なす無人の駅に赤く散りたり

高原の空の青きを見る瞳真上に向けぬ首痛き迄

力もつものの迫らぬゆるゆると機械のシヨベル土に近づく

計算をされし速度と思ふ時ゆるゆる機械のシヨベルは止る

走りゐる列車に尾花ゆれており陽光返すをたのしむ如く

巨きなる石の川原となりて来ぬ汽車は登板の音高くして

菜の垂れてとうもろこしの葉の枯るる高原すでに霜ありしかな

大きな輝く駅として建ちぬ高原に若き等出入りの多し
高原の輝く屋根を見上げては載り断つ空の青さがありぬ
新しく建ちたる屋根と分ちゐて空の青さの限りもあらず
高原を拓きし苦節を我が知れば今一面のレタスの青し
肩に触るる空の青さと思ほふに鳥飛びゆきし深さは知らず
トンネルを抜けて沫の岩に立つ川の流れとなりておりたり
栗落雁折りたる固き手の応へ宿屋の室に亦折りており
車掌が降り切符受け取り乗りゆきぬこの駅前店一つあり
大根の霜に凍てたる葉の青く冬を生きゐる光りを返す
かぎり来て亦陽が当る車窓にて列車は山を縫ひつつ登る

抱かれてバングラデシユの児の写る大きな目は飯を食はざり

あばら家に人住みおりし高原の瓦を葺ける屋根が並べり

植木鉢の底の穴より根の出ずを引き抜き元の棚に並べぬ

靖国の参拝否む記事のあり我は戦に死なざりしかな

順を待つ出張員の靴二足脱ぎあり鞆を置きて出でゆく

びつしりと詰めしカタログを出しており次の列車に乗るを諦む

積まれたるりんごのほひ漂ふをあましと嗅ぎて店頭すぎぬ

茸採る人出でて来ぬ幹白き白樺の木も混る林を

後五分汽車が来りて乗り入るを疑はざるを人と言ひけり

散る前を真紅に染めしつたの葉は秋の光りを浴びて輝く

此処にのみ棲む蝶ありと掲げゐて幹に苔むす木立の暗し

承け継ぎし父祖のなりはひ七十の吾は信濃の雪を踏みゆく
よるよるを宿屋の窓の闇に向く永なる使者の言葉受くべく

とは

灯を点けて窓に満ちたる闇のありとうき祖先の声を棲まはす

ひしめける誰もがもて死のありと瓶は造花の菊を挿すかな

によきによきと雨に出でゐる茸あり落葉の下の暗き土より

土の中暗きに種子を埋めゆく大きな花やがて見るべく

暗黒に一夜埋もれいたるかな窓さえざえと明け初め来る

一日の葬りとなして床につく明けて羽搏つ不死鳥の為

満員と断られたる宿二軒残る一軒尋ぬと歩む

ボード板にびっしり鍵のかけられて人は互いに拒みて生くる
千の鍵並べ売られて距て合ふ生き態人は互にもちぬ

あきらかに草の紅葉をなしゆくを光り亘るはしばし歩まん

枯草をあためている光りあり木の切株に腰を下しぬ

親と子と夫と妻とも距ていて鍵は冷えたる光りに並ぶ

盛り上り苔のむしたる根の太く宮居は一樹の蔭にありたり

年に一度祭の時に旗立つと宮居は落葉踏む人を見ず

木のそびゆ天辺に鳥止まりおり高き処は遠くが見ゆる

足低き歩みは躓き易くして老ひし背中を伸ばしつつ行く

買物の衣料見せ合ふ老婆達うんと良いんだの声を交ふる

飢えたるはけものまなことなりおりし鎌を武器とす百姓一揆は

草を刈る鎌が兵器となりたりし雨の夜を行く百姓一揆は

あて途なき争ひに行く一揆の群握りしめたる鎌の悲しさ

走りゆく車にゆれて萩の原赤く小さきはなびらこぼす

寒風を避けいる前を氷菓食み高校生の声々高し

煽りたつ埃にトラック過ぎてゆき顔をそむけば我の小さし

取引をもつを得ざりし店なれど客の多きはそこはかたのし

旧道は黝^{くろ}ずむ家の並びおり幟^{のぼり}の競ふバイパス過ぎて

夕暮るる池の畔に歩み寄り残る光を吾は集めぬ

わが顔を覚へておりし主人にて葡萄酒を卓に黙って置きぬ

吾一人なればと思う密々と世間といふは組まれてありぬ

輝きて灯り点もりし夜の街輝くものは利につながりて

離るれば水の流るるトイレあり手といふものが要らなくなるか

花の字は草が化けると書きたれば女妖しく歩み来りぬ

面着るが真の我と言ひきりぬ能の舞台を勤め来りて

一面のりんご畑は葉の落ちて寄すしき枝は年の経りたり

電線の黒く果てなく続けるを見ており夕べ疲れたる目に

アスハルト灼けたる道を歩み来て商人吾はほほえみも売る

乗り込みし列車の窓は昏れ初めぬ暫く瞼閉しておらん

出でゆくは即ち粧はふ鏡の中ひたすら見入る女のまなこは

赤きところいよいよ赤く青きところいよいよ青く塗りて笑へり

口紅を鏡に引けば雄食みし虫の原始の詩^{うた}ひびかひぬ

魂を鏡に置けば化粧なる女のありど杳かなるかな

みずからの顔の範圍をいつ迄も出でぬ眼に鏡に向ふ

その昔水に写して顔を見し山の乙女は化粧なせしや

丹念に化粧をしたる女にいていそいそとして外に出でゆく

僧堂に女を拒む男ゐていと高きものをひた求めしと

女よ汝と何の関りあらん血をしたたらせキリスト逝けり

髪の毛が蛇となり来て争ひし女の話はとうく過ぎしや

今少しと片手に拝む演技してしばらくたちて金を受取る

寝返りをなす事も出来ず二十年病むあはれさも人なるが故

濁りたる水に泥鰌の浮き沈み峡の食堂他に客なし

さは蟹はうすくれなひの足をもち砂敷く瓶の隅に小さし

音楽の鳴る喫茶店逡巡の我の傍を少女入りゆく

齒の痛み昼はうどんと決めいしが美女多くして洋食たのむ

葉の散りて細き梢の並び立ち光りをふふむ雲移りゆく

隣室は宴の声の入り乱れお茶のみどりを吾は摘みゆく

やすやすと歓声あげて戦ひぬ今やすやすと戦を否む

寝返りに過ぎたる宿の夜の明けて血筋浮く目を鏡に写す

宿賃をはかりつつ行く夜の街灯りつつましき一軒ありぬ

降り来る雁の声あり青空を吾も渡れる旅人として

みずからの体温蓄めて旅の宿一人の眠りに就きゆかんとす

乗り入れし列車空きゐて抱抱く手の老斑に瞳を置きぬ

二人ゐて見るものなべて明るくて真黒に近きチューリップ咲く

吾が歩み常より今朝の軽くして知らざる犬が横に並びぬ

わが魂すこやかなれば東京の犇ひしめく人の群にたじろぐ

さんさんと地に降りゐる日の光り走れる孫を手をひらき追ふ

見出しが紙面半分とりており清原場外ホーム放つ

次々と接続ありし電車にて目を閉ぢ尿意とたたかひており

弁当屋に人の集ひてゐるが見ゆ即ち我の腹の空きたり

ひさぎゐる菓子をガラスに囲ふ上城主がもちし石高掲ぐ

己が顔くさして金得る漫才師一人の顔に家路を急ぐ

きつねうどん頼みて隅の席につく短歌一首出来たるが故

パンツよりしずきて走る男ゐて汗なき吾のひたひの熱し

亦報ず幼女誘拐人間の半ばは陰を負ひて生きゐる

戦ひもとうき日となり否まるる言葉をのみに語り継がるる

書店より楠木正成などの本見えずなりしを疑はれゐず

否まるる戦なりとも若き日を燃えたたしめし血潮にありき

戦ひし日を生きたりと眉上げて我は言はなむ若き碑として

手の熱く銃とりたりき否まるる戦なりとも血の真実は

否まるる戦なりとも戦友の流して死せし血潮尊し

光り見る眼窩がんかの底ひはるかにて大観の富士北斎の富士

こわれたる義齒をはめいて傷つきし齒ぐきをいつとなどる舌あり

閉せしと思ひし窓が開きいて他人ひと目なき時他人ひと目を怖る

自動車の起せる風も朝冷えて左肩よりおのずとすくむ

病気ではなきかと噂していしと宿めし炬燵の席を席を開け呉る

やや濡れし服を吊せし宿の窓明日は日の照る茜の兆す

この所堂のありしとやや高く車二台が駐められありぬ

言はざるに二本の酒が膳にあり宿れる常の慣はしとして

宮中の儀式に伝ふ十三夜風寒ければテレビにて見る

頬かくす帽子被ぎし人の立ちプラットホームは長く伸びたり

まばらなる人家が見えて東北のプラットホームは長く伸びたり

痛む歯にうどんを食ひて三日経ち菓子売る店も眺めて過ぎぬ

ながくなかく板古る峽の湯宿なりき壁輝きて一棟建ちぬ

信号に止まりし隣の車より犬が顔出し瞳合せぬ

時計見つプラットにうどんを食ひおりぬぎりぎりに生きる事の楽しさ

発車ベル高く響きて走り乗る立ち喰うどん少し残して

くり返し口紅あかくぬりおりし女笑まひて鏡しまひぬ

飲みおへし酒のカップに今一度口当てあふぎて老人立ちぬ

並び走る車は玩具の如くにて我は己れに他者として坐す

若物と同じ心を思へどもテイシユパーパー分ちて使ふ

みの虫の殻に紅のなき事のすがしく山を下り来りぬ

戦の日の償ひも少しあり中華甘栗買ひて皮むく

指定席はたった五百円と妻のいふ五百円惜しみ商ひ来りし

予定せし時間どうりに商ひのすみて列車のゆれるに任す

前輪の土にめり込み捨てらるる用なきものに銕こうかり假借なし

穫入れのおはれば獅子の面被ぎ笛を鳴らして神楽来りし

コーヒーの中に入れたる練乳は湧きて浮びて揆はけ拡はぐる

何の室も人が寝いて幼児の真夜に泣き立つ家愛すべし

指示されて頬を寄せ来る幼児の温し廻せる手の小ささよ

子を背負ひ鎌の行商なしいたりき子に囲まれて孫を抱きぬ
どうしてもここに泊れと言へるらし早き方言大方解らず

きのこ汁刺身てんぷらなど並べ我に食はさん為に買ひしと
月末に金がなくなるを疑はず生きて夕餉の話あかるし
紅葉の燃え立つさまを写しゐし画面は車の渋滞となる

透明のガラス戸一つ距ていて肩をすくめし人等の急ぐ
肩すくめ霧に消えたる人ありて尾花はうすき墨色に立つ

霧こむる朝の窓にうすずみのあはあはとして人等すぎゆく

四、五本の並木の見えて霧覆ひ人等突如に現れ歩む

やまいも

山薯が池に鰻となりたりき古人没して見しものあらず

巾広きカラー舗装の道となりござにひさぎし老婆の見えず

山囲む湯沢の街に降り立ちぬむしろにきのこ売るを見るべく

土つきしままに茸の並べられ筵むしろに坐り老婆のひさぐ

悠なるかな薯いもが鰻となりしこと山池の水青く澄みたり

束の間に過ぎし月日と思ふときうるし紅葉は鮮かに立つ

花をつけしままに枯れしが挿されいて無人の駅の雨紋に汚る

ぬば玉の夜の底ひに目を閉ぢて果なく沈む体のありぬ

底ひなく脚より沈みゆくが如一日歩みし旅の臥床に

春と秋の商ふ旅にそびえたる鳥海山も竟きょうかと見放く

いつの間に日かげさえぎる雲の出て体に沁みる風を伴なふ

おのずから地に踵の落ちてゆき一つの言葉の背後を疎む
新しき飲食店の亦出来て幟幾本競ひはためく

飲食の人呼ぶスピーカー公園に今年の菊の展示はじまる
金の札銀の札など吊されぬ菊は日を浴び咲きゐるのみを
幾人の交せる言葉かしましく入賞の札はけられてゆく

コーヒーに入れしミルクが揆ける吾がなさざりし歓声として
松の樹皮削られゐるは戦にやにを採りたる跡にて古りぬ

夕刊に株式欄のなきこともみちのく秋田の人の貧しき

投げ出して疲れし足を休みしが暫くにして行かねばならぬ

道端に黄菊白菊供えらる盛られてゐるは悲しみ深し

隣家より南京食へと持ちおりぬ貧しきものは乏しく足れり

己が家見えし時より老婆立ちバスは峽路の坂を下れり

痛みもつ齒莖を舌に触りゐて病めば望の身に関りぬ

癒えむことのみを思へる晝^{ひる}つ方思ひ返せるさびしさにおり

口開けて寝ねいしならん不態さや目覺めて舌の乾ききりおり

噛む事の斯く豊かにて十日まり痛みし齒莖の傷のなほりぬ

砂利を踏む音かへり来る夜の道吾を指したる星光ありぬ

雨雲の裂けて走るも目になれて冬の越路の出張おはる

襟立てて風を防ぎし十日まり出張おへし歩みをはやむ

教ふると従き来くれたる少年の指を差したるところに別る

歌人の名言ひて歌書く傍に來ぬ頼むしばらく黙っていてくれ

遠天の雲黒きてつるはしを上げて急がぬ工夫が見ゆる

雨雲の裂けて千切れて走りゆき岩打つ波は沫と立ちぬ

両脇を巡査が抱へ行く男かくさねばならぬ顔をもちたり

サルビヤの千の花穂はくれなひの高き揃ひて昼を咲きたり

舞台の面脱ぎある見れば我ももつ人前の姿一人の姿

わが鳥を光れる空へ発たしめぬ着きしは黒き杉の森にて

昼となれば飯食ふのみに過ぎゆきて列車にながく孤り乗りおり

東北と近畿の顔の類型のやや異なると見つつ旅行く

空黒く交叉をなせる電線に流るる力は人の生きたり

夕空に黒く電線頭ち来り灯りを点もれる家々の見ゆ

降り止みし道しろしと闇迫る夕べの光をあつめて伸びぬ

昏れてゆく野に一すじの川見えて血よりも赤く夕雲映す

歩みきし足なげ出して旅ながき疲れにめぐる血潮のくらし

咲くよりも散りゐる花の多くして赤眞寂しきサルビヤとなる

複眼の如く灯りの点き来り人を呑みゆく夕街となる

戦に死なざりしかば走りゐる列車の窓に頬杖つきおり

捨ててゐしものをもちゐる友達に返せと幼は泣き声あぐる

ほうり込みし空缶の音大きくて夕べの駅に一人待ちおり

若き等の肩抱き合ひて歩めるをおのずと避ける瞳もちたり

地深く伸ばしゐる根よ靴音の還り来れる歩みもつ下

ストーブを切りてたちまち冷え来る夜の底ひにしはぶきひびく

庭先の松の緑も今朝出合ふ老ひては静かな呼吸となりいて

野焼して草のまとはぬ池堤広き面を水のもちたり

野を焼ける煙いくすじ立昇りおだしき冬の光り亘りぬ

野焼せし堤の僅に灰残るかくて昨日は過ぎてゆきたり

炎あげ燃えたる跡の平にて堤に灰のわずかに吹かる

ひよが二匹降り来てあたりを見ていしがわがもの顔に歩み初めぬ

一ヶ月手形の期日伸ばせしを黙し出せるを黙し受取る

ものの影あきらかに落す裏庭の今日は背中を屈めぬぬくさ

乾きたるタオルの風に動くさま見るともあらぬ縁のぬくとし
縁側にかくるは今日も孤りにてすきとうりたる冬蔭見ゆる
誰にしもあらざる吾と坐しみつゝ憐られし声ほめらるる声
千の根のからまりあえる地の中のありて冬原平らに展く
後頭にてのひら当てて考へある吾あり不意に戯画となりいて
しぎ二匹庭に來りて啄むをおさへておりし咳の出でたり
この朝目覚めざりせば我のなし水仙の白き花を眺むる
点りたる工事現場の赤ランプ停車をなすは死に結ぶ故
停車する工事現場の赤ランプ死に関するは人等の敏し
おらび合ふ工事する声今朝のなく黒新らしき電線架かる

こつこつとかすかな音の立ちゐるは我が心臓の図られてゐる

心電図は如何なるさまを示しめん我が身体を我の知らざる

心臓の動きあらはとなりし図の我が読み得ぬを医師に渡しぬ

心臓を図る音のみ室にありしずかな呼吸をなさむとつとむ

裏庭に萌し初めたる芍薬しゃくやくの一年ぶりの赤き芽と会ふ

正常です医師に言はれて我の知るこのあやふさに門を出でたり

冷やかに棺の行くを見送りき死に関りのなきが如くに

山野辺の道紀行 九首

晴天になりたる事も孝行の故と高らに笑ひさざめく

花見など早くも次の行樂を語り合ひつつ車は走る

春の陽に歩む三三五五の群古代の道は細かりしかな

背景の未だ萌さぬ黒き森景行陵固く柵を閉せり

山脈の重なり合へる忍坂に神武邀^{むか}へし人等のありき

苔をむす樹の根にひきのうずくまり古代の径の跡は続きぬ

はるかなる大宮人の踏みし径昼餉の酒はコップに仰ぐ

信樂の陶の狸に似ると言ふこれより少しスマートでないか

編笠を被れば陶の狸と少し感心なして聞きおり

目を閉ぢて己れを知らざる己れあり今亦一人の訃報がとどく

光紋が壁に映せる裏の庭このしずけさも動きて止まず

青深く澄みて見えざる山池の底ひと老ひし息を沈ます

そよ風の送れるままに水光る山の小さき池に出でたり

手の玉と書かれし神札祀られて睦月の池の水はしずまる

提げてゐるランプのひかりに現はれて虫は眞直にとびて来りぬ

灯を映し動かぬ虫の目を見れば棲みゐし闇の深かりしかな

手を温む光りの原に満ち亘り彼抛我が家の梅の花咲く

ぴつたりと足に馴れたる古き靴歩こう会の空晴れ渡る

平らかな水に家並の鮮に写りて春陽原に亘れり

むき出しに削りとられし埴土見えて山の残りは若葉芽吹き

春の陽に吾も生れしと思ふ迄芽吹きたる葉の光りを透かす

集ひたる人等に今日の晴れ渡り赤き白きの服を顕たしむ

産土の恨の魂は虫に枯る太しき松の幹のみ立てり

太き枝幹の残りて松の枯れ芽吹かぬものは光り返さず

草未だ枯れゐる原に牧草の新たな緑が風になびけり

乳牛の並びて梓より覗かせるうす桃色の鼻と出会へり

うす暗き牧舎に乳牛並びゐて一つ一つと目を交したり

芽吹きゆく山に虫喰ふ松ありて枯れゆくものに眼は至る

点々と家が建ちゐて野の展け菜の花が見ゆ櫻咲く見ゆ

重なれる山をまたぎて舗道つき此処も分譲の看板掲ぐ

山槌つちに人家が見えて木の間より水の流るる音の聞ゆる

飛び立ちし蜂が落せる紅の蘇芳に庭の時移りゆく

竹群の直ぐく伸びゐる青き幹あきらかに見えて山の音無し

よごれなき毛をもつ猫が横に来て縁側に坐す吾と並びぬ

訪れし我に眼を光らせて己が領域猫ももつらし

すずらの今朝もひと日の青さ増す若き葉群の露を置きたり

玉きはる今朝のいのちぞ熱き粥口とがらして吹き冷ましおり

継ぎて来しうす桃色の鼻の先乳牛は草食む顔を上げたり

書斎より出で来て音なき裏庭の縁に腰掛け眺むともなし

午後の影濃く落せる裏庭のつつじの朱はきはまりにけり

一夜経て開き切りたるてっせんの青き花ある庭とはなりぬ

コーヒーに落せし練乳歓声の如く揆くを見定めており

晝風の庭に蘇芳の紅^{あけ}こぼし蜂あきらかに光りて飛びぬ

水を打つ庭暮れてゆき朝顔のつぼみはぐくむ闇が覆ひぬ

出でてゆく戸を引き寄せる音聞えひと日一人の静けさとなる

葉の厚く光り透さぬ社の葉の古りたるものを見さけつ過ぎぬ

庭の木に鳴きつぐ^{もす}鴟の固き声も今は一人の留守居にて聞く

水底に動く眞砂のあきらかに寄せ来る波は足下に伸ぶ

ほのほがほのほを煽り燃ゆる火の一とき過ぎてしずまり初めぬ

燃え上る炎は風を呼び込みて逆巻きあふりて炎昇れり

関りのあらぬ瞳は動くなし病室に入る我を見てゐる

飯二杯と小児の如く答えおり医師の前なる我の素直に

サルビヤの緋のきはまりに澄みとうりひと年逝かむ庭の冷たり

設けたる足場の未だ架かりゐて新たなビルは空を区切れり

赤き土未だ新しく道のつき松の林をつらぬき消ゆる

積み上げし工事残土の影粗く安全章旗風にはためく

降り出して散歩さす事出来ざれば罪もつ如く犬と向き合ふ

柳生の里

杉の根の露はに階をなせる径登りし処に石佛彫らる

足止めて水引草と言へる声赤く小さき花を並べる

聞き及ぶ峠の茶屋は屋根古りて床机二つを店前に置く

狩野派らし描ける襖ふすま覗かせて終りたる年に柱瘦せたり

編笠を被り太刀横へし武士の思ひに床机に掛けぬ

草餅を並べしままに人見えぬ峠の茶屋は風渡りゐて

おとなへる声幾度に出でて来し女あるじは手を拭ひつつ

その昔武士も食ひたる草餅の味はひ互にたたえ合ひつつ

伊賀甲賀柳生武を練る人の住み伝へ来りし史のかなしき

明らかに底ひに白き砂ゆるる柳生の川は声挙げて見る

万珠沙華陽を浴び咲きて水清き堤は昼の弁当開く

戦にそのままとりでとなる構え家老屋敷は山を背にして

陳列をされし伊万里の皿の彩乏しく家老は暮とほしていたり

大名となりし子孫の蔭に見え石舟斎の墓の小さし

案外に細き体をなしゐしと鎧の前を女等過ぎぬ

黄疸を病む友を見舞ふ 五首

しばらくは目を疑ひて君ありき黄に染まりたる体横たふ

すさまじき黄色の皮膚に臥しており鼻やかん骨確か君にて

腕ほそく腹の上部のふくらむは肝臓の病み進めると見つ

語尾ほそくしばらく吞めぬとほほえみぬ黄疸病みし君のやせたり

黄に濁る眼ようやく向けており豪傑笑ひはまなうらにして

枯れて伏す株の間より土もたげ新芽は確かな青さに出ずる

道に影ひかざる事も旅なればさびしき瞳となりておりたり

風塵を捲ける車の過ぎて去り再びもとの歩ゆとなりぬ

葉の間にしべの枯れいて櫻立つ風に老ひたる瞳研がれつ

一人の嘆きといふは如何程のものかと肩並む雑踏の中

原中に一人の男見えおりて鋏急がぬは年の経りたり

尖りたる鉄柵囲ふ家見えて廃れし家を見るよりさびし

離りゐる小野の柳も芽ぐめると伝へて耳吹く風やはらかし

売店の女も本を読み初め単線の駅停車のながし

はりつきしさまに曇れる空の下葡萄一粒舌につぶせり

赤き杭区画をなして打たれいる如何なる工事初まらんとして

流れたる血量思へ戦史には死者三千と半行記す

注文のあらずといはれて出で来しが頭を直ぐく保ちて歩む

きびきびと田植なせるを見ておれば減反拒む思ひも知りぬ

落苗を植えゐし老女顔を上げ腰を伸ばして胸を反らしぬ

足音に蛙つぎつぎ水に消え池の堤の陽炎ゆるる

伸ばしたる腰をたたける二つ三つ老女は再び落苗植える

並行して走る車の幼な児は手を振りており目の合えば吾に

伸びて来し茎にバラの葉五つ六つ幼なき刺は指にふれみる

血圧の薬をしまふ宿の室一人を照す灯りありたり

差し交す若葉に光り透きとうりかすかな緑道にありたり

さわに花咲かせし街路この国の平和を我は歩みゆきおり

八重櫻咲ききはまりて散りゆけり今の平和のあやふさはある

てっせんの蔓先ふるひ朝風の庭に生れ初む風のあるらし

寸ばかり揃ひ萌せるあさみどり杉草未だ雑草ならず

ながながと工場の壁のつづく道いつより頭垂れておりたり
報ひらる日のあらむかと思ひしが今を生きゐる鞆を掉^さげる

血圧の薬とり出す宿の灯に我あり開くる口腔くらし

隣室のおらぶ宴の聞えいて一人と言へるすがしさに寝る

何ものも過ぎ去りゆけば耿々^{こうこう}と夜汽車の窓に我の目のあり

宿帳の兵庫県を探せるに松尾鹿次の名前に出合ふ

宿帳を再び見つつ松尾鹿次数日前に此处を過ぎにし

注ぎ交す酒にいつしか花を見ず光りつつ席に落つるいくひら

枯れ初めて黄に移りゆく秋草の降りゐる雨に濡れて明るし

注文の今年も減りし店を出ず廃業の方途めぐらしみつ

職人の暮しを思ひ廃業を考へ決断つかざるがまま

夢に見し母の言葉の明るくて覚めたる吾の慙愧と並ぶ

年々に売れなくなると言ひみつ見えたとし注文くれぬ

切味は良いが何しろ使はぬと言ふを肯ずき金を受取る

在庫の残調べに行きしが注文は後程電話で報せると言ふ

貧しくて生きるすがしき言ひたるを一言にして斥けられる

緑濃くかさなる木曾の山見えて百草丸の看板掲ぐ

掲げたる乗って残そう飯田線重なる山に雲の流れつ

小便をなしゐる間にタクシーの無くなり灼けし舗道をあゆむ

高遠は雲湧く彼方仰ぎつつ幾たび過ぎき今日も過ぎゆく

従業員募集の看板掲げしまま閉ざす扉のノブの錆びたり

かにかくに今日いち日の過ぎたりと酒はのみどを熱して下る

玄関を出でて頬吹く寒き風一夜の宿を見返りて去る

この宿で風邪ひかれてはならざると羽織をもちて走り寄り来る

盆栽に鉢を入れる老ひのゐて激しき爆音振り向かぬまま

きはまりて赤く柘榴の輝けばかへらぬ月日我のもちたり

去りゆきし月日をもてばきはまりて赤く輝く柘榴にむかふ

渾身の思ひに生きし事のなき我にむかひて幸せと言ふ

道端の草といえども身を渾て咲かせ来りし花と思ひぬ

我がさがを露はにすべく生きゆくと定まる運は異なる如し
とる人のなきうれ柿を惜しめるは大正八年に生れ出でたり
郊外に新たな駅の出来ており無人となりし駅過ぎ来る
電飾の循る光りに囲まれて吾は田舎に住めるものなり
足音に散ばりゆける金魚あり立たせる波に緋色歪みつ

むかれたる裂目に歪みごみ箱にみかんの皮の捨てられており

いちにちのセールス終へて登りゆく宿の階段歩みに軋む

英辞典読める少女と並びおりかぼそき首をのぼる血をもつ

庭隅に小さき蟻の穴のあり夕べ昏くれ来て出入りをもたず

文字を離れしばらく蠅の遊ぶさま見ており午後の室のひととき

乾きたる高き台地に生え来り水を吸ふ根の何処迄伸ばす

鳴りゐるは我にあるかな夜の底ひ眼つむりて渡る風聞く

おぼおぼと歩める我がもつ鎖背をしなはせて犬の歩めり

どぶ泥に赤き虫棲み流れくる水に頭を振りていとなむ

しろがねの光り乱るる映る月水にむかひて虫とびゆけり

つながれし船べり打てる波の音かすかに高く夜となりゆく

今日ひと日足りるとなして床に入る百合は孤りのために咲たり

オルゴール電話の中に聞え来てもちゐしみじめな言葉を匿す

照らす灯のわずかに分つ古宿の階段ぎしぎし鳴らして登る

夕闇に死魚の眼として立てるガラスに我の顔写りおり

見上げては何に生きゐるいち日のゆるゆる空を鳶わたりゆく

平凡の言葉を拒む口もてば会欠席を○にて囲む

みずからを煽る言葉も逞しき脚もつよりとこのごろにして

ともしびに手影さけつつ書き入れる数字は今日の無能を曝す^{ひな}

雲行けば雲を映して庭前の溜りし雨の水の澄みたり

ガラス戸に並ぶ水滴寄り合ひて成し重さに動き初めたり

各池の草なき面平らにて流る雲と吾をうつせり

狂ひたる夕べの虫の死にて落ち動かぬものにしじまの深し

夜の闇を裂きて気笛の音流れ吾は一日の頭垂れおり

そそり立つ岩に注連張り小さな魚船を浜に並べておりぬ

山蘭の真白き花の挿してあり旅の一夜の血を眠らしむ

空に向くカンナの花を剣とせん明日の可能に夕日燃え立つ

草の種子落ちてひそまる冬原の凍てたる工に浅き日の差す

地の中に数限りなき虫卵のひそみて冬の原平らなり

食卓にあるは食え得ぬものとして犬は揃へし足に待ちおり

うたげなす声の乱れの聞えいて宿屋の窓の夕闇ふかし

マルロオは従軍志願をなしたりき祖国を己が全てとなして
すみとうる心あらんと来し宿の闇の深さに閉されてゐる

一軒の湯宿のみある山峽の泊りし窓に茜がきえゆく

苔の秀の青ほつほつとはぐくみて岩の壁より水したたりぬ

月光は死者のごと差し幼な子は規則正しき寢息を立つる

嵐めく夕の窓の鳴り止まず商ふ明日の手帳を開く

サンプルを返し見てゐる商店主のつらつらなるは買くるるらし

草原に春の光りの満ち亘り山羊は異性を呼びて哮^ほえたり

干く潮にもまれて躍りゐし砂が干泥^{かんでい}となりてしずまりありぬ

草青く分けゆく春の風ありて山羊は生きゐる声を挙げたり

掴み合ふ議会のさまを亦写す選びし人の代表として

戦争をはげしく憎む声聞ゆこのはげしさが戦いたりき

あかあかと野火の燃ゆれば戦に友を焼きたる若き日のあり

殻を脱ぎ這ひゆく蟬は濡れており目にほのぼのと飛びてゆく空

色未だ透ける幼きかまきりの吹き来る風に斧をかまえぬ

トランプを並べて一人占へる女かすかな笑ひもちたり

無精卵産むといえども鶏の頭を高く挙げて鳴きたり

みずからが作りし巢より出で得ざる蜘蛛あり深く雲閉す下

山際にともし火ひとつ点きしより我を囲める闇となりたり

ぎわ

揆^はけざりし草の実莢^{さや}の黒く枯れ其処より冬の夕は昏るる
野に亘る陽は早春を伝えいて転ばす種子に花の眠れり
まな板に割かるる鯉の静にて刃金の光り室を走れり
ひっそりと吾が横歩む乙女子の頬よ月光の標的となる

天竜寺 二首

白き砂足に触^{ふれ}たき白さにて水平かな池を囲りぬ

組石に見とれておりし老人は組石難しとぼつりと言ひぬ

苔 寺 三首

寒き日に耐えたる苔の固き表皮茶色となりて低く地を這う
もれて来る光りは歩みに移りつつ一すじ苔の生えぬ道あり

老ひし木に光りかすかな斑を作り観光客等声をつつしむ
七百年過ぎにし時は石にさびはだらに落す冬陽の淡し

吠ゆること忘れし犬と差し来る冬の陽光を分ちてゐたり

ほて

熱りもつ吾子の寢息のやや高く灯り消したる闇に聞ゆる
行き違う列車待ちゐる窓に見え遠き灯りが一つ消えたり

威勢よく魚取出す行商の寒風にひびの入りし指もつ

夜の道に縄一匹の蛇と見えさびしや常に死の翳を負う

平らかな水に写れる裸木のこの簡潔に老ひてゆくべし

あまね

草原に洽く降りゐる日の光り蝶々は黄の翅をひろげぬ

一むらの枯草に光りしずもりて開墾田の土くれ粗し

石曝れし開墾田に風すさび冬の野徑みちは人影を見ず

鮮かな黄色と思うごみ箱にみかんの皮を捨てんと持ちて

野を行けば緑の炎君の脚夏の光りに直ぐく立ちたり

湯槽より溢れ出る湯をおごりとし大つごもりの体浸しぬ

迷はざるものの逞し草の上に寝たる土工の胸盛り上る

呼び声を止めし売り人歩み去り駅舎は午前三時の黒さ

一匹の蛙に見たる偶然死吾が影誰の影にもあらぬ

鋸の粗き切口こぐちに樹液出で惨もたざれば人生きられぬ

吸ひさしの煙草を土にたたきつけ土工は始業のつるはしをとる

我が影の伸びゆき闇につながるを踏みて昨夜の道かへりゆく

軒先に干魚吊されありしかば背後の闇に瞳移しぬ

脱ぐ服に白き埃のつくが見え宿の灯りは一人を照らす

草の道下りし所に家ありて冬の陽差しに大根つるす

凱々の雪の景色の一ところ家にて屋根の雪かきおろす

水害の跡の礫に陽の返り去年はここに家建ちゐたり

向岸にとどきし波紋見とどけて再び一人の歩みもちたり

ひらめきてライト過ぎたる夜深く再び窓はしつ黒の闇

葉先迄登し虫は暫し経て頭回らし降りはじめたり

売らるべく簞に入れられし鶏の荒くなりたる呼吸が聞ゆ

投げし石すでに底ひに沈みゐて面は波紋が呼びゐる波紋

一すじのひびの入りたるコップあり透きたる冬の光りを立たす
いくすじの枯れたる草が残りゐてかすかな風にふれ合ひて鳴る
霜置ける凍てし土にて芍薬しゃくやくの萌えて出ずべき芽をひそませる
発芽弱き種子を撰り分け落し捨つ血潮循れる掌の上

白きうなじひくつき泣ける傍に男は遠き瞳を落す

生きてゐる限りは持てる影にして壁の歪みに歪みて過ぎぬ
くず買の簞にヒルライの本が見ゆ淋しき人は何処にありし

歪みつつダイヤガラスの千の翳窓に一人の通りすぎたり

灯に狂ひ舞ひて止まざる虫なりき朝の机に小さく死にぬ

眠りゐるひまもいちじく熟れゐたりその確さに大地は生くる

吹く風に放れゆきたるたんぽぽの絮は落ちずに池を越えたり

昏れてゆく夕闇の中吾が姿見えなくなる迄立ちておりたり

読みおへて暫しを夜の壁に倚る窓を出でゆく蚊の羽音あり

灯をしたひガラスに動かぬ白き蛾の負ひある闇の深さがありぬ

差し来る朝の光りに葡萄房一つ一つの紫透きぬ

小蛙を喰へし蛙が泳ぎおり水平かな池の面に

去年より吊りておりたる風鈴をぬくなりたる風に聞きおり

誰も皆死にてゆかんを慰めとなして我等の英雄ならず

幼なるをしばし英雄となさしめて掌の中鮎のおだしき

口堅く閉して直ぐく鮎並ぶ美しき死を我は見しかな

帰る人の車の傍に寄り立ちてながく笑まふは女房に任す
洪水に打ち伏したりし草群の一夜過ぎたる擡げありたり
宿の灯に一人食みゐるお茶漬の沢庵漬ははりはりと鳴る
何の部屋も団体客にて声高し早々蒲団を被りて寝る
手洗ひの小さき灯り点る故吾背のまとふ厚き闇あり
走りゆく列車の一人と坐るとき天涯澄みて夏柑甘し
どぶ川の泥に生きゐる赤き虫夜半醒めたるときに思へり
一様に風に伏しゆくすすき原風にむかへば繁るまみあり
雨止みし雫間遠となりゆくを聞きおり夜を一人覚めゐる
部屋の中に落葉が一つ転び来て一つといふは自己を問はしむ

バス停に出ずるに近き畑の畦草の低きは吾も踏みたり

山黒き彼方に一つの灯り消え寝るべき今宵の本を閉しぬ

貝殻の七色の内部夕光に乗りし栄光の使者馳せ来る

敗れたるものは即ち裁かるる捕虜連なりて頭垂れおり

バックして笑ひ堪えゐる女あり汝と何の関りあらんや

開きゆく吾が口腔の暗ければ人にこびたる言葉の出でぬ

いつはりの優しき言葉に罪犯す女となりてつながれてゆく

幾万の飢餓を強ひ来て一人の帝が作せし佛像仰げ

干されたる菜はにちにちに水気失せ老ひし手首の如く並びぬ

平凡に生きゐることを幸せとなさむと永く勤め来りぬ

妥結せむ一線すでに定まるを机たたくは弁明のため

バイブルと利殖の本を傍に置き男変型の靴をはきたり

枯れし葉の不意に散り来て忽ちに風は宿屋のガラス戸鳴らす

そばを売る笛の細まり消えゆきて聖者の文字に瞳を返す

夜の窓を幾つか音の過ぎゆけり机に白磁の簡潔ありて

これだけと出されし金は予定よりはるかに少なく黙し肯ずく

まとまらぬ思考となりてペンを置き壁に向ひて影を動かす

覆ひ来る闇に埋まる我あれば背すじを直ぐく伸ばし立ちたり

ひき寄せる思ひに待ちしこの会ひも会へは語らん事のすくなし

ふかぶかと頭を下げる銀行員の押されたるを不意に疎みぬ

ふと投げし石に生れつぐ百千の波紋しばらく離れ難かり

ふと投げし石が砕きししずけさに百の波紋は生れて相打つ

ふと投げし石に生れつぐ百の波紋一つ一つが岸に向へり

消えてゆくものの悲しさ見むとして水澄む池に石をほうりぬ

ほうりたる石はゆらめき水深き青にそまりて消えてゆきたり

砕きたる水に光り散乱す冬の路上の絢爛として

下りたるつらの先の雫して冬の光りをふくらませゆく

成るときの人ゝの寄る辺は忘却か窓の柱に目を閉ぢてゆく

競ひ合ひ争ひ合へる家々の屋根見下せる山の澄みたり

枯れし葉と淡き光りの囁ける冬野の声を聞きて帰りぬ

生涯をかけて記すと告げて来し君も悩める一人にあらむ

執念の悲しき文字を君の書く今玲瓏れいろうと語り合へるに

憎しみし君への思ひも淋しかり見違ふ迄に写真に老ひる

犬小屋の前に密度を増せる闇我を見る目を犬は閉せり

ゆるゆると肩迄風呂に沈めおえ瞼を閉ぢて一日をおはる

頬にかかる細き氷雨のいくすじに我あり首をすくめて歩む

ストーブに寄りてかかぐる掌の温もりし後の思ひはもたず

松尾さんの車があると思ひしが左程の用もなくて過ぎゆく

藤原つよし老を養ふ屋のさび姿見えぬは見返りて過ぐ

母逝きて二た冬を経ぬアネモノの草に紛れて萌しもえ小さし

あはただしく看護婦数人駆けて過ぎ待合室は話を継がず

唐突にサイレン響きあごに手を当てゐるのみの我がありたり

幼な日に此処にどんこをとりたりき跳ねる感触今も手のもつ

ようやくに葉を開きたる五つ六つ林に降れる光り染めたり

遠山に光りのさしてさし交す梢けぶるは若芽萌え出ず

ひしめきておたまじやくしの遊びおよおり裡幾匹が蛙に育つ

豌豆えんどうの莢実さやとなりし浅みどり一夜を経たるふくらみをもつ

よべの雨をつゆに置きたる鈴蘭の一夜のみどろ増せる葉をなす

ずりさがりたくなるズボンにのろのろとガラス戸の中我歩み来る

しぎ二羽が庭に啄ばみ歩めるを押へておりし咳の出でたり

信号が赤となり来て停車する死に関するは素直なりいて

足音に蛙幾匹逃げゆきぬひしめきおりしおたまじゃくしは

呼び交す工事する声今朝のなく太き電線空に架かりぬ

びつたりと皮膚に付きたる吸盤に我が心臓の計られている

幾つかの吸盤体に付けられて計られて知る心臓をもつ

グラフ紙にあらはとなりし鼓動にて読み得ぬものを吾は見ており

正常です医師に言はれて異状なしこのあやふさに出でて来りぬ

山の辺の道紀行 十首

晴天となりたる事も善行の故にて高く笑ひさざめく

花見なぞ次の行楽奔放に拈げ合ひつつ車は走る

楠の若葉萌しもえつ落つるべき葉群は濃き蔭をもちたり

帽に陽の映えある三、三、五五の群古代の道は細かりしかな

山の峯重なり合える此処おし忍に神武邀へし人等むかのありき

背の森の未だ萌さぬ翳もえ黝くろく景行陵は柵を閉せり

信楽の陶の狸に似ると言うあれよりスマートと自負しゐたるに

蹴り殺す相撲に昔はありたりき野見の宿弥の社に詣ず

花かざし大宮人の行きし跡昼餉の酒は差し交し飲む

コーヒ―を長谷川さんと出しくる大和大原春陽亘れり
目を閉ぢて我の知らざる我のあり友の一人の訃報が届く
夜更けし居酒屋に老ひし酔漢わめの喚ける憎し喚き得るよし
そよ風の流るるままに水光る原の平らな池に出でたり
闇に向き吠えゐし犬が我を見ぬいのちの在処互に知らず
仰臥して煤けし太き梁架かる逝きたる母の声祖母の声
手の玉の書かれし紙札さされいて睦月の池は祀られており

歩こう会 二十首

ぴつたりと足に添ひたる古き靴歩こう会の朝晴れ渡る

家並は水の面に明かに映りて春陽原に亘れり

春の陽に我も生れしと思ふ迄芽吹きゐる葉の光りを透かす

自動車のしばらく絶えてたかむらの秀先に映る春陽と歩む

放送の止みたる暫しスピーカーは百の幼の声を伝ふる

村順に並びて列の歩み出ず赤き白きの服に陽の射し

枝朽ちて幹のみとなる松の木の芽吹く若葉の間に立ちぬ

急坂を登りて広き原に出ず幾軒建てる家新たに

牧草の濃き緑が拡がりて乳牛飼へる小屋をめぐりぬ

うす暗き牧舎に乳牛並びゐてひとつひとつと目を交したり

乳牛の並びて顔を覗かせるうす桃色の鼻と出会へり

登り坂となりて先頭の帽子見ゆえんえん蜿々として歩みゆくかな

水気失せ赤くなりゆく松幾つ枯れゆくものに瞳は至る

拡がりし野に点々と家ありて菜の花が見ゆ櫻咲く見ゆ

この山も舗道が着きて好評中分譲土地の看板かかぐ

まだ細き櫻に花の満ちて咲く誰ぞ花枝地に落せるは

水流るかすかな音を聞きゐしが道を曲がりて小川に出でぬ

弁当をもらひ人等拡げゆく野原に食はん笑ひ声挙げ

ここかしこ箸の動ける旺さかなり吾もおでんの竹輪ほほ張る

新しき御堂の朱に陽の映えて西中藤治壁に描けり

きらめきて春となる陽の野を亘り万の草の芽地の潜ます

花が咲きてかくもたんぽぽ多かりき風吹くままの野の径つづく

光り恋ふ虫飛び来り瞳を上げて底見ぬ闇の深さに向ふ

青深く澄みてひそまる山池の底見ぬものを瞳恋ひたり

鈴蘭の増しゆく青さ今朝もあり若き葉末に露の光りつ

美しく見ゆる位置迄絵を離るかかる形に人に向はず

たかむらの青新しく澄みとうり通ひ来る風汗を冷せり

青き幹明かに立ったかむらの蔭の下葉のかすかに動く

青まさる新たな竹の抽き出でて秀を初夏の風渡りゆく

額の汗拭ひて冷ゆるたかむらの蔭あきらかに青き幹立つ

天照らす光りの渡り木蓮の真白き花は開き初めたり

陽に透きて蔭も真白き木蓮の仰げる天に花開きたり

雨を避くる偶なる事に寄り合ひてひさしの下のそこは親し
たま

保険金にて済せてくれと自殺せし同業者を言ひて帰りぬ

鈴蘭の青き葉群は母植えぬ置きたる露の光りふふめり

一夜経て開き切りたるてっせんの青き花ある庭とはなりぬ

わがいのちの在処を問へばはつ夏のさつきの花は陽を返したり

陽に透きし萌ゆる葉群のあさ緑浴びつつ抱く言葉老ひたり

大黃の茎伸び切りて秀の赤く草生は夏に変らんとする

蜜蜂がこぼしおりたる雪柳地^{つち}しろろと昏れなずみおり

草葉より滴り落つる地下水に濡れいて夏の山路冷えたり

水を撒く庭昏れてゆき朝顔のつぼみはぐくむ闇が迫りぬ

灼熱の日射しに萎えて垂るる葉の露を置くべき夜が来りぬ

声立てて鴟^{もす}の去りゆきとたん打つ雨降る音が聞え来りぬ

採りし種子袋に入れて名を記す暫しを暗き処に眠れ

厚くなり光り透さぬ木の下葉吾にはあらぬと通りすぎたり

試験管並べられて血の立てり互に拒絶反応を秘む

風を呼び炎が煽る燃ゆる火の一とき過ぎてしずまりそめぬ

炎が呼ぶ風に炎は逆巻きて煽り狂ひて風を呼び込む

食卓に一人の時の過ぎてゆきガスの炎は透きいて燃ゆる

枝に来て暫く見廻しゐし鴟もずは動かぬ我に降りて啄ばむ

老人の顔寄せ低く笑ひあり互に病めば時に笑ひて

二杯です小児の如く答へゐる医師の前なる吾がありたり

発想は幼児の如く純ならん青年さやけき眉を上げたり

愛憎もやがて眠りに入りゆかん庭の泉の水も昏れたり

すこやかに腹の空きいて味噌汁の煮ゆるにほひが漂ひきたる

明らか吾の額を月照らし死すべく生まれし虫鳴き渡る

望月の光りに濡れし屋根を指す寄りゐる君の肩の近しも

出張に出でし日付の新聞を拵げしままの部屋に戻りぬ

雨止みし庭となり来て山茶花の花群に蜂飛びまひはじむ

昨夜より細き雨降りふくらめる雫に山茶花のはなびら落ちる

花芯より蜂が出で来て山茶花の紅きはなびら落し去りたり

蝶を呼ぶ密もちたりとこの白く小さき花をながく見ており

ないくせに自慢をすると話しおり怯まぬ心と我は思ひぬ

ダイヤガラス距てて干せる濯ぎものの白さ増し来て雨上るらし

ふかく吸ふ息となる迄すみとうる葉群の蔭に出でて来しかな

枯れて伏す古せに土を肥しゆくわらびか春の光りの亘る

ガラス戸の不意に輝き距て干すシートに空の晴れて来たりぬ

今日のみのひと日がありて月光は灯り消したる庭に溢るる

諸の葉のそよげは戦に汁の実となしたる味も忘れ果てたり^{いも}

炎昼に競ひ伸びゐる稲の葉とガラス戸距てて胃を病みており

強き罰当てる王子の大師像バス待つ老婆は詣ずと言ひぬ

おろがみに老婆行くとふ大師像罰を与ふることの強しと

石に像刻みしのみと我の言ふ利けなくなるぞと老婆答ふる^{かたち}

いにしえゆ伝へ来りて罰当ると大師の像に香華新らし

草原に満ちて降りゐる日の光り蝶々は黄の翅をひろげぬ

炎昼の光りを返す黒と金蜂は屋根越え飛びてゆきたり

ろうそくを点さんとして擦るマツチ十三盆夜祖霊の帰る

仰向けに腕を拡げて寝ねたるを暫しの我の領域とする

毒の針もりゐる蜂を産まむべく夏の日射しは地を灼きたり

一本の木に咲きてゐる赤と白原初のさつきのもたざりしもの
死んだ方がましと思ひて急坂のこの山城の石を運びし

保険金かけて殺せしとふ記事を今日も読みおり狎なれて来りぬ
肝を病む老父の為に身を売りし女の話今はあらく

銀色に光りて鰯の腹新らし秤はかりの台に掴みのせらる

休刊と知りておりつつ何がなし新聞受を覗き込みたり

新聞の来らぬ今朝の暫くを何なすとなき我となりおり

炎なす夏の真昼を鳴く蟬の命の在処に至りゆくべし

皆我に当てはまる事ばかりにて薬舗の掲ぐビラおびただし

倒産の噂を語りかけてくる声の低きは真実に似て

五、六人使へる店が危しと危くあらぬか我のめぐりの

売上の去年より減りし決算書亦取出して致方なし

領じるは足の下のみと思ふとき己が歩みに映りゆくなり

石斧に陽の降るさらば縄文のただむき隆く肉の盛りたり

よべの雨流れし跡の道乾き常より白き砂のありたり

誉田懷古 十一首

塚幾基舟木蓮を伝へたり風にすすきの葉鳴りひびきつ

陽を葬る木舟石舟作りたる舟木蓮と記されてあり

葬りたる日の神天照大神否天照御魂太神

玄界灘越えたる舟を作りたり舟木蓮神功皇后の時

神功皇后如何なる夢を結びしや玄海灘征く舟木の舟に

加古川の流れは今より清かりし続べおりたらん舟木蓮は

住吉の御旗なびかす舟木氏の此処に住ひし彼処にありし

番といふ地名は勤番の匠より出で来りし母は語りぬ

勤番の匠となりて上りしと葬りし塚も田畑となりぬ

槌の音昔も今も変らざる音とし思う番匠思ふ

そぞろゆく雑草のみが変らざる千年の前千年の後

従客たる死の難ければ吹く風のままに流れる綿雲ありぬ

吹く風にうねりもつとき輝きて秋の尾花の原はありたり

五十軒の内十軒は空家とぞ出合へる人の多く老ひたり

目のかすみ耳鳴り疲れ動悸など薬舗のポスター見覚えのあり
鬼鐘鬼般若お多福いにしえの人等は面に托し作りき

いにしえのいのち定かに神楽面裡なるものを露はとなしぬ
鬼の面般若の面を作りたる心の修羅も継ぎて来りぬ

吾の死の既に定まりあるべしと一人の室に掌紋見入る

箸折れし事の不運に連なるる祖母の言葉も棲むはせており

巢立ちたる子つばめ低く飛び交し梅の実の尻丸くなり来ぬ

はりはりとらつきよう漬を食みており好み変りし歳月知らず

定まりてあると思へば掌紋の如何なる修羅も静かにあらん

金を包みお布施と書きぬいにしえゆ伝へてくれば当然として

夕雲のくれない帯びて来るより水の面に魚とび初めぬ

くれないに光り差し来て跳ね上る魚に乱るる水となりゆく

水面に映りし茜掻き乱し魚は競ひ跳ね上りゆく

くれないの光をしたふ魚群れて水の面を乱しつつ跳ぶ

夕光は空より水に赤くして魚跳び初めぬ数を増しつつ

茜さす光りに魚の跳ねておりもてる力の限りの高く

跳ねるべきいのちにありと夕茜亘る水面魚の繁し

夕茜水に亘れり今は唯光りに向ひひたすらに跳べ

葉の濃く花の小さき朝顔が畦に咲きおり野の花として

炎天に競ひ伸びゐる稲見えて水奪ひ合ふ白き根をもつ

荒廃をしたる山峡の田の見ゆる祖先が流せし汗の量見ゆ

かさ

もぎて来し茄子をくりやに腐らしめ老ひし二人のたつきの続く
行き着きて終らぬ水や悲しみしはるかな人の声をのせたり

その指を反らして見つこの反りの如何なる性を棲はせてゐる
掌に葡萄の房を載せており一粒一粒円らかにして

朝顔の花の萎びる十一時この炎熱を屋根に働く

口開き寝ゐしならずや乾きゐる舌の覚えにあたり見廻はす

深く反る指は如何なる性棲ふ一人留守居の部屋に坐しおり

ぬば玉の闇はありけり戸を開けて今より吾の踏み出すところ

若き日にいのちを捨てん戦を持ちたることの今をも充たす

弾雨の中いのち捨てんと進みたる若かりし日を今も肯ふ

死するとも惜まぬ命知ることのなき若き等はさかしく動く

栄ゆべき祖国の為に戦ひき若かりし脚すこやかなりき

祖国ありき戦に出でてゆきたりき若き血潮に激ちゐたりき

不機嫌をそのまま出してもの言ひき母故その母今はあらざり

流れいる水の生みゆく風ありて夏のたかむら深く澄みたり

この種子の紫の花秘めゐると今掌の上を転ばす

排気ガスに黒く汚れし並木道歩める人等足早にして

風化せる石に幾すじのみの跡見えて野の花供えられおり

草原に寝たる牛は大ひなる地と一つの如く動かず

頭欠けし野の石仏の苔むしぬ此処に願ひをかけし人あり

戸を開けて今日はてっせんの花ありぬにちの我が庭と思へり

幼な手をつなぎ抱へし住吉の宮居の松も枯れて跡なし

朝顔の花にちにちに小さくて秋となる空高く澄みたり

耕耘の土返さるる田のめぐり白鷺いつか来りて立ちぬ

耕耘の土返されて出る虫か白鷺群れて上を飛び交ふ

明くるとは物の象のあきらかになり来る事と朝に立ちおり

駅口をなだれ出でたる夜の影相似て吾は吾にて歩む

盛り上るコップの酒に笑ひ声挙げて居酒屋人の群れたり

盛り上るコップの酒を一息に呑み干し笑まふ顔となりゆく

二杯目の酒のコップを持ちしより話しを交す人となりゆく

コップ酒立ちて呑みある人見えて夜の灯りに濃き影をもつ

手にもてるコップに酒の注がれて溢るときに笑まひもちたり

爆竹の音の聞えて立上る休みの午後の肘枕より

かげり来る光りとなりてかますだれ花びら閉ぢてゆくべく立ちぬ

花半ば開きしのみのかますだれ朝より雲の雨をふくみて

昼前の光りとなりてかますだれ開き切りたり一斉にして

音立てて蝶とび来り夜々を宿屋異なる我のありたり

燈し火に音立て蝶のとび来り峡の旅館に今日は泊りぬ

廃屋はくされてかびてゆく臭ひバスを待つ間の雨の醸せりかも

細き雨直ぐく降りゐる肩の冷え草の枯れたる冬原広し

砂を巻き吹き来る風に肩屈むみちのくは冬の来れる早し

おろしたる簾に倚りよみし行商婦やがて寢息を立てはじめたり

藁屋根の傾く軒に吊されてとうもろこしは秋の陽返す

実の熟れて葉の散りゆくと柿の枝渡れる風の吾には告げよ

空を飛ぶ鳥一羽のさびしさに旅ゆく吾となりてゐるかな

朝々にふくらみ増せる鶏頭の花の真紅を庭に見ており

昨夜より数へておりし朝顔の花のむらさき先ずは眺むる

ふるとなき雨が濡らして黒竹の艶も庭となりにけるかも

いつよりか降り初めおりし雨細く濡れて明るき庭となりたり

うすべにしゅうかいどうの秋海棠の花つぼみ掲げて庭の軒蔭澄みぬ

咲き初めしうすくれなひの花明り秋海棠は軒蔭しゅうかいどうにして

むらさきのうすく匂へる花並びボスは茎を長く伸ばせり

うつむきて少女の胸に鳴る動悸秋海棠はしゅうかいどうはじらへるごと

単線の止まりながき乗る列車地ひびかせて特急越しぬ

素焼の壺土より出でて千年の時より今の声交す中

水深み水すきとをる湖の底ひぞ神をすまはせたりき

捨てられし缶に雨降り百の波百の修羅をぞ立たせていたり

思ひ出の悔しきものに声出でて何事なるかと妻の間ひたり

ガラス戸につきたる霧の寄り合ひてふくらみ露となりて流るる
重なれるかなしみに似てガラス戸に付きたる露は寄りて流るる
一片の葉とはこの木に何なりし裸の梢に風の鳴りゐる

木枯が吹きて散らせる万の葉の一つ一つぞ夜半に思へり

盛んなる同化作用を営みし葉ぞいさぎよく散り落ちゐるは
夕風の膚に冷えて夏移り朝顔は種子を充たし来りぬ

障子開けて机に読みゐる本の見ゆ即ち我は帰り来しなり

朝顔のつぼみ開きてゆくふるえあかとき何処か祈られあれば
ねむの葉の合さりゆけばとうき日の母の腕もすでに忘れぬ
蒸気抜く列車の音に目が覚めて深夜の駅の広さがありぬ

草原に寝転び仰ぐ大空の広さに腕を拡げゆきたり

店前に送りし品の並びるず売り切れたるか荷ほどきせぬか

目の合ひし店主のかすかに笑みふふむこの度注文多きか知れぬ

他店より新たに入りし品並ぶ如何なる言葉の店主より出す

眠りゐる鼾聞こゆる夜を覚めて我がすぎこしは争はざりき

墓原に花溢れいる彼岸会の石碑はるけき名を刻みたり

ふと出でし卑屈なる語が地にひく己れの影をじつと見ており

拡大鏡かざして新聞読むことも当然としてにちにちの朝

我の名もやがて刻まれ忘れん蕭條として墓石立ちたり
しやうじょう

何の墓も花のさされて刻まれし石碑の名前大方知らず

石階に屈まり曲る影となる即我は登りゆくなり

何を指し空の深さに入りゆける鳥は鋭き声を残して

きはまりて紅き楓もかたはらの枯れたる草も昏れてゆきたり
利を求めめぐる旅に老しるく疲れて今宵酔ひ深まりぬ

野火赤く映ゆる農夫の手の指の土とたたかふ節立ちゐたり

燃しゐる火に照されて顔深く土とたたかふしわを刻めり

幼な子が手を引きに來し溝澄みて鮒幾匹が泳ぎていたり

朝顔を引かんとせしが明日開くつぼみ見えいて一日のぼす

スコップを入れて争ふ千の根が土の中にて交叉なしゐぬ

土の中に争ふ千の根がありぬ穴を掘らんとスコップ入れしに

亡き母が植えし水仙夕闇に頭ちいて白き花を咲かせり

食はぬ方が体によしと思ひつつ置かれし饅頭一つを取りぬ

C型のブロック並べる溝となり淀まぬ水は魚の住はず

背の灼けてパンツのみなる運転手ドア開け大きな声を出したり

急坂に後進なせるトラックの音ひびかせて砂礫摘まるる

積みおへし合図に手を挙げトラックは石伐り砕く山を降りゆく

網をもち足しのばせしこの堀も圃場整備に埋められてゆく
ほ

茜空映せる水を掻き乱しまいまい虫は舞ひつぎゐたり

浄土寺 十五首

中世のひとみしずかに浄土堂ふきたる屋根のながくのびたり
ゆるく反りひとみ果てゆく展^のび長き屋根は静かな息に見るべし
光り入る化粧屋根裏塗れる朱の限りもあらぬ高き翳なす

かなしみの底ひにすまふ目の細く阿弥陀如来は立ち給ひたり
喜びも悲しみも底深くしてあるともあらぬ笑まひをふふむ

印相は如何なる意味をもつ知らず結べる指のふくよかにして
死するべき肉に見出しとこしえの笑まひかすかに立ち給ひたり

生き死にを越えし肉^{しむら}刻みたるいにしえ人にかへりゆくべし
肉丸き指のしなひに澡瓶^{そとうへい}をもちたる像は雲に乗りたり

一刀に三拝したるいにしえの人を蹟^たたせる佛像の前

とこしえのすがた願ひし一度の刻みは三度伏して祈りし

ひと度の刻みに三度拝めるを我こそ思へとこしえ思へ

雲に立つ三尊像の背後より我等に射さん光り入り来る

肉親が殺し合ひたる鎌倉の冥想ふかし菩薩の面は

父子背き干戈^か交ふるかなしみに内を見つむる菩薩彫りたり

のぼりたる体重計の針の先生きるいのちの揺れいて止まず

置かれいるガラスの瓶の半ば程区切りて水は明るさをもつ

右足の指に歪みし靴拭きぬ明日より長期出張に出る

根を伸ばすガラスの瓶のヒヤシンス水のふふめる光りに白し

雑草のはげしき萌しをくり返し妻にこの夏過ぎてゆきたり

ゆるゆると風を孕みてカーテンのふくらみ来る涼しさにおり

陽の亘る庭となり来て鶏頭の真紅の花が庭を続べたり

ふくらめるカーテンの裾より流れ来て風は読みゐる瞳を冷す

釘打ちし鉄の臭ひの洗ひたる手に残りゐて夕餉に並ぶ

ホースより迸ほとばらしめる打水のとどく限りの口を絞りぬ

ホースの口絞りて水の迸ほとばしる唯それのみに吾が背の直ぐし

卓に置くガラスの瓶の水満ちて涙と同じ密度に光る

涙のごとガラスの瓶の水満ちて昨夜一人の卓にありたり

設計の紙に引かれし直ぐき線山を貫くトンネルにして

朝顔の葉の枯れ来り吹く風の瞳締まれる冷えをもちたり

ひしの実を採りし童は爪をあて齒をあていしが遠くへ投げぬ
残りたるいのちは赤き鶏頭の花の炎に瞳置きたり

彼処より一人とならん岐れ道見えいて変らぬ歩ゆに歩む
手を振りて岐るる道を過ぎしより我の歩みの少しく早し

走り寄る途中に切れし電話器の我に關る何のありたる

いちにちをおへて門辺に見はるかす住み在りなれし山亦草木
客の背の消えゆきしを見定めて我となりたるあくびをなしぬ

出合ふ人何の人も知る人にして村一軒の店にと通ふ

大方は老人にして村の店ながくかかりて物を撰べり

殺意なぞ誘ひもちて三ヶ月は細く鋭く光りを研ぎぬ

何買うたん買物袋をのぞき見て出合ひし人は挨拶とする

挨拶をされて出来ぬし歌一首思ひ出し得ずかへりゆくかな

遺伝子の不思議を読み居りわれが持つ遥かなる過去はた亦未来

身がもてる過去と未来の果しなし読み了へてわがおごそかに坐す

果しなき過去と未来を包みもつ我と思ひぬ今と思ひぬ

大寒の氷重なり刺し合へる光りを見つつ家路を辿る

曝ひらひ切りて白く光りを交しゐる草の堤を再び歩いむ

濡れてゐるところは青き苔保ち冬の小川の杭の立ちをり

耐へ生きて何のあらんと言ふならねストーブに掌かざしゆきつつ

大きな声に吐きたき思ひあり記憶は恥の多く残りぬ

虚ろなる言葉の交しに移りゆき残る記憶は恥の多くして

照らしたるライトに振り向き輝きし顔をしばらく保ちてゐたり

灯を消して寢床の中に背を丸め眠りを待てるわれとなりたり

山際に日を溜めてゐるなだり見え曝れたる草の光りを返す

忠霊碑風に冷えゐて弾丸に死ぬ痛みを知るは減りて来りぬ

不思議なるものの一つに裸にて走り居りしが口紅をぬる

おとがひの角の張りきし女にて如何なる由の移りもちたる

一すじの髪の乱れに目を止めし女は亦も櫛を出したり

数多き髪の乱れの写りたる少女は亦も梳くき直したり

飴なめて無駄うの時を満しをり包みもはぎし手の皮たるみて

枯草に火を放ちたり地の中に新たな春を待つもののため

炎あげ枯れたる草は燃へてをり新草育つ灰と化しつつ

灰となり新たな草の肥となる命か野焼の炎爆ひつつ

おれの悪口当然言つてゐるだろうおれも他人のあらが見えゐる

みどりごは固く握りて泣きゐたり掌紋如何なる運命をもつ

腹満たし一人の室に戻りしが机の菓子に手を伸ばしたり

八つ橋の齒に立つ音に一人なる時をしばらく充たしめてゐつ

鳥の声何処かへ去りて降る雨の音も閉せし室に届かず

根を伸ばし枝を拡げて松のありひたすら己れの大を励みて

沈丁花咲かせて厠ありたりき竹の蔭より人入りたりき

拡げたる翼のままに飛ぶ鳶を眺めてゐしがとぼとぼ歩む

テレビにて体によしと報ぜると納豆売場に人の集ひぬ

テレビにて体によしと報ぜられ鯖買ふ人の朝より多しと

八つ橋が一枚多く包みあり笑うてはならぬ頬のゆるみぬ

自転車を押して登れる老人の登り切る迄眺めて居りぬ

犬連れて歩みし土にのこりゐる二本の脚の大き足裏

伸びてゆく夕の影の頭ずのあたり闇に消えゆき我は歩みぬ

草の枯れ水枯れ大きな水管が地の堤に口開けてをり

犬の声止みたる夜中亦鳴きてうつろとなり闇を満たしぬ

針尖かに突きたき乳房のふくらみにゆれつつ女通り過ぎたり

ペンをもち頬杖つきてゐたりしがせんべいかじりて立ち上りたり

生きものの眠りに入らん闇の中背中丸めて我の寝ねをり

開きたる眼に魚の並べられ泳ぎて見ざりし天に向ひぬ

あごの骨動きて噛みし幾億回一人の男生きて来りぬ

葉のみどり縫ひて下れる光る条仰ぎて眺むるものはかしこし

降り止みし溜りの澄みゐて光陰の流るる雲を映してゐたり

水管に流れの絶えて冬久しゴム手袋が泥に乾きぬ

戴くといふ字をおもう与へたる童は掴み走り去りたり

海に迄かへらん水が降る雨の流れて草にかくれゆきたり

出会ひしは尊かりしと過ぎし日の還りて来るこの頃にして

落ちし葉は風に走りて消えゆきぬ知らざるいのち運ぶ夕暮

こまやかに空に競ひて立つ梢白きもまじり冬の陽の差す

枯れし草映れるかげと照らし合ひ澄みたる冬の池の明るし

秋の水冷えたる風に澄みとほり我は洗はん頭蓋もちたり

羽博きて羽ばたき帰る鴉ありなくて夕日に向ひゆきたり

夜の灯に鎌を研ぎゐる人が見ゆ指当て透かし亦も研ぎたり

赤き顔灯りに照し飲居りし人等次第に声高となる

世の中の知らぬ命をはしらせて逸^そらせて酒の喉下りゆく

重なりし水のひかり交し合ひ冬の朝の明けて来りぬ

霜の禾冷えに鋭く戸を開けし我に争ひ襲ひ来りぬ

夜の間を樹液が運びしふかき青朝顔の花開きて居りぬ

文字綴る力の未だありたりと点滴の管外されし後

三合の米にもならぬ程の落穂老婆は手はかかり拾ひぬ

枯れ果し原に瞳の遠くして空を分てる稜線濃し

日の光り一日届きし^{たるき}椽の枝久しぶりなる素足に踏みぬ

足交互に出して行ければ結構と日向に腰を掛けゐる媼は

移りぬしいのち極まる原澄みて曝れたる草の白く輝きぬ

枯れてゆく草に追はるる身をもてば言葉をもてば冬の陽浅し

療 養

地平より吹きくる風を一杯に吸ひて満たる胸に歩みぬ

明日死ぬか知らぬ命は常に見る山新しく玄関開く

足運ぶ今生きる事の尊く流れゐる水と歩みを合せゆくかな

渡る陽に苔の増しゆく青き色命は今を営みてをり

時ながき悩に体歪みしが神経性の難聴と書く

本町のところどころの駐車場こわせし跡を区切り名を書く

ところどころ家こわされて朽ちし枝くずれし壁に本町のあり

押し合ひてせいもん松に集ひたる記憶重ねてばらばら歩む

うどん屋に並び待ちゐし人の群還るはあると思へず歩む

映画館量販店と変りたる建物壊され砂利を敷きたり

濁りたる水平かに雲映し昨日よりの雨そりたるらし

照る月と流るる雲の争ひて更けゆく夜の窓に簾りぬ

常に見る日差しを溜むるなざりにも巻く風ありて窓を閉しぬ

十二時となりてふらりと立上る未だ空かざる腹をおぼへつ

熟れて落ちつぶれし柿も新たなるいのちを生まんをのずからにて

増してくる冷えに瞳の締めゆき空は刃金の光りもちたり

わが思慮の届かぬところに身のあるをしみじみとして覚え臥しをり

他をけなす声の次第に高くして女等手振りも加へはじめぬ

くさりたる落葉沈めて溜る水青く濁るは死の色をもつ

はるか遠くはるかに遠く飛ぶ鳥の入りゆき透ける空のありたり

届かざりし柿の実二つ夕焼と紅を競ひてそらにかかりぬ

健かな脚ある内にと希ひ^{ねが}たる死にてありにし壁を伝ひつ

深みゆく霜が染めゐる草の紅少し廻りて群るるに歩む

葉の散りて明るき林虫などの居らざる歩みすたすたとして

食ひ過ぎを慎まねばと思ひ居り腹の満ちたる日と意識を持ちて

豊か故ひもじさありと止めらるる酒瓶並ぶを眺めて過ぬ

吹きつける風に抗ひ立ちて居り本読みながく坐りゐたり

一つまみ程青き草あり後枯れて堤の景の今日も変らぬ

茜差す溜りが見えて閉せしが間もなく障子蒼く移りぬ

水草の朽ちしを底に沈ませて眼窩の如く冬の池あり

朽ちし草沈みて水の底黒くわが顔写るは捕はるに似る

山と山迫れる間に草を刈る人動きをり小さな腕

年永きかなしみ蓄むるにあまりにも細き体ぞ女泣き伏す

捕はれてわが顔あらぬ水草の朽ちゐて黒き水の底ひに

絵の鷹はわれを見をり描きたる人が伝へん研ぎし眼に

易るとこそ伝へて道士風狂の変らぬ檻樓かんろうに描かれりたり

天地の肇まる力伝へゐて鷹の眼は描かれてをり

頭に巻く布上げ口に挨拶を言ひて寒風に歩みのはやし

食ふために生れ来たかと思はせて料理番組テレビに続く

生きるために食べるとおのれに戒めぬ料理番組テレビに続く

青ふかく露草咲きてすみとほる果なき空の青と向き合ふ

噴き出でて火花の走り鍛冶工は削る鋼を当ててゆきたり

平かな水に雲影移りゐて冬は乱さん生物のなし

整はぬイメージがイメージこわしゐて電子社会の本を閉しぬ

霜に枯れ咲く木蓮の花のあり母植えられしは母の思ひ出

閉ぢ合へる氷に凍てし冬の朝いきいきとして光りはしりぬ

枯草に円ひらりな露は結ばぬと朝の原を歩みゆきつつ

雪煙上げて仔犬の走りゆき原は新たな一斉の白

起き出でて朝の冷えを知る腰に行かねばならぬ時計を眺む

承けて来し枝一つづつ奪はれて老婆は漬物撰びて居りぬ

草枯れて下に溜れる水の透き原は夕へと移りゆきたり

八王子神の御名のみ残りゐる痩せたる土を歩みゆくかな

唇を尖がらしてゐる相似形熱きおじやを並び食べをり

とけそめし霜まるまりて露結び天つ光を宿しゆきたり

土深く茎を保ちし冬葱の洗はれ白く艶もち並ぶ

永き冬護らん梢の厚き皮空に光りを争ひ並ぶ

金色に公孫紅葉の極まりてこの莊嚴に散りてゆくべし

もののいのち極まるところに死はありと公孫樹黄夕陽を透かす

極まりし公孫樹黄葉の散りてゆく木は惜しまざり我は惜しみて

一日をこもりて出来し歌幾首読み返しをり外は雪降る

朽ちて来し村の神殿集めたし宮の瓦も欠けて来りぬ

村中の神殿集め祀りたる宮も板古り欠けて来りぬ

必死といふ言葉のありきこの頃の若者使ふことを好まず

草枯れて平らな冬の径となり歩巾自在な歩みとなりぬ

散りさけし魚は芝生に跳ねてをり水を求むるおのずからにて

同化作用営むものの傘型に梢並びて冬の山あり

吹く風が運びし砂丘こまやかな砂なだらかに光り渡りぬ

審議拒否採決強行くりかへす茶番劇にて面目のため

かくしもつ殺意曝きて包丁の刃先鋭く照されてをり

殺すため裂くため人の作りたる包丁光り並べられをり

ブランドの素敵なマフラーと言ひし口何着せもらふ駄目なのねえ
更けてゆく空を掲ぐる月光りわれは一人の影法師置く

家陰の形くつきり霜残り原は輝く光渡りぬ

草枯れて露はとなりし深き谷突き出る岩の影あらあらし

縁側に陽の当りをり冬されば坐りて毛糸編み居りし母

枯れて来て変らぬ姿に草の葉はおだしき冬の光りを返す

セーターを解きて帽子に編み直し冬日に母は出でてゆきぬし
ほど

降る雨に笹の濡れ来てかたつむり動かん角を伸ばしはじめぬ

寒き風防ぎてかくす頬かぶり冬の田に見ゆ過ぎし親しさ

飛び立ちし鳥に枯葉の落ち来りいのちを抱く山のしたしさ

敷きやりし紙食ひ千切り雨空に散歩させざる犬は過しぬ

枯原の展ひろぐる白に目を上げて薄るる雲に日輪学ぶ

刈られたる稲田の広く渡りある秋の日差しにいこひゆきたり

一年の営をへし稲の白は冷く冬の陽差し受けをり

明らかな山の梢をあらしめんガラスの露を拭き取りてゆく

檻の中の獅子は大きな欠伸せり噛み殺したき退屈もてば

読み返し傍線引きて消してをり消すはたちまち十首をこえて

枯草の沈みて瑠璃展のぶ冬の池透明空に渡りゆきたり

夢に來し母の許せるほほえみにあかときの目をみひらき瞠てをり

ペンの数ふえてノートの文字ふえぬ机の上に頬杖を突く

蒼き水底を知らねば魔の棲むと古人言ひたり祖母の言ひたり

この山に鬼女棲みたりとかつかつに食ひて生きしを伝ふるならん

牛の玉の由縁問ひしが昔からと池の堤に紙札を立つ

一本の杉の木立てり永き時蓄めて來りし幹の太さに

コンクリートの鉢に植えたる花の苗夏の無惨を路傍に置きぬ

不意に足かけて來りしつなぐ犬歸さぬ力を入れて抱きつく

昼食を一人が言ひて全員が腹空き会の旅行のありぬ

刈る人も刈らるる草も陽炎の一つにゆれて春の日の照る

平かな水に梢の映りゐて腑して眺むるものは細くわしき

濡れて来て白き光りに枯原を直ぐ貫く舗道となりぬ

耕して得たる金にて買増せし田畑と祖母は幾度も言ひぬ

忘れゐしアルミの脚立枯草に光り走らせ冬の痩せたり

一夜にてかねもちの木の萎えたりと失なふものをもつものの声

打ち合ひて騒げる木末隣ゐていとなむものの必然なれば

青く澄む播磨山脈見てゐしが果なき空に瞳移しぬ

線香の煙くゆれる六地藏我が家の香も炷ててゆきたり

草枯れて畦が区切れる田の並び人は競り合ひ耕しきたる

四十億年以前に物はくりかへし自己組織化を進め居りしと

弾丸たまそれし一糶センチ程の命にて測るべからず死との距ては

熟れざりし無花果黒く乾きゐて過ぎたる我の生に関る

わが命圀へる皮膚をもちたればかなしみは外へもらさずにをく

庭隅に小さくあきし穴ありて知るべからざる内部うちをもちたり

アラブの神キリストの神と争ふもそこに石油が湧きて出る故

常に抱く滅びの慄へ事の無くノストラダムスの年の過ぎしも

子午線の町を訪ぬとバス頼み縁求むる人の集ひぬ

子午線が通れる故に子午線の通れる町を訪ぬと集ふ

枯萱のされしが白く揃ひゐて光れる風にそよぎゆきたり

抑へゐし襟を放して雲かげの風と去りゆく枯野を眺む

感傷も何時しか消えて葉の散りし林明るき歩みを運ぶ

雨水の溜りに雲の流れるを見てをり人も束の間の生

降り止みし溜りに雲の移りゐてこの世にあるは他者に関する

葉の散りて裸の墓石となりたりし寒きを眺めわれは立ち居り

逃れたき足の早みて風寒き道に帰らん歩みを運ぶ

まさやかに畦に区切れる田の並び人営みし歴史はくらし

冷ゆる日も土の暗きに営みしリボスの角芽出でて来りぬ

舗装裂き出でて来りし草の芽のやわらかなるを畏みてをり

流れゐる水は草にと消えゆきて明日を知らざるわれの止まりぬ

襟抑へ心閉せるわれとなり冷えたる道を帰り来りぬ

流水の運べるものに目は止めて僅に残る白髪のあり

夕映えは来りて我を包みしが影の黒きに残し去りたり

冬の雲重なり空に満ち来り支ふに細く木末立ちたり

水涸れてわずかに残る青き籐夏をはびこるあふみどろとこそ

坐りゐし距て狭めて語りゐし人等肯き立上りたり

並べらる目差しの窩の大きくて修羅に生きたる荒き海あり

明日の昼食はんと仕舞ひ置きたるを一つ味見て半ば食べた

戸を開ける我と小舎出る犬の目と合ひしが風あり散歩を止める

冬の山掘りてうもれるけものらの山と一つの眠りもちたり

水底に光りの届き朽ちし草沈めてゐるをあばきて止まず

朽ちしもの底に沈めて水ありと届く光りのうごめきてをり

生きものの動くを見れば飛びかかる犬あり食はるる肉もちたれば

昼食べて満せし腹の空となるそのどんらんを愛し酒飲む

口開けて腹に落ちゆく闇のあり限りのあらず欲望すまふ

夜の廊下区切りて照らす灯りつけ眠らん室に我は歩みぬ

夜の橋の巾を灯りの照しゐて闇に流るる水音ひびく

行き詰る思ひは煎餅かじりゐて更けゆく室にペンを持ちをり

寺の名の残る地下より出でて来し飯碗などを埋め戻しをり

奥山の峯けぶらふは雪降りぬひしひし緊めてくる冷え

耕転機去りたる後に土盛りて粗き影なす変貌ありき

永遠を誰も恋へるとおもをふに世間の噂告げて帰りぬ

倒産が亦ありたりと告げくるる己にあらぬ笑ひをもちて

齒応への確にかへるを我としてものを食べつつ本を読みをり

風が来て落葉のあらぬ道となりながき変転の歩みの運びぬ

中に簾^すがありとひかざる大根の常なき迄に太り来りぬ

食へざればひかぬ大根のび上り日々に太るを憎む目に見る

与へても要らぬと言ひし幼なりきよう食ふようになりておりたり

水に触れ身を翻へし空に飛ぶつばくら黒き羽根光らせる

一せいに飛び立ちゆきし群雀羽音充ちたる冬空となる

雲低くこめて来りし街となり陰影淡く人の歩みぬ

灰色に雲こめ来り色淡き吾となりゐて通り過ぎたり

倒産をしたる商社のビル高く空抜き目に立つ社名掲ぐる

世を離る思ひは世も亦離りゆく切実にして会合に居り

剪定をなしゐる男てっぺんに届く梯子をかけてゆきたり

揺れゐつつ梯子を登る男ゐて見てゐるわれの脚がゆれゆく

撓ひもつ梯子を平気で踏む男見てゐるわれのすねがふるへつ

冬空に羽音満して群雀翔ちてゆきたり一斉にして

目の前を猫が走りて買物の二つをすませ一つ忘れぬ

一人ゐる時の淋しさ潜めもつ女出会ひし肩を打ち合ふ

出合ひたる女は肩を打合ひぬ黙せる時より出でて来りし

倒産の商社は街並抜きてをり野望と破綻は背中を合す

命困ふ皮擦りむきて血の出るを絆創膏にて修理なしたる

疑ひをもつ目鋭く大きな開きをもちて画面の映す

窓ガラス打ちて唸れる風の吹き防がん構え祖より継ぎぬ

冬の日のすき透されて土黒く淡き日差しを蓄めてしずもる

頭より続くくちばし太くして鴉は塵場に舞ひ下り来る

近寄れる我を見てゐし大鴉まだ距離のある横を向きたり

長き日を稲が育ちし冬の土返して人は空気通はす

ガラス戸に昼を動かぬ雨蛙生きゐるものの喉を動かす

横向きし頸に刻めるしわ見えていつより斯かる太さのありし

閉したる冬の夕を風めぐりつぶやきなどを集めるがごと

生きの日の残り少なくなり来り庭の一木貴かりける

踏みて揺るる梯子を渡りくる男大地の如く足を出しをり

ひらめきて窓のガラスをライト過ぎひろげしままの原稿白し

半分に破りそれを亦半分に破りなかなか想まとまらぬ

ひらめきて過ぎたるライトを恋ひたれば再びの闇にわれは立ちをり

草朽ちし土に草生え年を継ぎおのれ養ふいのち眺むる

真夜さめてうかび来りし歌一首忘れ去りしは出来のよからし

降りつみて白一斉の朝の雪歩み難しと扉閉しぬ

折々に障子を撫でる黒き影干せるタオルに風吹くらしき

渦巻きて樋門に水の吸はれをり落葉をもてる高原の池

抜かれたる樋門に吸はれゆく水は渦巻き拡げて音立て初めぬ
義経をジンギスカンにならしめし幻想いかなるかなしみの果
風と風木と木の打ち合ふ音ひびき暴風警報の夜更けてゆく

夏日差す海に集へる人無数一つの海に遊びもちたり

戦に山を走りし熱き血のめぐりし脚も細くなりたり

夜の空を挙げたる音に風荒び蒲団の中に手足小さし

口多き老婆が日向に並び居り顔合せては返すもならず

羽根急ぐ鴉の窓を通り過ぎ夕映え凋み暮れて来りぬ

小さな池と思ふに現はれて消えてゆく波限りのあらず

無人駅に園児等来り声溢る溢るるものよりもたぬその声

不意に出でし声にあたりを見廻して恥ずる思ひ出この街にあり

耕転の後つけてゐる鷺の群曲れるときに一せいに飛ぶ

坂道の途中にしばし止まりぬ年々足の衰へはやし

限りなく小さなわれとならしめて夜の空吹く風の猛りぬたけ

夜の空は一つの音に風猛りたけ蒲団の中に我の小さし

濁りたる青きを拒む目となりて街裏の溝に沿ひてゆくかな

おもむろに霧退きて差す光りわれは日輪の歩み運びぬ

旅に出て一人の歩みもてるとき人の目幾重に囲む常なり

吠えてゐし犬が消えたる家蔭の底なき闇となりて更けゆく

頭垂れ今日生きてゐる歌作る大動脈瘤を内にもちたり

壺立ちて壺の中なる闇のあり空虚な用として作らるる

新聞紙束ねてゆける過ぎし日のありて残らぬ記憶に立ちぬ

幾人の老婆が日向に並びをり憂ひのあらぬ忘れし顔

千両の赤が掲ぐる庭あかり冬の空気は澄みとほりたり

いたいたし魚を殺さん羽を研ぎて差せる光りにかざしゆきたり

うららかにわたる光りを眺めをり電波過密の空間と聞く

他者拒む釘を打ちをり野良猫が出入りをなせる庭隅の垣に

千両は今日の紅掲げゐて冬の光りの澄みとほりたり

ふくらみて地雷に似たる形成し草は次々殖えてゆきをり

眠れざる時を惜めば起き出でて書齋の灯りを点もしゆきをり
月越せば破れ捨てらるカレンダーの美女ほえみて我に向ひぬ
如何ならんもののあるかと首伸ばしガラス歪める映像なりき
明日に着る服整へて掛けてをり知らぬいのちと書きし手をもて
ひたすらに生きしおのれを肯へばわれゆえ貧しく生きし父母
ひたすらにおのれに生きてうから等を困惑させし経歴をもつ
尻上げてペダルを踏める少年は坂の頂き見つめてゐたり
枯れし葉は底に沈みて冬の水流るとあらず澄みとほりたり
木蓮の白きつぼみが挙げたり霜置く匂水母の植えたり
歩み来し野原の景色帰りたる室に言葉となりて整ふ

帰り来て散歩のイメージ整ふる室を言葉の工房として
整ふる言葉にイメージ鮮明となり来て室に散歩の終る
窓ガラス拭きぬし男去りゆきて山に梢のこまやかに立つ
わが知らぬわれの命を包みたる皮膚と病にたふれたる後
山並が囲ひてわれの村のあり果なきものは仰ぎ眺むる
年月が太り加へてゆくしわを刻める顔に我は見上げぬ
鋸に挽きて直ぐなる枝となし耳に挟みし鉛筆取りぬ
ながく引く声に鳴きある犬のゐて囲へる棚に肢を掛けをり
幼な日に遊びし山は草覆ひ杉木倒れて入るを拒みぬ
氷張る三日が過ぎてもやい立つ今日の日差しを歩みゆくかな

追腹を切るよろこびを記す遺書武門の面目ありたりし日の

おいしいと言ひて画面にはほえめるテレビ相似る顔をもちたり

手袋の手を握り緊めて歩む冷え氷は白き光りはしらす

假借なく枝の剪られて陽の量の増えし葡萄の下歩みゆく

草を食む犬の欲るままに立ち止まり背中に温とき冬の陽満たす

つけらるる怯えに後を振向きて見えざる怯えに夜の道歩む

はしり出し妻の行く手に目をやりて曇る空より引く雫あり

腰上げてペダルを踏める少年は未来を駆けんとかがみ伸ばす

コンピュータが促す合併三人の社長は固く手を握りたり

三人の社長ほほえみ手を握る内の二人の降格すべく

合併に三社の社長手を握る人員淘汰の吹き荒るるべし

一人の社員に幾人の家族あり人員整理発表を報ず

ふくらみてきたるつぼみに目のゆきて忘れてゐたる梅の木ありぬ

草にじり土を抉^{えぐ}れるわだち跡冬の夕べはそこより昏るる

蔭濃く茂りて居りし葉の散りて林は浅き光り遊ばす

爪切りに剪りて過ぎたる日々のあり机の上に散ばりてゆく

爪切りに剪りたる爪を集めをり老ひては捨てんにちにちにして

漫然と生きたる日々の爪の伸び切りしを捨てにゆくべく集む

棚に伸びて枝のばさりと落ちてゆき多^さに稔^さらす剪定進む

多^さに得ん鉄の刃鳴り用捨なし葡萄畑に剪定すすむ

潮引きし砂に見えぬ穴の数底につなぐと浸みしは眺む

今日もまた刑事の大きく研ぐ眼映りて人の欲するは何

石の角正しく並び墓石は葉の散り落ちし冬山に立つ

石肌の冷えて居らんと距離をもつ眼に香蕾もちて立ちたり

何の家も瓦輝き建ち並び戦知らぬ脚伸び歩む

戦の諸部などと書く文字も見えなくなりてよぼよぼ歩む

埋め立てて魚ら滅びし空間の人行き交す高きビル建つ

地球儀に赤く塗らるる細き島我の何処とペン先に指す

奪ひしと言はば言ふべし海なりしところに広く土を敷きたり

地球儀を廻してわれの在処指す住めば都よ地球の最中よ

落武者は斯くの如きか野焼せし樗の木棘の焦げしを鎧ふ
霞ひくはるかな山となり来りきらめく光り原にこめたり
登りつめし尺取虫は頭ふりそらに伸びしが下りはじめぬ
窓に鳴る風音空に走りゆき肩を屈めて扉開きぬ

うまし子をうごとと名付けひたすらに内なる闇に向ひゐたりき
粗き皮割れて老ひたる木に寄りぬいたはり合はん心さびしく

火と煙競へる畦を若者の姿はしりて冬草焼かる

はしる火に春を呼ぶ使い焼けてゆく枯れたる草の空になりけり
黒き灰畦を覆ひて去年の草焼けたる跡を歩みゆくかな

きらめきて春来る光りの差しゐるを農婦素直に眸に写す

ひとみ

未知の地は囲む山並越えあり散歩にちにち歩む道ゆく

のぞき込み何買うたと手に触れて還れる我に老婆の笑まふ

しろがねに春ふくらめる猫柳女活くべく鋏入れたり

茫々と白一色の霧の中凝らしてかすかな道に歩みぬ

覆ひゐる霧の中なる白き闇凝らしてかすかに歩む道見ゆ

枯草は呼びを挙げて焼かれをり葉を巻きくず折れ地に伏して

つじまりはコップの中の嵐と思へど口を挟んでしまひぬ

噴き上り光り散ばす水見えて昇りしものは落ちねばならぬ

丸き苔踏みて歩めり目の限り追ひたる日々もかすみ来りぬ

ながながと老女祈れり悲しみにつながりゆける凝固せる顔

寒風に服のそよぎつ釣糸を垂れて一人の男立ちをり

さすらひて古代祖先は生きたりと一人の室に不意に思ひつ

吹かれぬし枯葉それぞれ落ち着きて舗道の風は冷えを増しぬ

この川に魚釣りたりき橋の上歩み通へる今も覗きつ

陽炎の立つ草畦を見てゐしが歩まん足のをのずからにて

茜差す光りとなりて水面魚は競ひて跳びはじめたり

辺りなき室に光りの渡りゐて眼は光りを命となしぬ

茜差す光りに魚の跳び初めぬ太古に陸へ移りゆきしは

茜差し跳びゐる魚は水離る光りと眼の関り知らず

茜差す光りに魚の跳べるときわれは内なる飛翔と出逢ふ

命よ命水の面に茜差し魚の跳躍おのずからなる

しろがねの鱗光らせ魚の跳び差せる茜は空に亘りぬ

日差し蓄めふくれし夜具のふかぶかとはやき眠りを誘ふらしき
いざな

太陽の日差しにふくれもち温く弾むが体に添ひぬ

温き日差しの恵みしみじみと干してふくれし夜具に寝ねたり

白梅のふくらむつぼみ玄関にありて出てゆくわが目を洗ふ

霧こめて足許のみが見えてゐるわれとなりゐて歩みゐるかな

春の陽がペンの先より照り出でる字がどうしても浮び来らぬ

満目の原の緑を眺めをり獄ごうの記録読み了へし顔

春近き野のきらめきを竹内ひさる言へりそれより心して見る

いつくると思ひて居りし日となりて如何に過しか記憶をもたず

昇りゆく風を見上げし少年は空の高さに瞳置きたり

せきれいは己が姿の写りたるミラーに亦も飛びつきゆきぬ

一つだけとつまみし菓子が半ばなく食べてはならぬ蓋を閉しぬ

襟に首埋めて女歩みたり後は人見ぬ冬の風吹く

冬の日を溜めたる垣の温しさに人待つ時を過しゐるかな

きらめきを増しゆく空に春来り野原に今日の緑ふくらむ

目は止めて楓の木木の紅を差し春となりたる光り渡りぬ

こまやかに楓の梢差し交し艶もつ赤き樹液登りぬ

艶をもつ赤き樹液の登り初め楓は細き梢来組みたり

のぼりゐる赤き樹液に艶を増し楓の梢こまかく交す

戸を開き他者にむかはん背を伸ばす我となりゐて歩み出でたり

この花を愛し育てし人逝きぬ艶をもちたるわかき紫

紫の花艶やかに開きゐて植えたる人の三年過ぎたり

暴くなく過し来りし秘密なぞ保ちし皮ふのたるみ来りぬ

冬の畦露はに礫白く曝れ蹴り得ぬ老ひし足に過ぎたり

窓ガラスにひらめくライトの間の遠くなりて眠らん夜の更けたり

みひらき

瞳 きし大きな目が迫り来て殺人事件の画面の進む

一日の総括として更けてゆく夜のしずけさに坐りて居りぬ

更けてゆく夜にかすかな呼吸なす闇はあたりを包みて来る

発つ鳥の飛翔はかつてわが腕にありしや果なく青き大空

日を溜むるなざりのありて目の通ひ風吹く池の堤過ぎたり

白陶の狐が灯りに浮びゐて夜を祈れる人の動かず

置くつぼが堪ふる内の闇ありて一人の室に坐りゆきたり

澄とほる水の傍を歩みをり一期と言はむ今とし言はむ

澄む水の流れの起伏凜々と言葉輝き反りて来る

春の日を蓄むるなざりに人食ふる土筆は土を被きもたぐ

枯草の秀のすり切れて春近し釣人歩む細き畦道

蒼黒く去年の腐れを沈めたる水底に青き新芽が覗く

食はれざりし大根土よりのり出でてきらめく春の光りとなりぬ

すき焼きにつぶすと人等語りをり負けたる鶏は片隅に立つ

煽られてビニールシートははためきぬ風の狂へるままに狂ひて

音響を受くる螺旋に耳の立ち頭脳に暗く穴下りゆく

新聞に幼児虐待の報せらる平和日本の象徴として

白梅の白鮮やかに照り出でて日差しの渡る空を見上げぬ

歩み来し足横たへてながながと犬は眼を閉しゆきたり

細き目を開けたる犬は亦閉ぢぬ温き日差しの庭にわたれり

脛の骨斯く大きくて病み長き男が杖突き歩みて来つ

暖かき日差しずかに土に沁む蓄めてはげしき命生ふるや

届きたる日差しの中に忘れぬし拡大鏡が光りを返す

照り出でて室の明るみ密密とあまれしたたみのいぐさの青し

捲き上り音立て壁にたたきつけビニルシートは風に揉まるる

全てみなさざめとおもうしずけさは細くなりたる食に由るらし

足跡のくぼめる雪の降り初めて証は斯の如くはかなき

あかし

辛うじて寒さに耐へて歩めるを声をかけられからだふるひぬ

休みなく動きて居りし蟻潜む土の上踏み歩みゆくかな

流れ出る汗の力威何時か失せ顔にハンカチ当ててゆくかな

積上げし過去の手なれに運転手わが目危く荷物積みゆく

更けて来て窓を固める深き闇眠りの中に入りてゆくべし

夜の灯に深く頭を垂れて居り成せしことなく過ぎし日をもつ

うまきもの断ちたる僧の直ぐき首我はうつむき表をひからす
つながりてはるかなものに届く目をもつと晴れたる星空見上ぐ
億光年眼の繋ぐわが在処至り難くて星光降りぬ

両手突き脚をふん張り立ちたるに坐るときにはへたへた早し
究まりは宇宙を包む我となり星の光りの瞳に届く

笥より流れて落つる水の音収めて庭の木蔭のふかし

癒へたりと思ひ居りしに起き出でて機能と変らぬ足に歩みぬ

皮膚一枚距ててもてる内の閤動脈瘤の陰画ネガを説かれつ

春嵐に操る鳶の滑空の広げし翼おのずからにて

高く低く春の嵐を飛ぶ鳶の広げしままに翼あやつる

朱の受益のぼりゐるらし差し交す楓の梢に春の日の差す
待ち兼ねしものの競ひにつくぼうし頭を出して春陽わたる

短
歌
評
釈

五月号批評

うらうらと春陽浴びるもうれしきに桃咲くが見え試歩を延ばしぬ

石井 文子

病後の歩みをおのずから誘われる姿が見える。そこに自然と人生がある。但し表現として三句捨てたい。詩は頭脳に訴える以前に心臓を動かすのでなければならぬ。

風花に枯れしかと思う万作の黄を点したり庭先明るく

井上 ふくゑ

明確な感動の把握は迫力をもつ。万作の黄は作者の胸に点ったのである。初句と結句捨てたい。特に結句は四句と重複している。

父逝きて一年過ぎし職場には使ふことなき前掛けありぬ

大久保 公江

よい素材を捉えている。四区更に父との関りを追求したい。このままでは感動が希薄である。

わが内に長逗留の風神よお出かけ召され春はうらうら

片山 洋子

風神は所謂風神雷神の風神ではなくして風邪の神であろう。自己を外に置いた作品で面白い。苦患を離れて苦患を言葉で遊ぶ余裕は豊かな人間性に裏付けられた知性である。但し、一首目と二首目、手の内が見えすいて強い作りされた感がある。

耳澄まし待ちゐる吾に子の来れば必ず吠ゆる犬しづかなり

小紫 博子

氏の作品には世界の中の自分を見ている静けさがある。宜長流に言えば己のはからいを捨てている。或は三十五キロという病弱の故であるかも知れない。併し嘆きを超えて自己を充足させているのは立派である。

目覚めよき朝なり凜と巨大なる白菜一つ両断にせり

しつかわ 碧

爽やかさの感じられる作品。切られたのは白菜であると共に迷いであり、妄念であり、ストレスである。若さとは年令ではない。爽やかさである。過去を裁断して未来に生きる力である。成功した一首。博識な作者は兎もすれば舞文となり勝ちのように思う。

人影の絶へし桜の葉の下をひたすら前向き歩幅を伸ばす

田村 喜久子

上句を受けての下句の前向きに伸ばす歩幅は自分の内面に向かっている。自分の世界の拡大への歩みである。聡明さの感じられる作品。二首目も二句もたっているが佳品。

小魚を商う女一人居て路上は暫し賑はひとなる

松尾 鹿次

よく見る田舎の風景。三句やや難あるも繁雑に疲れた心が洗われるような感じは捨て難い。

逢はばやと思ふ一人還らざり烏賊の臍抜きて吾は生きゐる

藤木 千恵

三月号の作品であるが誰も取り上げなかったし、感銘したのでゆるして戴きたい。運命を超えて運命を受用し、静かに自己肯っている作品。

芭蕉の名作「秋深し隣は何をする人ぞ」の一步手前迄来ているように思う。

感銘歌評釈

「今どこにいるの」と電話をかけている女ありここはどこなのだろう

松村 由利子

昨年の入院中に見舞ってくれた誰かが、短歌研究の平成九年十月号を置いて行ってくれた中の一首である。私はそのときからこの結句のもつ含蓄に深い興味を覚えたのであるが、この度失くしていた雑誌が出て来たので一寸書いて見たいと思う。

戦後は私達にいろいろなものを与えてくれた。併し与えられたということは亦失ったことである。寺山修司の歌に「マツチ擦る束の間海の霧深し身を捨つ程の祖国はありや」というがある。与えられた自由と引換えに、行動規範の根源であった国家の規範性が音立てて崩れたのである。それは封建社会の否定として、血族の主体としての家庭も一蓮托生の運命であった。私達は東方の君子国として、君の臣、親の子、夫の妻、兄の弟として家族の紐帯ひもに生き、そこに知・情・意を養ったのである。私達はその上に自分を見築いたのである。自分の過去も未来もそこにあったのである。歴史の奔流は一気にそれを押し流したのである。私達は行動の據点きょてんを失ったのである。「ここはどこなのだろう」、私はそこに自己の展望の中に過去と未来を収め切れない作者の不安を見ることが出来ると思う。作者

は途方に暮れているのである。そしてそれは作者一人が抱いている問題ではなくして、日本人全てが背負っている課題であると思う。社会倫理、家庭、教育等日々 to 報ぜられる世の中の乱れの大凡はそこに根幹をもつと思う。勿論それは世界の退化ではない。自由は与えられたものではなくして世界がわれわれに要求してくるものである。世界の中にあったこの我が、逆に世界を包むものとしての人格の樹立を要求してくるものである。併しその径庭は永い。私は作者の心情はその直観の上に立つものであると思う。この一首に共感した所以である。

名歌鑑賞

冬のしわ寄せゐる海よ今しばし生きておのれの無残を見むか 中条ふみ子

そこに生ける屍がある。作者は凄惨な運命に直面しているのである。斯かる生の深淵にもがきつつ、作者の表現意欲を盛り上げた精神は何処から来たのであろうか。

キエルケゴールは其の著「死に至る病」に於いて「絶望したか」と問う。絶望は精神の死に至る病である。しかし精神においては病む者が健康であると説く。生命は死を持つものが死に打克つ努力である。釈迦も苦悩した如く、生・病・老・死は、どうすることも出来ない生けとし生けるものに負わされた運命である。それはあらゆる人間の希望を打砕く屹立する鉄壁である。我々の生涯はこのどうすることも出来ないものに打ち当って砕けていく営みである。而してこの打ち当って砕けた営みの蓄積が歴史であり、痕跡が文化である。斯かるものとして我々は悲しみの上に喜びを打ち立てていくのである。而してその極鉄壁によつて自分を見出す自分を見るのである。回心である。鉄壁に生きるのである。生・病・老・死に対するのではなく、それをあらしめるものに生きるのである。回心とは自己を無にして自己をあらしめるものに摂取されることである。斯かるものとして大なる苦悩に

生きるものは、大なる力量をもつものである

井上実枝子著 歌集草の雪評

この歌集を読んで第一に感じたことは、より大なる生の相すがたを見ようとする作者の純なる魂である。渾身の力をもつて、如何に生きるべきかを問い、自己の根底に至ろうとした努力である。氏の作品はみかしほでも特異のスタイルをもっていると思う。それは氏の作品が日常から生れるのではなくして、見出したより大なるものをもつて日常を光被しようとするところにあると思う。観念先行と言われるものである。作品に多く思い入れから始まるのはそれによると思う。表現は本来観念の創出である。具象とは日々の営みの中に現われ消えるものである。それを統一するものが観念である。希望、理想、愛、神、永遠等、その反はんとしての絶望、不安、悪魔等がそこに見られるのである。それによってわれわれは自己を見、自己を実現するのである。その観念を具象の構成によって表わすのが写生である。観念によって具象を切り取り、直下に表わすのが象徴である。私は作者は深大なるものの直下の啓示を求めて象徴的手法へ傾斜して行ったものと思う。併しそれは観念と具象との結びつきが飛躍し易い、素晴らしい作品が生れると共に、言葉が空転したり、意味不明となりやすいと思う。併しそれは亦本書の魅力であるかも知れない。以下いくつか好感

のもてる作品を取り上げて短評を加えたいと思う。

嫁菜草野蒜^{のびる}も萌えば苦がかりし記憶の中の煮浸しの味

苦がかりし煮浸しの味というとき、当時の生活に読む者の思いを至らしめる

仁清の茶碗の絵の具に触るときさかしき女を席に振るまう

人は神の前に無である。束間心によぎったさかしらを捉えている。その自省に作者の深さがある。

わが欲りしモヘヤのコート得たる娘の背の柔らにも撫でて足らうも枝の華やぐ

あれか、これか、迷いは近代知性の所産と言われる。枝の華やぐは作者の心象を捉えて遺憾ない。掌は手であろう。

つづまりは吾のペースぞ得体なき鳥を五色に飛ばすチギリ絵

奔放にイメージを飛翔さす作者が見える。ペースは適切でない。更な言葉の選択をスプレーに落ち来し夜の冬蠅の動かずなりしまでを見定む

動かずなりしまでと間を置いた時間、そこに読者をさまざまの思に誘う。高度な技巧である。

孤独なる胸のうつろに聞きたがえ癒えのうちそと夫の声なし

作歌に即しての芸術表現の考察

私の所属するみかしほ短歌会では年一回の吟行旅行を行う。日常の中に埋没して鈍磨しがちな感覚を、新しい風物に触れることによって鋭くし、創作力を高めようすると共に会員相互の親睦を計ろうとするの狙いである。併し目に新しい景色に嘆声を発しながら即詠というのは中々難しいようである。私たち山中に住む者が海辺に出ると果てしない紺碧の広がり、鳥の緑を縫って走る白塗りの船など全てが詩のように思える。誰も同じ思いなのであろう。ノートとペンを持って思い思いに逍遙している。「出来たか」と尋ねると大概の者が「いや一首も出来へん」と答える。それは何時の旅行も大同小異である。それでは吟行旅行は無為な企画かと言うとそうではなくて、翌月のみかしほには皆さんの堂々たる作品が並んでいる。直接に目に触れる時よりも家に帰ってからの方が歌が作れるようである。それは何うゆことなのであろうか。私はこの問題を追及する前に、見るとは何うことをたずねてみたいと思う。

禿鷹は三千来の高所にあつて地上をありありと見ることが出来る。併し見るのは野ねずみのみであると言われる。鯛は深海にあつて人間の五千倍の明らかなでものを見ることが出

来ると言われる。併し見るのは敵と餌となるものだけであるそうである。生物の機能は生存すべくはたらくのである。生命は内外相互轉換的である。外を食物的環境として收穫し、喰うことによつて身体と化し、生命を形成してゆくのである。環境は收穫によつてわれわれが生きる所として我ならざるものである。それをわれとすることによつて生きるのである。私は目とは斯かる内と外、我と食物を繋ぐ生命の機能であると思う。内外相互轉換としての内の身体が外との関わりを持つべく身体を切り拓いたものであると思う。外はそより流れ入り、内はそこより流れ出るのである。そこに生命形成のはたらかは生まれるのである。『心そこにあらざれば目前にあるとも見えず』という言葉がある。私たちが見るとは漠然と見るのではない。注意作用に於いて見るのである。注意作用は生命形成の内的欲求より生まれるのである。内的欲求とは身体よりの要求である。動物はそれを個体保存としての食、種族保存としての性に持つ。それに対して人間は歴史的形成である。技術的である。技術的とは無限の過去の経験が現在に蓄積されていることである。われわれの身体は手を持つ身体であり、言葉を持つ身体である。言葉は記憶として無限の過去を持つところより生まれ来たったのである。手は経験の蓄積として物を製作するところより現れ来たったのである。われわれが見るとは、斯かる身体の要求として見るのである。無限の時間

を内に蔵し、制作するものとして見るのである。無限の時間はその一々に表象を有し、製作はその表象より現在の要求に於いて選択し結合することによって新たな現在の表象を樹立するのである。われわれが見るとは単に対象を見るのではない。現在の形相を見るべく注意作用を持つのである。否対象そのものが内外相互転換の内容として、現在の生命形成に参与するものとしてあるのである。

私は短歌の創作も斯かるところにあると思う。見るとは現在の表彰形成として見るのである。現在の表象形成には無限の過去の表象の選択と結合を持つのである。それが短歌に於いては万葉であり、古今であり、新古今近であり、字生であり、象徴である。人麿であり、赤人であり、実朝であり、定家、俊成であり、子規、茂吉、白秋、佐太郎であり、更に無数の古今、現在の歌人である。更に縁量として西洋語であり、漢詩であり、世界各国の詩、哲学、小説、宗教、随筆である。あらゆる文字、思潮、社会形態である。或は私はその中の一つも知らないと言われる方もあるであろう。もちろん誰もその全てを知るものではない。併し世界はその全てを包含するものとして、その動転に於いてわれわれに生存の対決を迫ってくるのである。われわれは世界の中に生き、世界を映すことによってあるものとしてそれに対するのである。われわれの意識は世界意識を映すことによってあるの

である。世界の現在の動きを映すことによって現在の行為を決定するのである。見ることも斯かる行為の中の一つとして見るのである。注意作用は行為に於いてあるのである。見るとは自己の現在が世界の現在として、世界の現在が自己の現在として自己形成的に見るのである。製作的生命として社会活動的に見るのである。短歌を作るのも短歌の世界の中の一人として面々相對するところより作るのである。我と汝そして無数の彼の作歌するものの歌の世界を作るのである。そしてそれは現在の世界を作り丁史的現在を現すということである。

私は吟行旅行に於いて様々なものを見ながら歌が作れないと言うは本当に見ていないのであると思う。本当に見ていないとは自己形成としての目がはたらいっていないことである。家に帰って暫くすると歌が出来るといふのは真に見るといふことが熟成されたのであると思う。対象を離れて一人となることによって、無限の表象が対象に集合し、取捨選択されて結像を持ったのであるとおもう。もちろんそれは直観的である複雑な過程を経るのではなくてイメージとして現前するのである。イメージとはこの我に現れた世界像である。それは世界像としてこの我ではない。而してこの我によってのみ現れるものとしてこの我である。それは無限の過去の蓄積を持つものが現在の内外相互轉換の一時点に於い

て出現した世界像である。私はそこに見るといふことの完成があると思う。短歌は文字によつて表現されるが故に選択は言葉によつてされ、文字によつて結実するのであると思う。歌人は作歌に於いて見ることを完成するのである。作品は凝固せるイメージである。一人居るときに作品が出来るといふのは、素材に面している時は素材に目が奪われて無限の過去の表象を有する自己の生に表象の結集と選択が出来ないのである。素材を離れて一人になった時自己の生による素材の展望をもつのである。展望をもつとは、過去の無数の歌人のイメージの結像としての作品、過去の自己の作品が表象として結集し選択されて素材と自己の唯一結像が実現するのである。斯かる実現が作品である。故にわれわれが歌を作るとはこの我が作るのと共に、無数の過去の歌人への応答として作るのである。イメージは無数の表象の呼び交しとして生まれるのである。斯かる応答は一人となることによつて持つのである。素材としての外に向かつていた目は、一人となることによつて内に向くのである。内に向くとは過去の無数の表象の統一体としての自己に向くことである。そこに内と外が一つになるのである。イメージが生まれるのである。作品とは現在の内外相互転換を素材として一体としての自己に摂取したということである。それは飯を食つて身体を作ると軌を一にするものである。

私は斯かるイメージは内面的發展をもつものであると思う。イメージには内外相互轉換の結像としてあるものであり、轉換は一つの完結体でなければならぬ。そのことはイメージもまた完結体でなければならぬことである。それに対して發展は次のものへの連続をもつことである。斯かる發展は如何なるものであるか、私はそこに呼ばれるということがあると思う。多くの人々は同一の環境、風土の中にあつて集團生活を営むものである。技術は集團の中より出で来たつたのである。技術は環境を人間の生存に合わせて變革するものである。環境の變革はまた人間の間柄の變革を伴う。情緒は身振りとして身体の行動に相即するものである。内外相互轉換の身体の現われが情緒である。間柄の變革は新たな情緒が生まれることである。それが人間の生存に合わせて變革されるとき、その行動を多様にあわせてより大なる情緒をもつのである。變革を担うものは前にも述べた如く言葉であり手である。より大なる情緒が言葉に現れた時に詩が生まれるのである。それは一人の天才に形成的生命がおのずから具現するのである。世界の底から湧き出てくるものが一人の天才を衝き動かすのである。呼ばれるとは同じ風土、環境にあるものとして、その詩を聞くことによって自己の内深きものの目覺めをもち、自己の情緒による世界表象をもつのである。自己のイメージを持つのである。情緒に於いてより大なる生命に参加せんとする

のである。動物に於いては一匹がよく全種を代弁する。併し技術的形成としての人間に於いては一々がその端末を有するのみである。而してイメージは一端末が世界に繋がるどころより出てくるのである。呼ばれるとは他者の異なった自己が同じ世界の形成者であるところより来るのである。私はそこにイメージの内面的發展があると思うのである。短歌は日本の風土に生まれたイメージの發展である。古今は万葉の連続ではない。変革された社会の世界感情によるイメージの出現である。古今的イメージを万葉的イメージより喚起されるのである。斯かるものとしてイメージの内面的發展は植物の成長の如き形をとるものではない。多様の統一の形をとるのである。

ホモサピエンスとして現在の人類は全て六十兆の細胞と百四十億の脳細胞を持つと言われる。人類は幾万年に亘って同一の構造をもつ生体である。風土としての自然も長年月に亘ってほぼ同一の構造を持つのである。われわれの営みは斯かる構造をもつものの日々の繰り返しである。われわれの営みの根底には大なる同一があるのである。技術をもつとは、斯かる繰り返しが蓄積として変革を持つということである。繰り返しが変革を持つとは、営みが営みの中により大なる営みを持つということである。斯かるより大いなる営みにイメージが生まれるのである。私たちは日本人的特質と、日本の風土に営みをもち、はたら

くことによってより住み良い世界を作るところにイメージがあるのである。内に新たな映像を作ることが出来るのである。同一なる主体と環境が否定と肯定によって新たな自己像をもつそれがイメージである。故にイメージの根底にはより大なる世界への歩みというものがない。そこには常に同一なる主体と環境が、主体と環境の対立に於いて新たな相に転じてゆくということがなければならない。斯く転じてゆくものが経験の蓄積としての技術的製作である。世界が自己の中に自己を見て行くのである。そこに内面的発展があるのである。

私は作歌ということも斯かるものであると思う。明石の浦の歌は柿本人麿がもったイメージを言表したものである。私達ははその歌を読んで明石の海に対したとき、海は単に眺めた時より深い情緒の内容となる。航く船、霞む島に対して様々の感慨が生まれる。言葉を加えた目となるのである。併しそれは人麿の持ったイメージと同じではない。距てた時間の持つ変容に於いて生まれたイメージである。喚起されることによってわれわれは現在に生きるイメージを持つのである。否イメージとして現在の自己が顕現するのである。もちろん喚起されるということはそれによって内なるものが覚まされるということである。そこには人麿のイメージの再生ということがなければならない。作品の言葉が宿すイメー

ジの追体験ということがなければならぬ。併し距た時間はわれわれの目を人麿の目とならしめることは不可能であると思う。もし人麿と同じ目を持つことが出来るとしてもそれは唯、形成的生命の無駄に過ぎない。私は過去のイメージによつて新たなイメージが喚起され、喚起されたイメージが更に次のイメージを喚起するのをイメージの内面的發展というのである。

イメージが内面的發展をもつには現れるものが全て異なつたものでありつつ一なるものがなければならぬ。呼び呼ばれるのは一つの共通の世界にあることによつてのみ可能である。一つの世界を作るところにわれわれは呼び交わすのである。私は斯かる同一が前に書いた根底的同一であると思う。根底的同一の上にあるとは、根底的同一の現れであるということである。呼び交わすとは根底的同一が自己の中に自己を見てゆくのであり、内面的發展とは根底的同一の自己形成である。われわれは斯かる根底的同一を日本の特殊として持つのである。呼び交わしは世界がするのではなくして我と汝がする。それは形成として空間を持つ。それが日本の風土に生きるわれわれの形成である。同一の風土、同一の生体のもつ営みは無限の繰り返しである。日々、年々の繰り返しである。蓄積は斯かる繰り返しの上にもち得るのである。イメージは繰り返しのもつ蓄積の映像である。呼び呼ばれ

る形成の聲は斯かるイメージより出てくるのである。それは変化に於いて根底的同一が自己が自己を見る現われである。時間、空間は根底的同一が自己を見る内容である。一々のイメージは根底的同一の顕現として時間、空間を超えるのである。超えるとは内に持つことである。そこに永遠があるのである。イメージがイメージを喚起するとき、そこには時間、空間を超えた同一があるのである。縄文土器がわれわれのイメージを喚起する時、縄文土器は永遠の現在として生命の息吹を持つものとなるのである。

イメージがイメージを呼ぶとは、一つの形を決定することである。風土と人間が内外相互轉換的にあるということは形を持つということである。風土と人間と言うことすら自己が見出した自己の形としてあるのである。風土と人間が内外相互轉換的に形成するということとは、風土と人間が映し合うことである。風土が環境として、人が環境を映し、環境が人を映すということがものの形が生まれるということである。製作的生命として獲る、争うといったことに古来より幾多の形が生まれたであろう。その中から最も合理的なもの、簡単にして効果的なものが選択されてきたのであろう。斯かる形は二つの方向をもつということが出来ると思う。一つは環境的方向としての物の形成である。一つは人の方向として主体の形成である。人は環境を映し、環境は人を映すものとして、物の製作は新たな主

体の組織を要求するのである。新たな組織に生きる者は新たな行動を持つものとして新たな感情が生まれてくるのである。そこに新たなイメージが生まれてくるのである。斯かる組織が無限に内と外を映し合うものとして発展を持つとき、そこにおのずから言表への衝動が生まれてくるのである。斯かる言表が主体の形である。形は固定されたイメージとして新たなイメージを呼ぶものとなるのである。

最古の残された文字は詩であると言うのを讀んだことがある。昔宮廷詩人というものがあつた。宮廷詩人とは、帝王の徳を作るために詩つたと言われる。詩うことそのままが帝王の徳になったと言われる。帝王とは新しい生産体制の統率者である。帝王を詩うことは生産社会の主体を見出すことである。詩はれた様々の徳は生産の発展が主体に要求するものである。そこに湧き出でてくる無限のイメージがある。生産の増大は帝王の威徳の増大である。もちろんこの場合、帝王とは一個人としての人間ではない。生産の主体面を象徴するものである。見出された形は生産の増大と共にイメージを生み、イメージは形へと転化されて更にイメージを生むのである。私は日本の短歌も斯かる展開を持つのであると思う。帝王の徳は更に拡大されて自然も亦其の徳を帯びるものとなり、人間全てが愛を持つものとなったのである。私は斯かる生命を育てるものが日本に於いては和歌であつたと思

う。それは初め誰かが作った。そしてその型式は日本の風土に生きるものの情感を最も表しやすいものだったのである。最も豊かにイメージを生み、育む型式だったのであると思う。イメージより生まれた形は逆にイメージを生むのである。斯かるものとしてわれわれは歌を作り、歌はわれわれの心を作るのである。形は根底的同一が自己自身を見るのである。

イメージは内的表象であつて物ではない。それは内外相互轉換としての内の方向の展開である。具体的生命形成が内が外を映し、外が内を映すものであるとき、何処までも外を映す内としてあるものである。内が外を映し、外が内を映すのが、無限に蓄積的であるとき、内の無限の展開が外となり、外の無限の展開が内となるのである。外が内の無限の展開をもつとき物が生まれ、内が外の無限の展開を持つときイメージが生まれるのである。世界形成は外によつてあるのでもなければ内によつてあるものでもない。何処までも内外相互轉換としてあるのである。相互轉換とはお互いが自己自身の発展をもちつつ、自己自身の発展がお互いの発展となるのである。物が物を作り、イメージがイメージを生むのである。而して物が物を作ることがイメージが生まれる基盤となり、イメージがイメージを生むことが物が物を作る基盤となるのである。イメージは歴史的形成の根底的同一が変化

を映す方向に、物は変化が根底的同一を宿す方向に成立するのである。

故に歴史はその本質に於いて、物の形成にあり、変化、変遷にあるのである。過去の中に葬られてゆくのである。それに対してイメージは呼び合い、語りかけるものとして時を超えるのである。物が朽ちてゆくのに対し、イメージは生に連なるものとして、生まれ来るものと呼び合うのである。何万年か前にネアンデルタール人が墓前に初めて花を捧げたときより人間は人間になったというのを読んだことがある。涙に於いて、微笑みに於いて、われわれは時を超えた直接のイメージを交わすのである。呼び交わすことによってわれわれはより明らか、より深いイメージを持つ。他者の涙、他者の微笑みを見ることによって。涙や微笑が自他を超えた全人類の深さより来るのを知るのである。そこに自己の内より情感は溢れるのである。それが表現であり芸術である。私は芸術は歴史の変遷に対して朽ちざるものとして、時の変化を永遠より裏打ちするものとして物と共に歴史的形成を担うものであると思う。

巨石

この巨石は昔より、この墓地の入口にあつて草藪に覆われ、若し人語が聞こえたと飛び出して「負うてくれ、抱いてくれ」と言つて追いかけてくると伝えられたものである。古代に於いてはあらゆる災は死霊の仕業であり、死霊に所在を知られることは最も恐怖すべきことであつた。

この度墓地拡張に伴い、打ち棄てられていたのを古代思考と伝承の失われるのを惜しみ、ここに建立して永く保存されることを期するものである。



長谷川利春 これまでの出版

「満七十才記念 随想・小論集」

「初めと終わりを結ぶもの」

「自覚的形成」

「自己の中に自己を見るもの」

「長谷川利春遺歌集」

長谷川利春 遺歌集Ⅱ

遺作展

平成二十一年四月 発行

著 者 長谷川 利春
発行者 長谷川 利路

〒六七五―一三六―

兵庫県小野市住吉町一八九―二

電話（〇七九四）六七―〇〇三四

印刷 兵庫県小野市来住町八八三―二

株式会社 吉本宝文堂